



Rational DOORS の管理



*IBM Rational DOORS*

*Rational DOORS の管理*

*リリース 9.2*

本書をご使用になる前に、207 ページの『特記事項』の章に記載されている一般的な情報をお読みください。

本書は、**IBM Rational DOORS バージョン 9.2**、および新しい版で明記されていない限り、それ以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

© Copyright IBM Corporation 1993, 2010.

# 目次

<b>第 1 章 : はじめに</b>	<b>1</b>
表記規約 .....	1
関連マニュアル .....	1
<b>第 2 章 : 計画</b>	<b>3</b>
どのようにデータを構成するか .....	3
接続の計画 .....	5
登録ユーザーの計画 .....	5
命名規則 .....	6
ユーザーのタイプ .....	7
管理者ユーザー・アカウント .....	8
登録グループの計画 .....	9
命名規則 .....	9
ユーザー・ログインの制御 .....	10
パスワードの使用 .....	11
システム・ユーザー名の使用 .....	11
システム・ユーザー名が一意でない場合 .....	12
Rational DOORS ユーザー名の入力操作の有無 .....	13
ログイン失敗時の対処 .....	14
<b>第 3 章 : ロケールと Unicode のオプション</b>	<b>17</b>
ロケール .....	17
日付と時刻の記録方式 .....	17
サポートされているロケールと形式 .....	18
ロケールのユーザー・オプションの更新 .....	19
テキスト属性のロケールの変更 .....	19
レガシー・データの扱い .....	19
表示設定 .....	20

<b>第 4 章 : ユーザーとグループの管理</b>	<b>23</b>
ユーザーとグループの管理のためのオプション	23
ユーザー情報の表示	23
ユーザーの作成	24
ユーザーの編集	30
RDS 使用時のユーザーの編集	36
ユーザーの削除	39
ユーザーの無効化と有効化	40
特定のユーザーの無効化と有効化	41
すべてのユーザーの無効化と有効化	41
グループ情報の表示	42
グループの作成	42
グループの編集	43
グループに対するアクセス制御	45
グループの削除	46
グループの無効化と有効化	47
<b>第 5 章 : RDS の設定</b>	<b>49</b>
Rational Directory Server について	49
RDS のモード	49
Rational Directory Server を使用するための Rational DOORS の設定	50
Rational Directory Server へのユーザーのエクスポート	51
<b>第 6 章 : データベースの管理</b>	<b>53</b>
データベース・プロパティの表示	53
データベース名の変更	56
デフォルトの表示設定の変更	57
ログイン・ポリシーの変更	57
パスワードの制御	62
パスワード再認証セッションのタイムアウト	63
パスワードの制限	64
パスワードの再利用	64
コマンド行ログインの制限	64

辞書の管理 .....	65
ログイン履歴ファイル .....	66
メッセージのブロードキャスト .....	67
今日のメッセージの設定 .....	67
電子メールの設定 .....	68
データベース・ルートへのアクセス権の変更 .....	70
ディスカッションの許可と不許可 .....	72
<b>第 7 章：プロジェクトの管理</b> .....	<b>75</b>
プロジェクトの作成 .....	75
プロジェクト開始ウィザードの使用 .....	76
フォルダーからプロジェクトへの変換 .....	79
プロジェクトからフォルダーへの変換 .....	80
プロジェクト・プロパティの編集 .....	81
プロジェクトへのアクセス権限の変更 .....	82
プロジェクトの削除、削除の取り消し、およびページ .....	84
<b>第 8 章：データのアーカイブと復元</b> .....	<b>87</b>
ディスクのバックアップ .....	87
Rational DOORS アーカイブ .....	88
サーバ・アーカイブの有効化 .....	88
モジュールまたはプロジェクトのアーカイブ .....	89
モジュールの復元 .....	92
プロジェクトの復元 .....	94
ユーザー情報のアーカイブと復元 .....	97
データベース全体の復元 .....	99
<b>第 9 章：電子署名の管理</b> .....	<b>101</b>
電子署名について .....	101
電子署名の機能 .....	102
署名とともに保存される情報の種類 .....	102
ラベル指定子タイプの作成 .....	104
電子署名の設定 .....	104

---

アクセス制御の設定 .....	105
<b>第 10 章 : Intelligent Traceability を使用したインクリメンタル 開発の管理</b> .....	<b>107</b>
インクリメンタル開発と Intelligent Traceability .....	107
インクリメンタル開発 .....	107
Intelligent Traceability .....	108
Intelligent Traceability とベースライン・セット .....	109
ベースライン・セット内でのリンクの振る舞い .....	109
ベースライン・セット外でのリンクの振る舞い .....	113
ベースライン・セット定義とは .....	115
ベースライン・セット定義の作成 .....	116
ベースライン・セット定義のコピー .....	118
ベースライン・セット定義の名称変更 .....	118
ベースライン・セット定義のアクセス制御 .....	119
ベースライン・セット定義の表示 .....	119
ベースライン・セットの作成 .....	120
ベースライン・セット内でのモジュールのベースライン化 .....	121
「ベースライン・セット定義」ダイアログ・ボックスを使用する方法 .....	121
新しいベースラインをモジュールに作成する方法 .....	123
ベースライン・セットを閉じる .....	123
ベースライン・セット定義の削除 .....	125
<b>第 11 章 : チェンジ・プロポーザル・システムの管理</b> .....	<b>127</b>
チェンジ・プロポーザル・システムの作成 .....	127
レビューのためにモジュールを構成する .....	128
チェンジ・プロポーザル・ユーザーの表示 .....	130
新しいチェンジ・プロポーザル・ユーザーの追加 .....	131
チェンジ・プロポーザル・ユーザーのロールの変更 .....	132
チェンジ・プロポーザル・ユーザーの削除 .....	133
チェンジ・プロポーザル・システムの削除 .....	134



<b>第 12 章：データベース・サーバーの管理</b>	<b>135</b>
サーバーのパスワードの変更 .....	135
Windows 上でのパスワードの変更 .....	136
UNIX 上でのパスワードの変更 .....	136
サーバーの起動 .....	137
Windows 上でのサーバーの起動 .....	137
UNIX 上でのサーバーの起動 .....	139
サーバーの停止 .....	141
Windows 上でのサーバーの停止 .....	141
UNIX 上でのサーバーの停止 .....	143
Windows 上でのサーバーの削除および再インストール .....	143
追加のデータベース・サーバー・サービスのインストールと削除 .....	144
マシン上で動作しているデータベース・サーバー・サービスの確認 .....	145
サーバーのポート番号の変更 .....	145
サーバーに接続しているユーザーの確認 .....	146
Windows 上で接続しているユーザーの確認 .....	146
UNIX 上で接続しているユーザーの確認 .....	147
不適切な接続およびロックされたファイルの解消 .....	148
Windows 上でのクリーンアップ .....	149
UNIX 上でのクリーンアップ .....	149
dbadmin コマンド・スイッチについて .....	151
<b>第 13 章：パーティションの管理</b>	<b>153</b>
パーティション .....	153
同期 .....	155
3 つのファイル .....	156
パーティション定義の作成 .....	156
パーティション定義の表示 .....	159
パーティション定義の編集 .....	160
パーティション定義の削除 .....	162
パーティションのエクスポート .....	162
エクスポートされたパーティションの表示 .....	164
インポートされたパーティションへのアクセス権限 .....	164

パーティションのインポート.....	165
インポートされたパーティションの表示.....	166
インポートされたパーティションの詳細の表示.....	166
インポートされたパーティションにデータを追加.....	168
インポートされたパーティションの同期.....	170
エクスポートされたパーティションの同期.....	171
インポートされたパーティションのリターン.....	172
パーティションの再結合.....	174
パーティションのリカバリー.....	176

## **第 14 章 : Requirements Interchange Format 179**

RIF.....	179
レビューまたは編集用にデータを送信する.....	180
RIF ファイル内の Rational DOORS データの受信と編集.....	181
RIF 定義の作成.....	182
RIF 定義の編集.....	185
RIF 定義の削除.....	186
RIF パッケージのエクスポート.....	187
RIF パッケージのインポート.....	187
RIF パッケージのマージ.....	189
RIF ロックのリカバリー.....	190

## **第 15 章 : Rational DOORS データベースの整合性の管理 191**

Rational DOORS データベースについて.....	191
データベース整合性チェッカーの動作.....	193
データベース整合性チェッカーの実行.....	193
ログ・ファイル.....	199

## **第 16 章 : トラブルシューティング 201**

Solaris 9 で FLEXnet License Manager (lmgrd) を起動できない場合.....	201
復元したデータ・ディレクトリーがロックされている場合.....	201
電子メール通知が届かない場合.....	201
Rational DOORS に Word 文書をインポートできない場合.....	202

---

<b>第 17 章 : サポートへのお問い合わせ</b>	<b>203</b>
IBM Rational Software Support へのお問い合わせ .....	203
前提条件 .....	203
問題の処理依頼 .....	204
その他の情報 .....	206
<b>第 18 章 : 特記事項</b>	<b>207</b>
商標 .....	209
テキスト・プルーフ・システム著作権 .....	209



# 1

## はじめに

IBM® Rational® DOORS® 9.2 をお買い上げいただきありがとうございます。この製品は、ユーザーの要求を取り込み、検証し、管理する機能を備えた強力なツールです。

本書では、Rational DOORS をどのように設定し、管理していくかについて説明します。主に Rational DOORS のプロジェクト管理者およびデータベース管理者を対象としています。また、このマニュアルは「Rational DOORS 入門」をすでに読まれていることを想定しています。

### 表記規約

次の情報を表すのに、以下のような表記上の規約が適用されています。

書体	意味
太字	重要項目、ボタンやメニュー等の選択項目。「はい」をクリックして続行します。
斜体	マニュアルのタイトル
Courier	コマンド名、ファイル名、ディレクトリー名、コンピューターからの出力。 <code>.properties</code> ファイルを編集します。
>	メニューの選択。「ファイル」>「開く」と選択します。つまり、「ファイル」メニューを選択して、「開く」オプションを選択します。

### 関連マニュアル

次の表は、マニュアルとその内容の説明です。

内容	参照先
Rational DOORS バージョン 9.2 の新機能	Rational DOORS README ファイル
Rational DOORS のインストール方法	<i>Rational DOORS</i> インストール・ガイド

内容	参照先
Rational DOORS のライセンスの設定方法	<i>Rational Lifecycle Solutions</i> ライセンス・ガイド
Rational DOORS の使用方法	<i>Rational DOORS</i> 入門 <i>Rational DOORS</i> の使用
要件の記述方法	要件管理の手引き
Rational DOORS の設定と管理方法	<i>Rational DOORS</i> の管理
DXL プログラミング言語	<i>DXL Reference Manual</i>
Rational DOORS を他のアプリケーションと統合する方法	<i>Rational DOORS API Manual</i>

これらの資料は、Rational インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/rsdp/v1r0m0/index.jsp>) にあります。

この章では次の内容について説明します。

- どのようにデータを構成するか
- 接続の計画
- 登録ユーザーの計画
- ユーザーのタイプ
- 管理者ユーザー・アカウント
- 登録グループの計画
- ユーザー・ログインの制御
- パスワードの使用
- システム・ユーザー名の使用
- ログイン失敗時の対処

**注意** システムをセットアップする前に、導入計画を行ってください。導入計画に費やした時間は、後の工程での時間節約につながります。

## どのようにデータを構成するか

扱うデータにどのような階層構造を作りたいか考えてください。プロジェクトやフォルダー、モジュールを作成する前に、階層構造を描いてみてください。

次の点に留意してください。

- ドラッグ・アンド・ドロップや切り取り / 貼り付けの使用により、データベース・エクスプローラー内でデータの構造を再構成できますが、ユーザーがデータにアクセスしているときにはデータの構造を再構成できません。
- アクセス制御を使用して、誰が何を参照できるかを指定します。データベース・ルートへのアクセス権を持つユーザーの制御については、70 ページの『データベース・ルートのアクセス権の変更』を参照してください。
- データベース・エクスプローラー内でモジュールを参照するには、ユーザーはデータベース・エクスプローラーの左ペインの

ルート・ノードから対象モジュールにかけて読み取り権限が必要となります。

データベース・ビューでは、データベース・ルートからモジュールにかけて読み取り権限が必要です。

プロジェクト・ビューでは、対象モジュールを含んでいるプロジェクトからモジュールにかけて読み取り権限が必要となります。

- データベースの最上位レベル（データベース・ルートの直下）にモジュールを作成することはできません。

最上位レベルには、フォルダーまたはプロジェクトしか作成できません。

- モジュールとプロジェクトはアーカイブできますが、フォルダーはできません。

アーカイブと復元については、87 ページの『データのアーカイブと復元』を参照してください。

- アーカイブされたモジュールを復元する際、復元されたモジュールではすべてのインリンク、アウトリンク情報は失われます。モジュール内でのリンク情報も失われます。
- プロジェクトをアーカイブ、復元したい場合には、他のプロジェクトへのリンクを含んでいないことを確認してください。

プロジェクトを復元する際には、復元するプロジェクト内に作成されているリンク情報は保持されます。他のプロジェクトに作成されたリンクの情報は失われます。

プロジェクト A とプロジェクト B の間にリンクがある場合、A と B のプロジェクトを含むダミーのプロジェクトを上位に作成してください。ダミー・プロジェクトをアーカイブ、復元する際には、プロジェクト A とプロジェクト B の間のリンク情報は保持されます。

- 各プロジェクトの名前は、データベース内でそれぞれ固有のものとなります。

プロジェクト内のデータの位置は、プロジェクトからのパスによって一意に識別されます。

- データベース・エクスプローラーでプロジェクト・ビューを使用すると、プロジェクトはすべて左ペインの最上位レベルに表示されます。サブプロジェクト（プロジェクトに含まれているプロ



ジェクト)の場合でも、左ペインに最上位プロジェクトとして表示されます。

同じデータが複数表示されることを理解してください。

- プロジェクトはパーティションできますが、フォルダーはできません。

パーティションの詳細については、153 ページの『パーティションの管理』を参照してください。

別のプロジェクトにもモジュールを持つパーティションを作成する際には、2つのプロジェクトを持つダミー・プロジェクトを作成する方法が考えられます。

アウェイ・データベース (パーティションされたデータをインポートした側のデータベース) のユーザーは、パーティション内に含まれているすべてのリンクを見ることができます。

## 接続の計画

使用できるデータベース・サーバーへのクライアント接続数には上限があります。この数は、Rational DOORS データベース・サーバーを実行しているオペレーティング・システムによって異なります。

オペレーティング・システム	最大接続数
Windows	450
Solaris	180
Linux	900
HP-UX	360

この上限を超えた場合、データが破損する危険性があります。

## 登録ユーザーの計画

IBM® Rational® Directory Server (RDS) を使ってユーザーの管理を行います。詳しくは、49 ページの『RDS の設定』を参照してください。

一般的には、Rational DOORS データベースの各ユーザーに対して個別のユーザー・アカウントを作成することをお勧めします。同じユーザー名を複数のユーザーが共有すると、データに対してどんな変更を誰が行ったかを追跡できなくなりますので、お勧めできません。

例外として、一般的なゲスト・アカウントをビジターや短期間 DOORS を使用するユーザーのために作成する場合には、「読み取り」専用ユーザーとして作成することをお勧めします。

**注意** 短期間 DOORS を使用するためのユーザーでも、編集を行いたい場合には別のアカウントを作成することをお勧めします。

## 命名規則

ユーザー名に対してどんな規則を用いるかを検討してください。ユーザー名はいつでも変更できますが、Rational DOORS はユーザー名の変更情報をデータベース履歴として記録していません。例えば、ユーザー名を **John** から **John Smith** に変更した場合、**John Smith** が新しいユーザーであるか、名前を変更されたユーザーであるかを、データベース履歴から知ることはできません。

ユーザー名を考える際、次の点に留意してください。

- ユーザー名は一意である必要があります。  
同じユーザー名を複数作成することはできません。また、ユーザー名とグループ名も同じ名前を使用することはできません。
- ユーザー名には、英数字、スペースそして句読点を使用できません。
- ユーザー名に英数字を用いる場合は、大文字と小文字は区別されます。**John Smith** と **John SMITH** は別のユーザーとして識別されます。
- 個人の名前をそのままユーザー名に使用します。例えば、**John Smith**、**John J. Smith**、**Smith J J**、**Smith, John** (英国、営業) などです。日本語も使用できますが、ユーザー名には英字を使うことをお勧めします。
- ユーザー名には例えば **John Smith** のように、わかりやすいものを使用します。**JS** や **John** では、ユーザー名から実際のユーザーを調べることが困難です。アクセス権を設定する際、ユーザー名のリストから選ぶこととなります。わかりやすいユーザー名を使用していれば問題ありませんが、わかりにくいユーザー名の場合、誤ったユーザーにアクセス権を与えてしまう可能性もあります。  
また、Rational DOORS はデータベースの変更履歴の中にもユーザー名を使用しています。わかりやすいユーザー名は、データベース履歴を調べる際に、誰が何を行ったかを知る手助けとなります。

- Rational DOORS の画面にリストされるユーザー名は常にアルファベット順に表示されます。John または Smith という名前のユーザーを一括してリストに表示したい場合を考えてみましょう。それぞれの場合に好ましい名前は **John J Smith** と **Smith John J** のどちらでしょうか。
- システム・ユーザー名を使用しない場合、Rational DOORS にログインするときにユーザー名を入力する必要があります。ユーザー名を忘れないように注意してください（11 ページの『システム・ユーザー名の使用』を参照）。

## ユーザーのタイプ

ユーザー・アカウントを作成する前に、そのユーザーにどのタイプを使用するかを決めてください。ユーザーのタイプは、そのユーザーがどんな操作を実行できるかを制御します。例えば、「プロジェクトを作成できるか」とか「データをアーカイブできるか」などです。

選択できるタイプを次の表に示します。

ユーザーのタイプ	実行可能な事
標準ユーザー	Rational DOORS のデータの操作
プロジェクト管理者	標準ユーザーの権限に加え、プロジェクトの管理に関する以下のことを実行可能。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• データのパーティション</li> <li>• データのアーカイブ</li> <li>• グループの作成と管理</li> </ul>
データベース管理者	プロジェクト管理者の権限に加え、以下のことを実行可能。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• プロジェクトの作成</li> <li>• ユーザーの作成と管理</li> <li>• データベースの管理</li> </ul>

ユーザーのタイプ	実行可能な事
カスタム・ユーザー	標準ユーザーの権限に加え、以下の中から与えたい権限を選択することが可能。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• プロジェクトの作成</li> <li>• データのパーティション</li> <li>• データのアーカイブ</li> <li>• グループの作成と管理</li> <li>• ユーザーの作成と管理</li> <li>• データベースの管理</li> </ul>

**注意** ユーザーのタイプはいつでも変更できます。

ユーザーのタイプに加え、ユーザーが何をできるかということアクセス権で設定できます。例えば、プロジェクトの作成権限を持つユーザーでも、作成権限を持っているフォルダー(またはプロジェクト)にしかプロジェクトの作成をできないように制限することもできます。

プロジェクトの削除およびページ権限は、フォルダーやモジュールの作成、削除、ページと同じようにアクセス権で制御されます(言い換えれば、プロジェクトの作成のみがユーザーのタイプで決定されるということになります)。

## 管理者ユーザー・アカウント

Rational DOORS の各データベースには、すべての操作を実行できる**管理者**というユーザー・アカウントが1つ存在します。このユーザーのタイプは、データベース管理者です。

管理者アカウントは、すべてのアクセス権のチェックから除外されます(すべてアクセス可能ということです)。

管理者アカウントは、緊急時にのみ使用するべきです。例えば、誰もDOORS にログインできなくなった場合や、他のユーザーがデータベースにアクセスできなくなってしまった場合です。

管理者アカウントはすべてのアクセス権のチェックから除外されるため、次の点に留意します。

- 管理者アカウントに対する権限を誰が持つかに注意する。
- 他のユーザーが簡単に推測できないパスワードを使用する。

- 定期的にパスワードを変更する
- パスワードを忘れないようにする。

管理者のパスワードは、管理者でログインした場合にのみ変更できます。管理者のパスワードを忘れてしまった場合には、Rational DOORS のサポートに連絡してください。

ユーザー名を表示する画面には管理者ユーザーは表示されません。なぜならば特別なアカウントだからです。通常のユーザー・アカウントのように使用しないでください。

パスワードの最小文字数を変更する操作を例に、管理者のユーザー・オプションを変更する方法を以下に説明します。

1. 管理者ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. まず「ツール」、次に「オプション」タブの順にクリックし、ユーザー・オプションを変更します。

「ツール」>「ユーザーの管理」は使用できません。これは管理者ユーザーがリストに表示されないためです。

## 登録グループの計画

このトピックでは、グループを作成する前の考慮事項について説明します。グループの作成方法については、42 ページの『グループの作成』を参照してください。RDS を使って、ユーザーとグループの管理を行います。詳しくは、49 ページの『RDS の設定』を参照してください。

グループとアクセス権については、「DOORS 入門」を参照してください。

個々のユーザーにアクセス権を設定する作業は非常に時間がかかります。データのアクセス権を設定する際に、グループを使用することによって時間を短縮できます。

それぞれのユーザーは複数のグループに所属できます。登録できるグループの数およびユーザーが所属できるグループの数に制限はありません。

## 命名規則

グループ名を考える際、次の点に留意してください。

- グループ名は一意である必要があります。

複数のグループに同じ名前を使用することはできません。グループ名には必ずユーザー名とは異なる名前を使用する必要があります。

す。同じ名前のグループとユーザーを使用することはできません。

- グループ名には、英数字、スペースそして句読点を使用できません。
- グループ名に英数字を用いる場合は、大文字と小文字は区別されます。**Test Boston** と **TEST Boston** は別のグループとして識別されます。
- 将来的にテストやエンジニアリング用のグループが複数必要になる可能性がある場合は、**Test** や **Engineering** のような一般的な名前は避けてください。
- グループ名にはたとえば **Boston Test** や **Boston Engineering** のように、意味が明確なものを使用します。アクセス権を設定する際、グループ名のリストから選ぶことになります。意味が明確なグループ名を使用していれば問題ありませんが、意味のあいまいなグループ名の場合、誤ったグループにアクセス権を与えてしまう可能性もあります。
- Rational DOORS の画面にリストされるグループ名は必ずアルファベット順に表示されます。**Boston** または **test** の文字列を含むグループを一括してリストに表示したい場合を考えてみましょう。それぞれの場合に好ましい名前は **Boston Test** と **Test Boston** のどちらでしょうか。

## ユーザー・ログインの制御

Rational DOORS データベースのデフォルトの構成では、Rational DOORS を始動するときに、すべてのユーザーに Rational DOORS のログイン画面が表示されます。

デフォルトでは、Rational DOORS にログインするためには、Rational DOORS のユーザー名とパスワードを入力する必要があります。

データベース管理者は、デフォルトの動作を変更できます。以下の設定を行うことが可能です。

- パスワードの入力を省略する（11 ページの『パスワードの使用』を参照）
- Rational DOORS のユーザー名の入力を省略する（11 ページの『システム・ユーザー名の使用』を参照）

デフォルト動作の変更方法については、57 ページの『ログイン・ポリシーの変更』を参照してください。

## パスワードの使用

デフォルトでは、Rational DOORS のデータベースはパスワードを使用するように設定されています。ユーザーが Rational DOORS にログインする際、Rational DOORS ログイン画面が表示され、パスワードを入力する必要があります。

パスワードの長さの最小値を設定できます。

- データベースのパスワードの長さの最小値を設定できます。  
デフォルトでは 6 文字です。ユーザーは 6 文字以上の長さのパスワードを設定する必要があります（パスワードに日本語は使用できません）。
- また、ユーザー毎にパスワードの長さの最小値を指定できます。  
例えば、データベースのパスワードの長さの最小値を 6 文字に設定します。そして、John Smith に対してパスワードの長さの最小値を 14 文字とします。John Smith はパスワードを変更するたびに 14 文字以上の長さのパスワードを設定する必要があります。

**注意** 他のユーザーのパスワードを変更できる権限を持ったユーザーは、最小値に指定されている長さよりも短いパスワードを設定できます。

Rational DOORS にログインする際、ユーザーにパスワードを入力させないときには、パスワードを使用しないようにデータベースを設定できます。

## システム・ユーザー名の使用

ユーザー・アカウントのレコードには、システム・ユーザー名を格納できます。システム・ユーザー名は、コンピューター（例えば、Windows®）にログインするために使用するユーザー名です。

**注** セキュリティーのため、システム・ユーザー名とともにパスワードを使用してください。

システム・ユーザー名を使用すると、ユーザーは Rational DOORS のユーザー名を入力する必要がなくなります。Rational DOORS はシステム・ユーザー名からどのユーザーが使用しているかを知ることができます。

システム・ユーザー名を使用するとき、特定のシステム・ユーザー名を持っている唯一の Rational DOORS ユーザーの場合、次のようになります。

- Rational DOORS ユーザー名を入力する必要はありません。
- パスワードを使用しない場合には、Rational DOORS ログイン画面は表示されません。Rational DOORS を始動すると、すぐにデータベース・エクスプローラーが表示されます。

### システム・ユーザー名が一意でない場合

ユーザーのシステム・ユーザー名が重複している可能性がある場合は、システム・ユーザー名を無効にするか、システム・ユーザー名とパスワードの両方を有効にします。

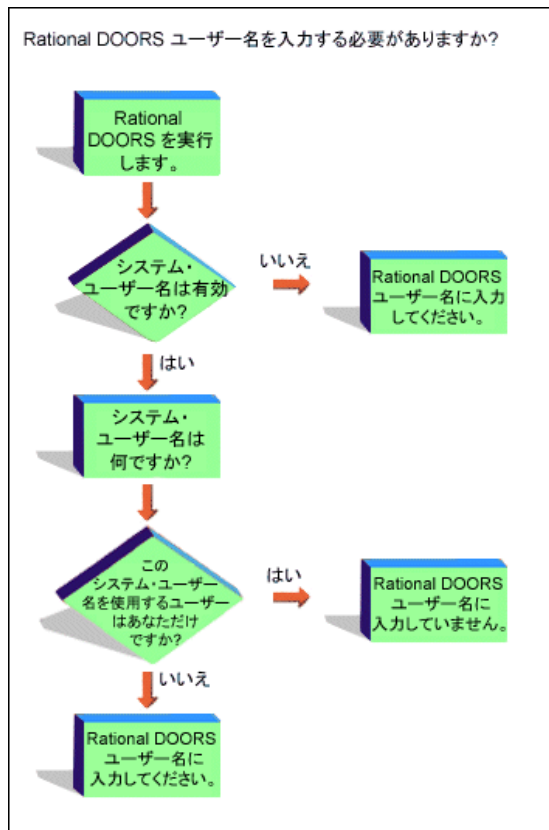
単一の Windows 2003 ドメインではシステム・ユーザー名は一意に決められているはずですが。

**注意:** 次の場合は、システム・ユーザー名が一意ではない可能性があります。

- 複数の Windows 2003 のドメインを使用している
- UNIX<sup>®</sup> および Windows の両方のユーザーである



## Rational DOORS ユーザー名を入力操作の有無



システム・ユーザー名を使用し、かつシステム・ユーザー名が一意でなかった場合、どのようになるかを以下の例で見ていきます。

Judy Brown は Windows XP を使用しています。彼女のシステム・ユーザー名は **Judy** であり、このユーザー名が彼女の Rational DOORS ユーザー・アカウント情報に記録されています。他の Rational DOORS ユーザーで、彼女と同じシステム・ユーザー名を持っている人はいません。この場合、彼女が Rational DOORS を起動する際、ユーザー名を入力する必要はありません。

ここで新しいユーザーの Judy Smith が加わったとします。彼女は、Windows 2003 ユーザーで、同じシステム・ユーザー名 **Judy** を使用しています。彼女のユーザー名を、彼女のアカウント情報に入力しましょう。

この時点から、Judy Brown または Judy Smith が Rational DOORS を起動する際に、ログイン画面にユーザー名を入力する必要が出てきま

す。なぜなら、同じシステム・ユーザー名 **Judy** を使用しているため、Rational DOORS がどちらのユーザー名か区別できないからです。

彼女のアカウント情報に **Judy Smith** のシステム・ユーザー名を入力し忘れた場合はどうなるでしょうか。彼女のアカウントを作成する際に警告メッセージが出力されます。このメッセージを無視した場合はどうなるのでしょうか。この場合、**Judy Smith** が Rational DOORS を起動すると、Rational DOORS は彼女のシステム・ユーザー名を **Judy** と認識します。そして、彼女は **Judy Brown** だと仮定します。

- パスワードを使用しない設定になっていた場合、**Judy Smith** にはログイン画面が表示されません。そして **Judy Brown** として Rational DOORS にログインされます。
- パスワードを使用する設定になっていた場合、**Judy Smith** はパスワードを入力する必要があります。彼女が入力したパスワードは、Rational DOORS が期待したものとは一致しません（Rational DOORS は **Judy Brown** のパスワードを期待しています）。したがって、**Judy Smith** は Rational DOORS にログインできません。

彼女はデータベース管理者に連絡します。データベース管理者はシステム・ユーザー名の使用をやめるか、彼女のシステム・ユーザー名をアカウント情報に入力することにより、問題を解決します。

システム・ユーザー名を使用したいが、システム・ユーザー名が一意に決められない可能性があるときには、以下の操作を行います。

- パスワードを使用するように設定されていることを確認します。
- 全てのユーザー・アカウント情報について、「システム・ユーザー名」フィールドが入力されていることを確認します。
- アカウント情報の「システム・ユーザー名」フィールドが入力されていないという警告メッセージが表示される場合は、このメッセージを無視しないでください（システム・ユーザー名を入力してください）。

## ログイン失敗時の対処

データベース管理者は、次の制御を行うことができます。

- ユーザーが Rational DOORS にログインする際の、入力ミスの回数
- ログインの失敗が起きた場合、Rational DOORS データベース・サーバーから通知の電子メールを送るかどうか

上記の2つの制限を利用して、ログインが失敗した場合の制御ができます。これらの制限の変更方法については、57ページの『ログイン・ポリシーの変更』を参照してください。

制限	説明
1回のセッションにおける最大のログイン失敗回数	<p>ユーザーがユーザー名を使用して実行できる最大ログイン試行回数。</p> <p>例えば、この値が4の場合、ユーザーは Rational DOORS のログイン画面が閉じるまでに4回ログインを試みることができます。</p> <p>この値は0から10までの範囲で指定します。0は制限がないことを意味します。デフォルト値は4です。</p> <p><b>注意</b> セッションのタイムアウトが設定されていて、ユーザーのセッションがタイムアウトになった場合、1つのセッションにおける最大のログイン失敗回数に達したときには管理者ユーザーだけがロックを解除するためにログインできます。詳しくは、63ページの『パスワード再認証セッションのタイムアウト』を参照してください。</p>

制限	説明
1つのユーザー名における最大のログイン失敗回数	<p>ユーザーが自分のユーザー名を使用して試みることができる最大連続ログイン試行回数。</p> <p>不正利用者が有効なユーザー名を手に入れた場合、異なるコンピューターからログインを試みて、この制限を回避しようとしても、回避し続けることができません。</p> <p>例えば、この値が3になっていた場合、アカウントが無効化されるまでに3回パスワードの認証を試みることができます。</p> <p>この値は0から20までの範囲で指定します。0は制限がないことを意味します。デフォルト値は20です。</p> <p><b>Rational DOORS</b> はそれぞれのユーザー名に対し、最後にログインに成功して以降にパスワードの入力に失敗した回数を記憶します。</p> <p><b>注意</b> セッションのタイムアウトが設定されていて、ユーザーのセッションがタイムアウトになった場合に、ユーザー名ごとの最大のログイン失敗回数に達したときには管理者ユーザーだけがロックを解除するためにログインできます。詳しくは、63ページの『パスワード再認証セッションのタイムアウト』を参照してください。</p>

**Rational DOORS** データベース・サーバーを使用している場合、サーバーから、ログインの失敗があるかどうかを知らせる電子メールを1人または複数の **Rational DOORS** ユーザーに送信できます。詳しくは、57ページの『ログイン・ポリシーの変更』を参照してください。

# 3

## ロケールと Unicode のオプション

- ロケール
- 日付と時刻の記録方式
- サポートされているロケールと形式
- ロケールのユーザー・オプションの更新
- テキスト属性のロケールの変更
- レガシー・データの扱い
- 表示設定

### ロケール

コンピューターのロケールとは、そのコンピューターのローカル言語と地理的な場所です。例えば、「フランス語 ( フランス ) 」と「フランス語 ( カナダ ) 」は異なるロケールです。要素の中には、コンピューター上での表示形式がロケールによって決められるものがあります。例えば、コンピューターのプログラムが使用する日付書式は、ユーザーのロケールから派生しています。

Rational DOORS のデフォルト・ロケールも、ユーザーのコンピューターのロケールから派生しています。コンピューターの「ユーザー・ロケール」設定が変更されるたびに、書式付きデータの表示が更新されます。ただし、Rational DOORS 内でロケールを変更すれば、コンピューターのロケールの代わりに、Rational DOORS の設定をデフォルトにすることができます。これらの設定はロケールごとに保存されます。このため、使用するロケールを変更するたびに、そのロケールの以前の設定に合わせてユーザー・オプションが更新されます。

言語設定の詳細については、ご使用のオペレーティング・システムに関するユーザー用資料を参照してください。

### 日付と時刻の記録方式

Rational DOORS データベースには、1970 年から 2036 年までの日付値が UTC ( 世界協定時刻 ) 形式で格納されています。UTC は、国際時間の標準として開発されました。GMT ( グリニッジ標準時刻 ) と UTC はほぼ同じですが、UTC は夏時間 ( DST ) を認識せず、24 時制で表記されます。UTC の 0 時は、GMT の深夜です。子午線からその地域ま

での距離と夏時間を考慮した時間を、24 時制のローカル時刻に加えた (または引いた) 時刻が UTC です。

あるタイム・ゾーンでデータを編集すると、編集を行った時刻が各 Rational DOORS クライアントのローカル時間で記録されます。一方、データベース・サーバーには UTC 形式の絶対時間で保存されます。

例えば、カナダの大西洋地域のユーザーが、ローカル時間の 11:00 にベースラインに署名します。その後、この署名を太平洋地域のユーザーが表示するものとします。太平洋地域のユーザーから見たこの署名時刻は 7:00 です。サーバー上では署名時刻が UTC で保存されます (15:00)。

記録される時刻は、データベース・サーバーの時刻です。クライアントの時刻ではありません。クライアントやサーバーのタイム・ゾーンとは無関係に、UTC で保存されます。

Rational DOORS バージョン 8.0 以前のバージョンでは、タイム・ゾーンを調整するための情報が日付属性値に含まれていませんでした。このため、移行したデータの日付属性値が適切に表示されない場合があります。たとえば、複数のタイム・ゾーンに点在するクライアントからデータを操作すると、サスペクト・リンクが正常に機能しない場合があります。

旧バージョンで作成したデータを 9.2 で開いて保存すると、日付と時刻の値に UTC タイム・スタンプが付与されます。このタイム・スタンプは、保存操作を行っているクライアントが属しているタイム・ゾーンの値になります。したがって、旧バージョンで作成したデータを Rational DOORS 9.2 に保存したデータと、最初から Rational DOORS 9.2 でデータを作成したデータは、同じように動作します。

## サポートされているロケールと形式

次のロケールと形式 (書式) がサポートされています。

- すべてのデータ形式。ただし、文字を右から左に表記する書式 (ヘブライ語など) や列書式 (日本語の縦書きなど) を除きます。
- アラビア数字のみ
- 太陽暦のみ
- Windows のロケールすべて
- UNIX と Linux<sup>®</sup> では、2 バイト文字システム (DBCS) のオペレーティング・システムがサポートされていません。

Unicode の詳細については、<http://www.unicode.org> を参照してください。

## ロケールのユーザー・オプションの更新

次の表に説明する要素の表示を変更するには、「オプション」ダイアログ・ボックスを使用します (Rational DOORS データベース・エクスプローラーで「ツール」>「オプション」をクリックします)。

ロケール設定	説明
行送り	テキストの属性や要素に適用する行間。DXL で定義します。 韓国語、中国語 (簡体字)、中国語 (繁体字) のグループのデフォルトの行間は 1.5 です。 その他のロケールのデフォルト行間は 1 です。
テキスト・フォント	データベースのデフォルト・フォントは、データベースのデフォルトの表示設定によって変わります。 Rational DOORS で使用する表示設定の詳細については、20 ページの『表示設定』を参照してください。 クライアント・コンピューターで使用できるフォントならば、どれでもロケールのデフォルト・フォントとして選択することができます。
日付の表示形式と入力形式	Rational DOORS が使用するデフォルト日付書式は、現在のロケールで Windows が使用する簡易日時書式です。 日付と時間の入力書式と表示形式は、現在のロケールで使用できるものであればどれでも選択できます。

## テキスト属性のロケールの変更

テキスト、文字列、または列挙型の属性値を作成する場合は、属性のロケールを選択できます。デフォルトのロケールは、属性の作成時に使用される現在のロケールです。

テキスト属性の入力や表示を行う場合の文字間と行間は、属性のロケール設定から派生します。ロケール設定を変更するには、属性定義に対する変更権限が必要です。

## レガシー・データの扱い

以前のバージョンの Rational DOORS のデータにはロケールのプロパティがない場合があるので、「レガシー・データ・ロケール」を設

定できます。これは、ロケールのプロパティーを持たない古いデータのデフォルトのロケールとなります。「レガシー・データ・ロケール」は、データベース・プロパティーに指定されているデータベース管理者により設定されます。

ロケールのプロパティーのない古いテキスト属性は、ロケールのプロパティーを「レガシー・データ・ロケール」から継承します。「レガシー・データ・ロケール」が設定されていない場合は、現在のクライアント・セッションからロケールを継承します。

強調文字など使われている古いモジュール名、説明、ユーザー情報、およびグループ情報を正しく表示するには、コード・ページによってそれらを解釈する必要があります。

- Rational DOORS 6.0a で保存されたデータは、UTF-8 Unicode データとして解釈される
- それ以外の旧 Rational DOORS で保存されたデータは、「レガシー・データ・ロケール」のデフォルト・コード・ページによって解釈される。「レガシー・データ・ロケール」が設定されていない場合は、Latin-1 コード・ページが使用される

## 表示設定

Rational DOORS には多数の標準表示設定があります。

- モダン
- クラシック
- インターナショナル・モダン
- インターナショナル・クラシック
- ハイコントラスト #1
- ハイコントラスト #2
- ハイコントラスト黒
- ハイコントラスト白



デフォルトの表示設定は、データベースを作成した方法によって変わり、以下の表にその説明があります。

データベースの作成元	デフォルトの表示設定
Rational DOORS 8.0 以降に作成された 新しいデータベース	インターナショナル・モダン
Rational DOORS 7.x から移行された データベース	データベースが移行される前と同じです。「モダン」または「クラシック」。
Rational DOORS 6.0a から移行された データベース	6.0a のデータベース表示設定が「モダン」であった場合、移行後の表示設定は「インターナショナル・モダン」。 6.0a のデータベース表示設定が「クラシック」であった場合、移行後の表示設定は「インターナショナル・クラシック」。



# 4

## ユーザーとグループの管理

この章は、データベース管理者、プロジェクト管理者、および、ユーザーまたはグループのアクセス権を変更する権限を持つユーザーを対象としています。この章のトピックスは、次のとおりです。

- ユーザーとグループの管理のためのオプション
- ユーザー情報の表示
- ユーザーの作成
- ユーザーの編集
- RDS 使用時のユーザーの編集
- ユーザーの削除
- ユーザーの無効化と有効化
- グループ情報の表示
- グループの作成
- グループの編集
- グループに対するアクセス制御
- グループの削除
- グループの無効化と有効化

### ユーザーとグループの管理のためのオプション

Rational DOORS のユーザーとグループの情報を管理する方法として、DOORS ローカルによる方法、または Rational Directory Server (RDS) を使用する方法があります。

RDS を使用する場合は、**Manage Users** メニュー・オプションを使用して、ユーザーとグループに関する一部の情報のみを管理できます。


RDS をセットアップして Rational DOORS のユーザーとグループを管理する方法については、49 ページの『RDS の設定』を参照してください。

### ユーザー情報の表示

ユーザー情報を表示するには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「ユーザー」タブを選択します。

ユーザーのリストが表示されます。

無効化されているユーザー・アカウントは、次のアイコン付きで表示されます。

ログイン時に追加認証が必要なユーザー・アカウントは、次のアイコン付きで表示されます。

ユーザーの管理に RDS が使用されている場合、フィルターを入力して、「最新表示」をクリックし、ユーザーのリストを表示します。すべてのユーザーをリスト表示するにや、フィルターとしてアスタリスク (\*) を使用します。

## ユーザーの作成

**注意** RDS を使用して Rational DOORS のユーザーとグループの情報を管理している場合は、Rational DOORS でユーザーを作成できません。

ユーザーを作成するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「ユーザー」タブで、「新規」をクリックして新しいユーザーを新規に設定するか、コピーしたいユーザーを選択して「コピー」をクリックします。

**注意** 既存のユーザーをコピーすると、多くの情報を入力する必要がないため、時間の節約になります。また、コピーして作成したユーザーは、元のユーザーと同じグループに設定されるため、グループのメンバー情報を新規に設定する必要もありません。

4. 「一般」タブで新規ユーザーの名前およびタイプを指定します。

- a. 新規ユーザーのユーザー名を入力します。  
 既存のユーザー名や既存のグループ名と同じ名前は、入力できません。  
 命名規則の詳細については、5 ページの『登録ユーザーの計画』を参照してください。
- b. 新規ユーザーをまだログインさせたくない場合、例えば、新規ユーザーにアクセス権を設定してから、それらのユーザーがログインできるようにしたい場合は、「**ユーザーの無効化**」を選択します。詳しくは、40 ページの『ユーザーの無効化と有効化』を参照してください。
- c. 新規ユーザーのタイプを、標準、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはカスタム・ユーザーに変更します。  
 カスタム・ユーザーを選択した場合は、チェック・ボックスを使用して新しいユーザーに与える権限を指定します。

選択する対象	ユーザーに許可する操作
プロジェクトの作成	プロジェクトを作成する。
データのアーカイブ	Rational DOORS アーカイブを作成する。
データのパーティショニング	パーティションを作成および管理する。
グループの作成	グループを作成および管理する。
ユーザーの作成	ユーザーを作成および管理する。 <b>注意</b> 自分自身を含む任意のユーザーに対してデータベース管理権限の付加または削除を実行するには、ユーザーは <b>ユーザー作成権限</b> と <b>データベース管理権限</b> の両方を持っている必要があります。

選択する対象	ユーザーに許可する操作
データベースの管理	<p>データベース・プロパティ・シートを閲覧および編集する。このユーザーは次の操作を実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 名前およびデータベースのデフォルト表示設定を変更する。</li> <li>• データベースのログイン・ポリシーを設定する。</li> <li>• データベースが使用する SMTP メール・サーバーを設定する。</li> <li>• データベース・ルートのアクセス権を確認する。これにより、データベース・エクスプローラーのデータベース・ビューを参照できるユーザーを制御します。</li> <li>• ロックを管理する。</li> <li>• ベースラインを削除する。</li> <li>• 他のユーザーおよび自分自身に<b>データベース管理権限</b>を付加する、または権限を削除する</li> </ul> <p><b>注意</b> 自分自身を含む任意のユーザーに対して<b>データベース管理権限</b>の付加または削除を実行するには、ユーザーは<b>ユーザー作成権限</b>と<b>データベース管理権限</b>の両方を持っている必要があります。</p>

- d. 「**DXL の編集**」オプションは、Rational DOORS の管理者がデータベース・プロパティの「**DXL 編集権限を持つユーザーだけに DXL の編集と実行を許可**」チェック・ボックスを選択している場合にのみ表示されます。

DXL の編集と実行をユーザーに許可するには、このオプションを選択します。DXL の編集と実行は、「**DXL 対話**」ウィンドウ(「ツール」>「**DXL の編集**」)およびDXL ライブラリーから行います。

このオプションが選択されていない場合は、このウィンドウの「**実行**」と「**編集**」ボタンが無効になります。しかし、

DXL 属性を作成し、レイアウト DXL を実行することは可能です。

5. 「セキュリティ」タブで新規ユーザーのパスワードを指定します。

「新規ユーザー」ウィンドウの「セキュリティ」タブの内容は次のとおりです。

「セキュリティ」タブ	説明
パスワードの変更	<p>新規ユーザーの初期パスワードを指定します。初期パスワードを指定しなくてもかまいません。ユーザーが初めてログインするときには、初期パスワードの設定の有無や、「有効期限切れまで後:」ボックスの設定値に関係なく、必ずパスワードを変更するかどうか尋ねられます。</p> <p>初期パスワードを設定する場合は、そのパスワードをユーザーに伝える必要があります。そのパスワードを使用しないと Rational DOORS にログインできません。初期パスワードを設定しない場合、ユーザーは「<b>Rational DOORS ログイン</b>」画面の「パスワード」ボックスを空のままにし、「パスワードの変更」画面の「古いパスワード」ボックスも空のままにします。</p>
ユーザーは、パスワードを変更できます	<p>新規ユーザーが各自のパスワードを自分で変更できるようにしたい場合に、このボックスを選択します。このボックスを解除した状態でパスワードの有効期限が満了すると、新規ユーザーはデータベース管理者（またはユーザー作成権限を持つカスタム・ユーザー）にパスワードの変更を依頼しなければなりません。</p> <p><b>注意</b> このボックスを解除する前に、新規ユーザーが少なくとも一度は Rational DOORS にログインしていることを確認してください。ユーザーが初めてログインする前にこのボックスを解除すると、そのユーザーはログインできなくなってしまう。</p>

「セキュリティ」タブ	説明
最小パスワード長	<p>ユーザーがパスワードを変更する際に入力する必要のある最小の文字数を決定するのに使用します。</p> <p>この最小のパスワードの長さがデータベースで指定した最小の長さよりも小さい場合、データベースで指定した最小の長さが使用されます。データベースの値については、57 ページの『ログイン・ポリシーの変更』を参照してください。</p>
有効期限切れまで後	<p>ユーザーのパスワードの有効期限が切れるまでの期間。パスワードが最後に変更された日付（「<b>最終変更日時</b>」ボックスを参照）からの日数で示されます。ユーザーのパスワードが期限切れになった場合、次にそのユーザーがログインするとき、パスワードの変更を要求されます。</p> <p>デフォルトでは0日となっています。これは、最初のログイン時にパスワードを設定すれば、二度と変更を要求されることがないことを意味します。</p> <p><b>注意</b> この値が0日であっても、ユーザーが Rational DOORS に初めてログインする際にはパスワードを変更するように要求されません。</p>
最終変更日時	<p>ユーザーのパスワードが最後に変更された日付。ユーザーがまだ存在していないため、初期値は「常にしない」となります。</p>
パスワード・コマンド・ライン・スイッチを使用できます	<p>「-password」または「-P」パスワード・コマンド・ライン・スイッチの使用を許可または不許可にするよう、データベースを設定することができます。ユーザーのログイン・ポリシーをデータベースのデフォルトに一致させたい場合は、このチェック・ボックスを解除した状態のままにします。データベースの設定に関わらず、ユーザーがパスワード・コマンド・ライン・スイッチを使用できるようにするには、このチェック・ボックスを選択してください。</p>



6. 「詳細」タブでは、ユーザーの電子メール・アドレス等の詳細を指定します。

「新規ユーザー」ウィンドウの「詳細」タブの内容は次のとおりです。

「詳細」タブ	説明
氏名	新規ユーザーの氏名。この名前は一意である必要はありません。また、空のままにしておくこともできます。ユーザーの氏名は、電子署名の一部として表示されます。
電子メール	新規ユーザーの電子メール・アドレス。
システム・ユーザー名	コンピュータにログインする際のユーザー名（例：Windows 2003 のユーザー名）。システム・ユーザー名の詳細については、10 ページの『ユーザー・ログインの制御』を参照してください。 <b>注意</b> データベース管理者に対しては、ここは空白にします。データベース管理者に常に Rational DOORS のユーザー名を入力させることで、セキュリティを高めることができます。
電話	新規ユーザーの電話番号。
場所	新規ユーザーの場所。
追加情報	新規ユーザーに関する追加情報。
チェンジ・プロポーザルの更新を電子メール	新規ユーザーがプロポーザルの提出にチェンジ・プロポーザル・システムを使用する場合、このボックスを選択すると、プロポーザルの状態が変わったときに電子メールで通知が行われます。たとえば、提出したプロポーザルが承認された時点や却下された時点、あるいはプロポーザルがグループに追加された時点やグループから削除された時点で通知が行われます。

「グループ」タブで新規ユーザーに参加させたいグループを指定します。

ユーザーをグループに追加するには、「次のメンバーではありません」リストでグループを選択し、左矢印をクリックして「所属メンバー」リストに移動します。ユーザーをグループから削除するには、「所属メンバー」リストでグループを選択し、右矢印をクリックして「次のメンバーではありません」リストに移動します。複数のグループを選択するには、「Shift」または「Ctrl」キーを使います。

**注意** リスト内の任意の場所をクリックしてから文字を入力すると、入力した文字から始まる名前が強調表示されます。たとえば、「test」と入力すると、名前が「test」で始まる最初のグループが強調表示されます。

7. 「OK」をクリックします。
8. 「OK」をクリックして、「ユーザー管理」ウィンドウを閉じます。これで新規ユーザー・アカウントが作成されます。

## ユーザーの編集

**注意** RDS を使用して Rational DOORS のユーザーとグループの情報を管理している場合は、36 ページの『RDS 使用時のユーザーの編集』を参照してください。

ユーザーを編集するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「ユーザー」タブで編集したいユーザーを選択し、「編集」をクリックします。
4. 「一般」タブでユーザーの名前およびタイプを編集します。
  - a. ユーザーの Rational DOORS ユーザー名を変更します。

他のユーザー名やグループ名と同じ名前は、入力できません。命名規則の詳細については、5 ページの『登録ユーザーの計画』を参照してください。
  - b. ユーザーのタイプを、標準、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはカスタム・ユーザーに変更します。

カスタム・ユーザーを選択した場合は、チェック・ボックスを使用してユーザーに与える権限を指定します。

選択する対象	ユーザーに許可する操作
プロジェクトの作成	プロジェクトを作成する。
データのアーカイブ	Rational DOORS アーカイブを作成する。
データのパーティショニング	パーティションを作成および管理する。
グループの作成	グループを作成および管理する。
ユーザーの作成	<p>ユーザーを作成および管理する。</p> <p><b>ユーザー作成権限</b>を持っていても、<b>データベース管理権限</b>を持っていないユーザーは、自分自身を含むどのユーザーに対しても<b>データベース管理権限</b>の付加または削除を実行することはできません。</p> <p><b>注意</b> 自分自身を含む任意のユーザーに対して<b>データベース管理権限</b>の付加または削除を実行するには、ユーザーは<b>ユーザー作成権限</b>と<b>データベース管理権限</b>の両方を持っている必要があります。</p>

選択する対象	ユーザーに許可する操作
データベースの管理	<p>データベース・プロパティ・シートを閲覧および編集する。このユーザーは次の操作を実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 名前およびデータベースのデフォルト表示設定を変更する。</li> <li>• データベースのログイン・ポリシーを設定する。</li> <li>• データベースが使用する SMTP メール・サーバーを設定する。</li> <li>• データベース・ルートのアクセス権を確認する。これにより、データベース・エクスプローラーのデータベース・ビューを参照できるユーザーを制御します。</li> <li>• ロックを管理する。</li> <li>• ベースラインを削除する。</li> <li>• 他のユーザーおよび自分自身に<b>データベース管理権限</b>を付加する、または権限を削除する</li> </ul> <p><b>注意</b> 自分自身を含む任意のユーザーに対して<b>データベース管理権限</b>の付加または削除を実行するには、ユーザーは<b>ユーザー作成権限</b>と<b>データベース管理権限</b>の両方を持っている必要があります。</p>

- c. 「**DXL の編集**」オプションは、Rational DOORS の管理者がデータベース・プロパティの「**DXL 編集権限を持つユーザーだけに DXL の編集と実行を許可**」チェック・ボックスを選択している場合にのみ表示されます。

DXL の編集と実行をユーザーに許可するには、このオプションを選択します。DXL の編集と実行は、「**DXL 対話**」ウィンドウ(「ツール」>「**DXL の編集**」)およびDXL ライブラリーから行います。

このオプションが選択されていない場合は、このウィンドウの「**実行**」と「**編集**」ボタンが無効になります。しかし、

DXL 属性を作成し、レイアウト DXL を実行することは可能です。

5. 「セキュリティ」タブでユーザーのパスワードまたはセキュリティ設定を変更します。

「ユーザーの編集」ウィンドウの「セキュリティ」タブの内容は次のとおりです。

「セキュリティ」タブ	説明
パスワードの変更	<p>ユーザーのパスワードを変更するには</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>a. 「パスワードの変更」をクリックします。</li> <li>b. 「新規パスワード d」ボックスに新しいパスワードを入力し、「新規パスワードの確認」ボックスにもう一度そのパスワードを入力します。</li> <li>c. 「OK」をクリックします。</li> </ol>
ユーザーは、パスワードを変更できます	<p>ユーザーが各自のパスワードを自分で変更できないようにしたい場合、このボックスを解除状態にします。パスワードの有効期限が満了すると、ユーザーはデータベース管理者（またはユーザー作成権限を持つカスタム・ユーザー）にパスワードの変更を依頼しなければなりません。</p>
最小パスワード長	<p>ユーザーがパスワードを変更する際に入力する必要がある最小の文字数を決定するのに使用します。</p> <p>この最小のパスワードの長さがデータベースで指定した最小の長さよりも小さい場合、データベースで指定した最小の長さを使用されます。データベースの値については、57 ページの『ログイン・ポリシーの変更』を参照してください。</p>

「セキュリティ」タブ	説明
有効期限切れまで後	<p>ユーザーのパスワードの有効期限が切れるまでの期間。日数で示されます。ユーザーのパスワードが期限切れになった場合、次にそのユーザーがログインするとき、パスワードの変更を要求されます。</p> <p>値が 0 の場合、ユーザーのパスワードの有効期限は無限となります。</p>
最終変更日時	<p>ユーザーのパスワードが最後に変更された日付。</p>
パスワード・コマンド・ライン・スイッチを使用できます	<p>「-password」または「-P」パスワード・コマンド・ライン・スイッチの使用を許可または不許可にするよう、データベースを設定することができます。ユーザーのログイン・ポリシーをデータベースのデフォルトに一致させたい場合は、このチェック・ボックスを解除した状態のままにします。データベースの設定に関わらず、ユーザーがパスワード・コマンド・ライン・スイッチを使用できるようにするには、このチェック・ボックスを選択してください。</p>

6. 「詳細」タブでユーザーの詳細を変更します。

「ユーザーの編集」ウィンドウの「詳細」タブの内容は次のとおりです。

「詳細」タブ	説明
氏名	<p>新規ユーザーの氏名。この名前は一意である必要はありません。また、空のままにしておくこともできます。ユーザーの氏名は、電子署名の一部として表示されます。</p>
電子メール・アドレス	<p>ユーザーの電子メール・アドレス。</p>

「詳細」タブ	説明
システム・ユーザー名	<p>コンピュータにログインする際のユーザー名（例：Windows 2003 のユーザー名）。システム・ユーザー名の詳細については、10 ページの『ユーザー・ログインの制御』を参照してください。</p> <p><b>注意</b> データベース管理者に対しては、ここは空白にします。データベース管理者に常に Rational DOORS のユーザー名を入力させることで、セキュリティを高めることができます。</p>
電話	ユーザーの電話番号。
場所	ユーザーの場所。
追加情報	ユーザーに関する追加情報。
チェンジ・プロポーザルの更新を電子メール	<p>ユーザーがプロポーザルの提出にチェンジ・プロポーザル・システムを使用する場合、このボックスを選択すると、プロポーザルの状態が変わったときに電子メールで通知が行われます。たとえば、提出したプロポーザルが承認された時点や却下された時点で通知が行われます。</p>

7. 「グループ」タブでユーザーが所属するグループを変更します。

ユーザーをグループに追加するには、「次のメンバーではありません」リストでグループを選択し、左矢印をクリックして「所属メンバー」リストに移動します。ユーザーをグループから削除するには、「所属メンバー」リストでグループを選択し、右矢印をクリックして「次のメンバーではありません」リストに移動します。複数のグループを選択するには、「Shift」または「Ctrl」キーを使います。

**注意** リスト内の任意の場所をクリックしてから文字を入力すると、入力した文字から始まる名前が強調表示されます。たとえば、「test」と入力すると、名前が「test」で始まる最初のグループが強調表示されます。

8. 「OK」をクリックします。

9. 「OK」をクリックして、「ユーザー管理」ウィンドウを閉じます。  
これでユーザー・アカウントが更新されます。

**注意** 他のユーザーは、次回 Rational DOORS を起動するまで変更を確認できません。

## RDS 使用時のユーザーの編集

RDS を使用して Rational DOORS のユーザーとグループの情報を管理している場合、Rational DOORS で編集できる情報は次のものだけです。

- ユーザーのタイプ（「一般」タブ）
- ユーザーが DXL を編集および実行できるか（「一般」タブ）
- ユーザーがチェンジ・プロポーザル・システムを使用してプロポーザルを提出する場合、プロポーザルの状態が変わった際に電子メールで通知を受けるかどうか（「詳細」タブ）

「セキュリティ」および「グループ」タブは、読み取り専用です。

**RDS 使用時にユーザーを編集するには**

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「ユーザー」タブで編集したいユーザーを選択し、「編集」をクリックします。
4. 「一般」タブでユーザーのタイプを変更します。
  - a. ユーザーのタイプを、標準、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはカスタム・ユーザーに変更します。  
カスタム・ユーザーを選択した場合は、チェック・ボックスを使用してユーザーに与える権限を指定します。

選択する対象	ユーザーに許可する操作
プロジェクトの作成	プロジェクトを作成する。
データのアーカイブ	Rational DOORS アーカイブを作成する。



選択する対象	ユーザーに許可する操作
データのパーティショニング	パーティションを作成および管理する。
グループの作成	グループを作成および管理する。
ユーザーの作成	<p>ユーザーを作成および管理する。</p> <p><b>ユーザー作成権限</b>を持っていても、<b>データベース管理権限</b>を持っていないユーザーは、自分自身を含むどのユーザーに対しても<b>データベース管理権限</b>の付加または削除を実行することはできません。</p> <p><b>注意</b> 自分自身を含む任意のユーザーに対して<b>データベース管理権限</b>の付加または削除を実行するには、ユーザーは<b>ユーザー作成権限</b>と<b>データベース管理権限</b>の両方を持っている必要があります。</p>

選択する対象	ユーザーに許可する操作
データベースの管理	<p>データベース・プロパティ・シートを閲覧および編集する。このユーザーは次の操作を実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 名前およびデータベースのデフォルト表示設定を変更する。</li> <li>• データベースのログイン・ポリシーを設定する。</li> <li>• データベースが使用する SMTP メール・サーバーを設定する。</li> <li>• データベース・ルートのアクセス権を確認する。これにより、データベース・エクスプローラーのデータベース・ビューを参照できるユーザーを制御します。</li> <li>• ロックを管理する。</li> <li>• ベースラインを削除する。</li> <li>• 他のユーザーおよび自分自身に<b>データベース管理権限</b>を付加する、または権限を削除する</li> </ul> <p><b>注意</b> 自分自身を含む任意のユーザーに対して<b>データベース管理権限</b>の付加または削除を実行するには、ユーザーは<b>ユーザー作成権限</b>と<b>データベース管理権限</b>の両方を持っている必要があります。</p>

- b. 「**DXL の編集**」オプションは、Rational DOORS の管理者がデータベース・プロパティの「**DXL 編集権限を持つユーザーだけに DXL の編集と実行を許可**」チェック・ボックスを選択している場合にのみ表示されます。

DXL の編集と実行をユーザーに許可するには、このオプションを選択します。DXL の編集と実行は、「**DXL 対話**」ウィンドウ(「ツール」>「**DXL の編集**」)およびDXL ライブラリーから行います。

このオプションが選択されていない場合は、このウィンドウの「**実行**」と「**編集**」ボタンが無効になります。しかし、

DXL 属性を作成し、レイアウト DXL を実行することは可能です。

5. 「詳細」タブを選択します。

このタブでできることは、「**チェンジ・プロポーザルの更新を電子メール**」チェック・ボックスの選択または選択解除だけです。

ユーザーがプロポーザルの提出にチェンジ・プロポーザル・システムを使用する場合、このボックスを選択すると、プロポーザルの状態が変わったときに電子メールで通知が行われます。たとえば、提出したプロポーザルが承認された時点や却下された時点で通知が行われます。

6. 「OK」をクリックします。

7. 「OK」をクリックして、「**ユーザー管理**」ウィンドウを閉じます。これでユーザー・アカウントが更新されます。

**注意** 他のユーザーは、次回 Rational DOORS を起動するまで変更を確認できません。

## ユーザーの削除

**注意** RDS を使用して Rational DOORS のユーザーとグループの情報を管理している場合は、Rational DOORS でユーザーを削除できません。

一時的にユーザーのログインを停止したい場合は、そのアカウントを無効化します（40 ページの『ユーザーの無効化と有効化』を参照）。ユーザーが会社を辞めるなどで、アカウントが不要になった場合には、アカウントを削除します。

**注意** 一度削除したユーザーを元に戻すことはできません。

### ユーザーを削除するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「ユーザー」タブで削除したいユーザーを選択し、「削除」をクリックします。
4. ユーザーを削除してもよいかどうかを確認するメッセージが表示されます。「はい」をクリックします。

5. 「OK」をクリックします。
6. 「OK」をクリックして、「ユーザー管理」ウィンドウを閉じます。  
これで選択したユーザー・アカウントが削除されます。また所属していたグループからも削除され、アクセス権も削除されます。トレーサビリティを確保するため、ユーザーが行ったアクションの履歴はモジュール履歴から削除されません。

削除したユーザーが Rational DOORS にログインしていた場合、そのまま作業を続けることができます。しかし、一度 Rational DOORS を終了すると、再びログインすることはできません。

ユーザー・アカウントを削除した後に、同じユーザー名でユーザー・アカウントを作成すると、このユーザーは新規ユーザーとなります。こうした新規ユーザーは、削除されたユーザーのデータにアクセスできません。

**注意** Rational DOORS にログインしている他のユーザーは、どのユーザーが削除されたのかをアクセス権の画面から確認できます。ただし、変更は、次回 Rational DOORS にログインするまで確認できません。

## ユーザーの無効化と有効化

ユーザーのアカウントまたはアクセス権を編集するためにユーザーのログインを停止し、その変更が終了するまでログインを行わせたくない場合があります。

また、不正利用者がユーザー名を利用してシステムに侵入するといったことを防ぐため、そのアカウントのログインを停止したい場合があります。

特定のユーザーまたはすべてのユーザーを無効にできます。すべてのユーザーを無効にしても、データベース管理者はログインできます。

**注意** Rational DOORS には、ユーザー名が正確でも誤ったパスワードを使用してログインした場合に、自動的にユーザー・アカウントを無効にする機能があります。詳しくは、14 ページの『ログイン失敗時の対処』を参照してください。

## 特定のユーザーの無効化と有効化

特定のユーザーを無効化または有効化するには


1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「ユーザー」タブで対象ユーザーを選択し、「編集」をクリックします。
4. ユーザーを無効化するには、「ユーザーの無効化」ボックスを選択します。有効化するには、その選択状態を解除します。
5. 「OK」をクリックします。
6. 「OK」をクリックして、「ユーザー管理」ウィンドウを閉じます。

ユーザーを無効化すると、次にログインしようとするときに有効になります。現在ログオンしている場合、排除されることはありません。

## すべてのユーザーの無効化と有効化

すべてのユーザーを無効化しても、データベース管理者のみは Rational DOORS にログインできます。

すべてのユーザーを無効化または有効化するには

1. データベース管理者、またはデータベースの管理権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、データベース・ビューが選択されていることを確認します。  
必要に応じて、「ビュー」>「データベース・ビュー」をクリックします。
3. 左ペインで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。
4. 「ログイン・ポリシー」タブをクリックします。
5. すべてのユーザーを無効化するには、「ユーザー・ログインの無効化」ボックスを選択します。有効化するには、その選択状態を解除します。
6. 「OK」をクリックします。

## グループ情報の表示

グループ情報を表示するには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはグループの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「グループ」タブを選択します。  
パフォーマンスを考慮して、グループのリストは自動的に表示されません。
4. フィルターを入力して、「最新表示」をクリックします。  
フィルター条件を満たすグループのリストが表示されます。すべてのグループをリスト表示したい場合は、フィルターとしてアスタリスク (\*) を使用します。

無効化されているグループは、次のアイコン付きで表示されます。



## グループの作成

**注意** RDS を使用して Rational DOORS のユーザーとグループの情報を管理している場合は、Rational DOORS でグループを作成できません。

グループを使用することで、複数ユーザーに対してすばやくアクセス権を設定できます。グループを構成するユーザーの数は何人でも構いません。データ（たとえば、プロジェクトやモジュール）にアクセス権を設定したい場合、1回の操作でグループにアクセス権を設定できます（ユーザーに設定する場合には、1人ずつ設定していく必要があります）。

グループを作成するには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはグループの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「グループ」タブをクリックします。

4. 「新規」をクリックして新しいグループを新規に設定するか、コピーしたいグループを選択して「コピー」をクリックします。

**注意** 既存グループをコピーして作成すると、メンバー情報などを初めから設定する必要がないため時間の節約になります。新しいグループには、既存のグループと同じメンバーが設定されます。

5. 「グループ名」ボックスに新しいグループの名前を入力します。

新しいグループには、既存のグループやユーザーと同じ名前を設定できません。グループ名を命名する場合に適用する規則については、9 ページの『登録グループの計画』を参照してください。

6. 矢印のボタンを使用して、新しいグループに所属させるユーザーを選択します。

**注意** 複数のユーザーを選択するには、「Shift」または「Ctrl」キーを使います。

ユーザー名リスト内の任意の場所をクリックしてから文字を入力すると、入力した文字から始まる名前が強調表示されます。例えば、「john」と入力すると、名前が「john」で始まる最初のユーザー名が強調表示されます。

- 「メンバー」ボックスにはグループに所属するすべてのユーザーが表示されます。
- 「メンバーではありません」ボックスにはグループに所属しないすべてのユーザーが表示されます。
- ユーザーを一方のボックスから他方のボックスに移動するには、ユーザーを選択して矢印ボタンを押します。

7. 「OK」をクリックします。

8. 「OK」をクリックして、「ユーザー管理」ウィンドウを閉じます。これで新規グループが作成されます。

## グループの編集

**注意** RDS を使用して Rational DOORS のユーザーとグループの情報を管理している場合は、Rational DOORS でグループを編集できません。

グループを編集するには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはグループの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「グループ」タブをクリックします。
4. 編集したいグループを選択し、「編集」をクリックします。
5. グループを無効化するには、「グループの無効化」ボックスにチェックを入れます。詳しくは、47 ページの『グループの無効化と有効化』を参照してください。
6. グループの名前を変更するには、「グループ名」ボックスに新しい名前を入力します。

グループ名には、既存のグループやユーザーと同じ名前を設定できません。グループ名を命名する場合に適用する規則については、9 ページの『登録グループの計画』を参照してください。

7. 矢印のボタンを使用して、グループへユーザーを追加、またはグループからユーザーを削除します。

**注意** 複数のユーザーを選択するには、「Shift」または「Ctrl」キーを使います。

ユーザー名リスト内の任意の場所をクリックしてから文字を入力すると、入力した文字から始まる名前が強調表示されます。例えば、「john」と入力すると、名前が「john」で始まる最初のユーザー名が強調表示されます。

- 「メンバー」ボックスにはグループに所属するすべてのユーザーが表示されます。
  - 「メンバーではありません」ボックスにはグループに所属しないすべてのユーザーが表示されます。
  - ユーザーを一方のボックスから他方のボックスに移動するには、ユーザーを選択して矢印ボタンを押します。
8. 「OK」をクリックします。
  9. 「OK」をクリックして、「ユーザー管理」ウィンドウを閉じます。これでグループ情報が更新されます。

**注意** 他のユーザーは、次回 Rational DOORS を起動するまで変更を確認できません。



## グループに対するアクセス制御

**注意** RDS を使用して Rational DOORS のユーザーとグループの情報を管理している場合は、Rational DOORS でグループに対するアクセス制御を設定できません。

アクセス制御は、個々のプロジェクト、モジュール、または属性を誰が読み込み、誰が変更できるかを厳しく管理します。Rational DOORS では、グループやそのメンバーについてどのユーザーが情報を読み込めるか、または変更できるかを指定できます。

あるユーザーに特定のグループに対するアクセス権を付与しなければ、そのユーザーはそのグループの存在に気づきません。たとえそのユーザーがそのグループのメンバーであり、グループのメンバーとしてのアクセス権をもっている場合でも、グループの存在自体には気づきません。

グループに対するアクセス制御を使用するには、グループ作成権限が必要になります。

グループに対するアクセス制御を設定するには

1. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。  
「ユーザー管理」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「グループ」タブをクリックし、リストからグループを選択します。
3. 「編集」をクリックします。  
「グループの編集」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「アクセス」タブをクリックし、リストから名前を選択します。  
まだグループのアクセス制御を設定していない場合、「アクセス権限」リストには「全員」グループのみが表示されます。デフォルトでは、「全員」グループはフル・アクセス権 (RMDA) を持ちます。
5. グループに対するアクセス権を変更するには、ユーザーまたはグループを選択し、「編集」をクリックします。  
「アクセス権限の編集」ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. ユーザーまたはグループに対するアクセス権を選択します。

選択可能なアクセス権について次の表に示します。

アクセス権	できる操作	できない操作
なし	N/A	グループの表示やグループに対する変更
読み取り (R)	グループ名とメンバー情報の参照	メンバーの追加や削除、アクセス権の変更
変更 (M)	メンバーの追加や削除、グループ名の変更	グループの削除、アクセス権の変更
削除 (D)	メンバーの変更、グループの削除	アクセス権の変更
管理 (A)	グループの削除、グループのアクセス権の変更	N/A

アクセス権を組みあわせて設定した場合には、アクセス権はそれぞれのアクセス権の総和になります。

**注意** グループに対する作成のアクセス権はありません。

7. 「OK」をクリックします。

**注意** 個々のユーザーまたはグループに対して「編集」ではなく「追加」ボタンをクリックすることで、新しいアクセス権を設定できます。また、一覧から対象を選択し「削除」ボタンをクリックすることで、アクセス権を削除できます。

アクセス権の詳細については、「Rational DOORS の使用」またはオンライン・ヘルプの『アクセス権限について』を参照してください。

## グループの削除

**注意** RDS を使用して Rational DOORS のユーザーとグループの情報を管理している場合は、Rational DOORS でグループを削除できません。

グループに所属するユーザーに対して、そのグループに割り当てられたアクセス権を使用してデータにアクセスすることを一時的に停止す

る場合は、グループを無効化してください（47 ページの『グループの無効化と有効化』を参照）。グループが必要ないことが明確な場合には削除を行ってください。

**注意** グループを削除しても、所属するメンバーは削除されません。  
また、一度グループを削除すると、元に戻すことはできません。

### グループを削除するには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはグループの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「グループ」タブをクリックします。
4. 削除したいグループを選択し、「削除」をクリックします。
5. グループを削除してもよいかどうかを確認するメッセージが表示されます。「はい」をクリックします。
6. 「OK」をクリックして、「ユーザー管理」ウィンドウを閉じます。  
これで選択したグループが削除されます。

**注意** Rational DOORS にログインしている他のユーザーは、どのグループが削除されたのかをアクセス権の画面から確認できます。ただし、変更は、次回 Rational DOORS にログインするまで確認できません。

## グループの無効化と有効化

グループを無効化しても、グループに所属している個々のユーザーは無効化されません。グループのアクセス権が無効化されるだけです。無効化は、グループに所属するユーザーが、グループのアクセス権を使用してデータにアクセスすることを停止します。ユーザーは他のアクセス権を使用すれば、データにアクセスできます。たとえば、ユー

ザーがデータにアクセスできる他のグループに所属している場合などです。

#### グループを無効化または有効化するには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはグループの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「グループ」タブをクリックします。
4. グループを選択し、「編集」をクリックします。
5. グループを無効化するには、「グループの無効化」ボックスを選択します。有効化するには、チェック・ボックスを解除します。
6. 「OK」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。

# 5

## RDS の設定

この章は、データベース管理者、およびデータベースの管理権限を持っているユーザーを対象に説明します。

この章のトピックスは、次のとおりです。

- Rational Directory Server について
- Rational Directory Server を使用するための Rational DOORS の設定
- Rational Directory Server へのユーザーのエクスポート

### Rational Directory Server について

Rational DOORS は IBM® Rational® Directory Server (RDS) を使用します。

RDS は、Rational Lifecycle Solution (RLS) ツールのユーザー認証および管理用に設計されたシングル・エンタープライズ・ディレクトリー・ソリューションです。RDS は Lightweight Directory Access Protocol (LDAP バージョン 3) をベースとしています。

RDS は、ユーザー情報を 1 個所で定義および管理できます。したがって、同じユーザーに対してユーザー情報を 2 回以上認証する必要はありません。

RDS には、GUI ベースのクライアント・アプリケーションである Rational Directory Administration (RDA) が付属しています。RDA は、RDS とともにインストールすることも、個別にインストールすることもできます。

RDA を使用すると、ユーザーとグループの作成、ユーザーの有効化と無効化、ユーザーとグループの検索の実行、グループとユーザーの移行などの日常的な管理作業を、これまでよりも楽に実行できます。これらの作業の詳細については、RDS の文書を参照してください。

### RDS のモード


Rational DOORS では次の RDS モードを使用できます。

- スタンドアロン・モード  
ユーザー名とグループ名は Rational DOORS データベースに格納されます。これらのユーザー名は、他のアプリケーションと共有できません。
- コーポレート・モード

コーポレート・モードでは、外部のコーポレート LDAP リポジトリと統合するように RDS を設定できます。この仕組みによって、企業バックボーンを、Rational Lifecycle Solution ツールに対するユーザーおよびグループの読み取り専用リポジトリとして使用することができます。このモードでは、企業全体のユーザー情報とグループ情報に対して企業の一部門からアクセスできるようになります。


RDS を使用している場合は、ユーザーとグループの追加、編集を Rational Directory Server で行うことも、Rational DOORS の「ユーザーの管理」ダイアログ・ボックスで行うこともできます。「ユーザーの管理」ダイアログ・ボックスで行った変更は RDS に反映され、RDS で行った変更はこのダイアログ・ボックスに反映されます。「パスワード」タブの「パスワード期限切れまで後」オプションを使用して、ユーザーが各自のパスワードを変更する頻度を指定することができます。

## Rational Directory Server を使用するための Rational DOORS の設定

1. 管理者ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「データベース」をクリックし、
3. 右クリックして「プロパティ」を選択します。  
「データベース・プロパティ」ダイアログ・ボックスが表示され、「一般」タブが選択されます。
4. 「ディレクトリー構成」エリアで「変更」をクリックします。  
「ディレクトリー構成の変更」ダイアログ・ボックスが表示され、「Rational DOORS Local Directory」が選択されます。
5. 「Rational Directory Service」を選択します。
6. 「サーバー・ホスト」フィールドに、Rational Directory のサーバー・マシンの名前を入力します。
7. 「サーバー・ポート」フィールドに、Rational Directory サーバーが使用しているポート番号を入力します。
8. 「テスト接続」をクリックして、Rational DOORS がサーバーに接続できることを確認します。  
正常に接続できたかどうかを示すメッセージが表示されます。

9. 「OK」をクリックします。  
確認画面が表示されます。
10. 「OK」をクリックします。
11. 「ディレクトリー構成の変更」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

## Rational Directory Server へのユーザーのエクスポート

1. 管理者ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「データベース」をクリックし、
3. 右クリックして「プロパティ」を選択します。  
「データベース・プロパティ」ダイアログ・ボックスが表示され、「一般」タブが選択されます。
4. 「ディレクトリー構成」エリアで「ユーザー/グループ・リストのエクスポート」をクリックします。  
「ユーザー/グループ・リストのエクスポート」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「スタンドアロン」または「コーポレート」を選択します。
6. ユーザー・リストをエクスポートする場合は、リストをエクスポートするフォルダーの名前を「ユーザー・リストのエクスポート」フィールドに入力し、「ユーザーのエクスポート」を選択します。
7. グループ・リストをエクスポートする場合は、リストをエクスポートするフォルダーの名前を「グループ・リストのエクスポート」フィールドに入力し、「グループのエクスポート」を選択します。
8. ユーザーおよびグループのエクスポートが終了したら、「閉じる」をクリックします。





# 6

## データベースの管理


この章は、データベース管理者、プロジェクト管理者、データベースを管理する権限を持つユーザーを対象としています。

この章のトピックスは、次のとおりです。

- データベース・プロパティの表示
- データベース名の変更
- デフォルトの表示設定の変更
- ログイン・ポリシーの変更
- パスワードの制御
- 辞書の管理
- ログイン履歴ファイル
- メッセージのブロードキャスト
- 今日のメッセージの設定
- 電子メールの設定
- データベース・ルートへのアクセス権の変更
- ディスカッションの許可と不許可

### データベース・プロパティの表示

データベースのプロパティを表示するには

1. データベース管理者、またはデータベースの管理権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、データベース・ビューが選択されていることを確認します。  
必要に応じて、「表示」>「データベース・ビュー」をクリックします。
3. 左ペインで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。

4. 「データベース・プロパティ」ウィンドウの「一般」タブの説明を次の表に示します。


「一般」タブ	説明
名前	データベースの名前。
タイプ	プロパティが表示されている項目の種別。ここでは、 <b>Rational DOORS データベース</b> となっており、変更することはできません。
デフォルトの表示設定	データベースのデフォルトの表示設定の名前。 詳しくは、57 ページの『デフォルトの表示設定の変更』を参照してください。
レガシー・データ・ロケール	ロケールを持たない従来の属性に、ロケールを設定できます。 デフォルトでは「(なし)」に設定されます（ロケールが設定されません）。ロケールを設定せずに従来のデータの属性を表示すると、クライアント・システム上の現在のユーザーのロケールが使用されます。
URL	データベースの URL
URL のコピー	システムのクリップボードに URL をコピーします。 DOORS URL の詳細については、「 <i>Using Rational DOORS</i> 」を参照してください。
SMTP メール・サーバー	Rational DOORS で使用したい、SMTP のメール・サーバーを指定します。 詳しくは、68 ページの『電子メールの設定』を参照してください。
メール・アカウント	SMTP メール・サーバーで使用するメール・アカウント。 詳しくは、68 ページの『電子メールの設定』を参照してください。
電子メールの接頭語に使用するテキスト	Rational DOORS により自動送信される電子メール・メッセージの接頭語テキスト。 詳しくは、68 ページの『電子メールの設定』を参照してください。

「一般」タブ	説明
ディレクトリー構成	<p>Rational DOORS では、ユーザー情報および認証に Rational Directory Server (RDS) を使用します。これはデフォルトで選択されます。</p> <p>RDS を設定することができます。詳しくは、49 ページの『RDS の設定』を参照してください。</p>
失敗したログインの記録	<p>ログインの失敗をログイン履歴ファイルに記録したい場合には、ここを選択します。</p> <p>ログイン失敗の詳細については、14 ページの『ログイン失敗時の対処』を参照してください。</p> <p>ログイン履歴ファイルについては、66 ページの『ログイン履歴ファイル』を参照してください。</p>
成功したログインの記録	<p>成功したログインをすべて記録したい場合にこのチェック・ボックスを選択します。</p> <p>ログイン履歴ファイルについては、66 ページの『ログイン履歴ファイル』を参照してください。</p>
OLE オブジェクトを属性履歴に保存	<p>オブジェクトの履歴に、OLE オブジェクトの変更履歴を残したい場合に、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>OLE オブジェクトが変更され、このチェック・ボックスが選択されている場合は、履歴項目を選択すると、オブジェクト履歴の詳細ペインに OLE オブジェクトが表示されます。選択されていない場合、Rational DOORS はオブジェクトの変更は記録しますが、詳細ペインに変更の詳細を表示することはできません。</p>
モジュール・ベースラインの削除を許可	<p>このチェック・ボックスが選択されている場合、適切なアクセス権限を持つユーザーであれば、モジュールのベースラインを削除できます。データベースのデフォルト設定ではベースラインの削除が禁止されています。</p> <p>この設定を変更するには、Rational DOORS 管理者としてログオンする必要があります。</p>

「一般」タブ	説明
<p>「DXL 編集」権限を持つユーザーだけが、DXL を編集、実行できます。</p>	<p>DXL の編集と実行を禁止するには、このオプションを選択します。</p> <p>このオプションを選択すると、個々のユーザーの DXL の編集と実行の権限を制御できます。また、「新規ユーザー」および「ユーザーの編集」ダイアログ・ボックスには、「DXL の編集」チェック・ボックスが表示されます。「DXL の編集」チェック・ボックスが選択されているユーザーは、DXL の編集と実行を許可されます。</p> <p>デフォルトでは「<b>DXL 編集</b> 権限を持つユーザーだけが、DXL を編集、実行できます。」が選択解除されています。つまり、すべてのユーザーが DXL を編集し、実行できます。</p> <p>このオプションがオンで、「DXL の編集」チェック・ボックスが選択されていないと、DXL ライブラリから DXL を編集することはできません（実行は可能）。この設定を変更するには、Rational DOORS 管理者としてログオンする必要があります。</p>

## データベース名の変更


データベース名は、以下の場所に表示されます。

- データベース・エクスプローラーのタイトル・バー
- データベース・ビューを表示している場合、データベース・エクスプローラーの左ペインにある「データベース」の右側

データベースの名前を変更するには

1. データベース管理者、またはデータベースの管理権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、データベース・ビューが選択されていることを確認します。

必要に応じて、「表示」>「データベース・ビュー」をクリックします。

3. 左ペインで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。

4. 「名前」ボックスに新しい名前を入力し、「OK」をクリックします。

## デフォルトの表示設定の変更


表示設定は Rational DOORS のモジュール・ウィンドウで使用される色やフォントを制御します。データベースのデフォルトの表示設定は、別の設定を指定するまでは、すべてのユーザーに対して同じものになっています。

多数の標準表示設定があります。

- モダン
- クラシック
- インターナショナル・モダン
- インターナショナル・クラシック
- ハイコントラスト #1
- ハイコントラスト #2
- ハイコントラスト黒
- ハイコントラスト白


初めて Rational DOORS をインストールする場合のデフォルトの表示設定は「モダン」です。

データベースのデフォルトの表示設定を変更するには

1. データベース管理者、またはデータベースの管理権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、データベース・ビューが選択されていることを確認します。  
必要に応じて、「表示」>「データベース・ビュー」をクリックします。
3. 左ペインで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。
4. 「一般」タブで、求める「デフォルトの表示設定」を選択します。
5. 「OK」をクリックします。

## ログイン・ポリシーの変更

データベースのログイン・ポリシーを変更するには

1. データベース管理者、またはデータベースの管理権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、データベース・ビューが選択されていることを確認します。  
必要に応じて、「表示」>「データベース・ビュー」をクリックします。
3. 左ペインで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。
4. 「ログイン・ポリシー」タブをクリックします。
5. 必要なオプションを選択します。

「ログイン・ポリシー」タブ	説明
ユーザー・ログインの無効化	データベース管理者以外のログオンを停止したい場合は、チェック・ボックスを選択します。
パスワードの使用	Rational DOORS にログインする際、ユーザーにパスワードを入力させたい場合は、チェック・ボックスを選択します。
追加認証の使用	これは読み取り専用のチェック・ボックスであり、Rational DOORS データベースがユーザー認証に RDS を使用するよう構成されている場合にのみ表示されます。このチェック・ボックスが選択されている場合、データベースは RDS での追加認証が使用可能です。

「ログイン・ポリシー」タブ	説明
システム・ユーザー名の使用	<p>管理者ユーザーとしてログオンしていないと、このオプションは使用できません。</p> <p>システム・ユーザー名を使用する場合は、チェック・ボックスを選択します。詳しくは、10 ページの『ユーザー・ログインの制御』を参照してください。</p> <p>管理者アカウントにシステム・ユーザー名が定義されていない場合には、システム・ユーザー名を有効にできません。管理者アカウントにシステム・ユーザー名を定義するには</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>a. 「ツール」 &gt; 「オプション」 をクリックします。</li> <li>b. 「一般」 タブをクリックします。</li> <li>c. システム・ユーザー名を入力し、「OK」 をクリックします。</li> </ol>
最小クライアント・バージョン	<p>Rational DOORS データベース・サーバーへの接続を許可するクライアントの最小バージョン番号を、「n.n.n.n」の書式で入力します（例：9.2.0.0）。</p> <p>クライアントのバージョンを確認するには、「ヘルプ」 &gt; 「DOORS について」 をクリックします。</p> <p>使用中のクライアントとデータベースの接続を阻害する恐れがあるバージョン番号は入力しないでください。</p> <p>これらの制限は dbadmin ツールには適用されません。</p>

「ログイン・ポリシー」タブ	説明
最大クライアント・バージョン	<p>Rational DOORS データベース・サーバーへの接続を許可するクライアントの最大バージョン番号を、「n.n.n.n」の書式で入力します（例：9.2.0.0）。クライアントのバージョンを確認するには、「ヘルプ」&gt;「<b>DOORS</b>について」をクリックします。使用中のクライアントとデータベースの接続を阻害する恐れがあるバージョン番号は入力しないでください。</p> <p>これらの制限は dbadmin ツールには適用されません。</p>
最小パスワード長	パスワードの最短の文字数を指定します。
1回のセッションにおける最大のログイン失敗回数	<p>ユーザーがさまざまなユーザー名を使用してログインを試みることのできる最大の回数を選択します。</p> <p>例えば、この値が4の場合、ユーザーは Rational DOORS のログイン画面が閉じるまでに4回ログインを試みることができます。</p> <p>この値は0から10までの範囲で指定します。0は制限がないことを意味します。デフォルト値は4です。</p> <p><b>注意</b> セッションのタイムアウトが設定されていて、ユーザーのセッションがタイムアウトになった場合、1つのセッションにおける最大のログイン失敗回数に達したときには管理者ユーザーだけがロックを解除するためにログインできます。詳しくは、63ページの『パスワード再認証セッションのタイムアウト』を参照してください。</p>



「ログイン・ポリシー」タブ	説明
<p>1つのユーザー名における最大のログイン失敗回数</p>	<p>ユーザーが自分のユーザー名を使用して、連続して試みることができる最大のログイン回数を選択します。</p> <p>例えば、この値が3になっていた場合、アカウントが無効化されるまでに3回ログインを試みることができます。</p> <p>この値は0から20までの範囲で指定します。0は制限がないことを意味します。デフォルト値は20です。</p> <p>詳しくは、14ページの『ログイン失敗時の対処』を参照してください。</p> <p><b>注意</b> セッションのタイムアウトが設定されていて、ユーザーのセッションがタイムアウトになった場合に、ユーザー名ごとの最大のログイン失敗回数に達したときには管理者ユーザーだけがロックを解除するためにログインできます。詳しくは、63ページの『パスワード再認証セッションのタイムアウト』を参照してください。</p>
<p>ログインが失敗した場合の電子メール・メッセージ</p>	<p>ログイン失敗時に Rational DOORS が送信する電子メールの冒頭部分には、デフォルトで次のテキストが付加されます。</p> <p><b>以下は Rational DOORS からの通知メッセージです。返信しないでください。(The following is a notification message from DOORS - please do not reply as it was sent from an unattended mailbox.)</b></p> <p>異なるメッセージを電子メールの冒頭に付けたい場合は、ここに入力できます。</p>
<p>ログインが失敗した場合の電子メール通知先</p>	<p>ログインの失敗が起きた場合に、通知の電子メールを受け取るユーザーのリスト。Rtional DOORS クライアントが電子メールを送信します。</p> <p><b>注意</b> ユーザー・オプション画面の「一般」タブにユーザーのEメール・アドレスが指定されていることを確認してください。</p>

「ログイン・ポリシー」タブ	説明
追加	電子メールを受け取るユーザーのリストにユーザーを追加するには、次の操作を実行します。 <ol style="list-style-type: none"> <li>a. 「追加」をクリックします。</li> <li>b. Rational DOORS ユーザー名のリストからユーザーを選択します。</li> <li>c. 「OK」をクリックします。</li> </ol>
削除	電子メールを受け取るユーザーのリストからユーザーを削除するには、次の操作を実行します。 <ol style="list-style-type: none"> <li>a. 削除したいユーザーを選択します。</li> <li>b. 「削除」をクリックします。</li> </ol>

6. 「OK」をクリックします。

## パスワードの制御


ユーザーがどのようなパスワードを指定できるのか、あるいはどの程度の頻度でパスワードを変更させるのか、といったルールを設定できます。

パスワードを指定する際、文字の種類を文字、数字、シンボルの中から必要に応じて強制的に使用させることもできます。また、一度使用したパスワードを一定期間使用できなくすることもできますし、パスワードを繰り返して使用できる回数を制限することもできます。

デフォルトでは、パスワードは最低 6 文字の長さが必要です。パスワード制御を行うためには、データベース管理者であることが必要です。

データベース管理者またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーが「ユーザーの管理」ダイアログ・ボックスからパスワードを作成、編集する場合は、設定されているパスワードの制限が適用されません。しかし、いかなるユーザーであっても、「オプション」ダイアログ・ボックス（「ツール」 > 「オプション」）を開いてパスワードを変更する場合は、変更後のパスワードがデータベースの制限に準じていなければなりません。

パスワードを制御するには

1. データベース・ビューで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。  
「データベース・プロパティ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「パスワード」タブをクリックします。  
この画面には、次の3つの領域があります。
  - パスワードの再確認
  - パスワードの制限
  - パスワードの再利用

### パスワード再認証セッションのタイムアウト

Rational DOORS にはセキュリティー機能の1つとして、一定期間 Rational DOORS を使用していなかった場合にセッションをロックする機能があります。

**注意** セッションのタイムアウトを設定するには、データベース管理者であることが必要です。

セッションのタイムアウトを設定するには

1. 「パスワードは、ログイン時に必要です」チェック・ボックスを選択します。
2. 「パスワードの再確認」領域の「パスワードは、再確認が必要です」チェック・ボックスを選択します。
3. タイムアウトになるまでの期間を分単位でテキスト・ボックスに入力します。デフォルトの設定は5分です。5分から60分までの値を入力できます。
4. 「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。

新しいタイムアウトの設定は、それ以降のすべてのログインに適用されます。

ユーザーのパスワードを再入力することで、Rational DOORS セッションのロックを解除できます。

**注意** セッションがタイムアウトした後にユーザー・アカウントが無効化された場合、またはログイン試行回数を超過してしまった場合、セッションのロックを解除できるのは管理者ユーザーのみです。

## パスワードの制限

ユーザーが使用できるパスワードのタイプを制限するには、以下のオプションを選択してください。

- 「**文字**」を選択すると、1文字以上の文字をパスワードに入れる必要があります。
- 「**数値**」を選択すると、1文字以上の数字をパスワードに入れる必要があります。
- 「**シンボル**」を選択すると、1文字以上のシンボルをパスワードに入れる必要があります。
- テキストボックスに、パスワードの最小文字数を入力します。
- 「**パスワード期限切れまで後**」オプションは、「**一般**」タブの「**ユーザー情報および認証に Rational Directory を使用 (Use Rational Directory for user information and authentication)**」が選択されている場合にのみ使用できます。

## パスワードの再利用

次のように、パスワードの世代、日数、およびその両方によって、パスワードの再利用頻度を制限できます。

1. 世代には、1 から 12 までの整数を入力します。  
1 を入力した場合、現在使用しているパスワードは、少なくとも一度別のパスワードを使用しないと、再び使用できません。12 を入力した場合、現在使用しているパスワードを使用する前に、12 回以上別のパスワードを使用する必要があります。
2. 日には、1 から 180 までの整数を入力します。  
10 を入力した場合、パスワードは最後に使用してから 10 日たたないと再利用できません。  
「世代 (Generation)」と「日」を両方指定した場合、ユーザーがパスワードを再使用できるようになるには、両方の規則が満足される必要があります。
3. 「**適用**」をクリックし、「**OK**」をクリックします。

## コマンド行ログインの制限

認証に RDS が使用されるようにデータベースが構成されている場合、`-password` または `-P` パスワード・コマンド・ライン・スイッチの使用を許可または禁止するように、データベースを設定することができ

ます。この設定は、個々のユーザーのアクセス権限を編集することによって指定変更できます。

デフォルトでは、データベースはユーザーによる `-password` または `-P` パスワード・コマンド・ライン・スイッチの使用を許可するように設定されます。この使用を制限するには、「**デフォルトでパスワード・コマンド・ライン・スイッチを無効にします**」チェック・ボックスを選択します。

## 辞書の管理

Rational DOORS は、インストールされた言語ごとにクライアント辞書およびデータベース辞書を提供します。

- クライアント辞書

クライアント辞書は、Rational DOORS クライアントがインストールされているマシンに格納されます。パーソナル辞書とは異なり、クライアント辞書には、そのクライアント（リモートでクライアントにアクセスする Citrix クライアントおよびリモート・アクセス・クライアントを含む）に属するすべてのユーザーがアクセスできます。クライアント辞書にはアクセス制御を設定できません。

クライアント辞書のデフォルトの場所は次のとおりです。

```
C:\Program Files\IBM\Rational\DOORS\9.2\dictionary\us.dic
```

- データベース辞書

この辞書は、データベースのすべてのユーザーが利用できます。アクセス権設定では、単語の追加および削除を実行できるユーザー、およびユーザーのアクセス権限を変更できるユーザーを決定できます。

データベース辞書のデフォルトの場所は次のとおりです。

```
$Rational DOORSHOME/Data/v6data/spelling
```

データベース辞書へのアクセス権限とおおりです。

アクセス権限	説明
変更	データベース辞書に単語を追加し、同辞書から単語を削除できます。
管理	データベース辞書へのアクセス権限を変更できます。

デフォルトでは、すべてのユーザーがデータベース辞書へのフル・アクセス権限を持ちます。

ユーザーまたはグループを追加するには

1. 「ツール」 > 「辞書の管理」の順にクリックします。
2. 「辞書」リストから「データベース」を選択し、続いて「アクセス」タブを選択します。
3. 「追加」をクリックします。
4. 追加するユーザーまたはグループ、および付与するアクセス権限を選択し、「OK」をクリックします。

ユーザーまたはグループを編集するには

1. 「ツール」 > 「辞書の管理」の順にクリックします。
2. 「辞書」リストから「データベース」を選択し、「アクセス」タブをクリックします。
3. アクセス権を変更したいユーザーまたはグループを選択し、「編集」をクリックします。
4. 必要なアクセス権を割り当て、「OK」をクリックします。

## ログイン履歴ファイル

Rational DOORS サーバーは、以下のすべての履歴を保持できます。

- ログインの失敗
- 成功したログイン

デフォルトでは、ログインの失敗だけが記録されます。ログに記録する情報を制御するには、57 ページの『ログイン・ポリシーの変更』を参照してください。

データベース・サーバーは、login\_history.txt という名前のテキスト・ファイルに情報を記録します。このファイルは、  
<server\_data\_folder>\v6data\logs に格納されています。

Windows では、レジストリーの **ServerData** 項目（デフォルトの場所：  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\Telelogic\DOORS\_Server\9.2\Config）にサーバー・データの場所が指定されています。

Solaris では、\$SERVERDATA/v6data/logs に login\_history.txt ファイルが保存されます。

ログインの履歴を表示するには、login\_history.txt ファイルをメモ帳などで開きます。

**注意** ログイン履歴ファイルは、非常に大きなサイズになる場合があります。定期的にサイズをチェックし、必要であれば削除します（情報を保存しておきたい場合には、最初に別の場所にコピーします）。  
Rational DOORS は新しいログイン履歴ファイルを「logs」フォルダーに自動的に作成します。

## メッセージのブロードキャスト

データベース管理者は、Rational DOORS データベース・サーバーに接続している全ユーザーに、メッセージをブロードキャスト（一括送信）できます。例えば、Rational DOORS データベース・サーバーを再起動する必要があるとき、接続している全ユーザーにメッセージをブロードキャストすることにより、作業中のデータを保存してデータベースからログアウトするように促すことができます。

ブロードキャスト・メッセージの冒頭には現在の日時と、次のテキストが表示されます。

`username@database_server_name` からのブロードキャスト・メッセージ

時刻は、Rational DOORS クライアントが属しているタイム・ゾーンにしたがいます。


メッセージをブロードキャストするには

1. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ブロードキャスト・メッセージ」の順にクリックします。  
「ブロードキャスト・メッセージ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ブロードキャストするメッセージを入力し、「送信」をクリックします。  
メッセージがデータベース・サーバーに送信され、そこから接続している全クライアントにブロードキャストされます。
3. 「送信されたメッセージ (Message Sent)」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

## 今日のメッセージの設定

Rational DOORS の「ログイン」ダイアログ・ボックスには、任意のメッセージを表示させることができます。今日のメッセージを設定しない場合は、標準の「ログイン」ダイアログ・ボックスが表示されます。

今日のメッセージを設定するには

1. データベース管理者、またはデータベースの管理権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、データベース・ビューが選択されていることを確認します。  
必要に応じて、「表示」>「データベース・ビュー」をクリックします。
3. 左ペインで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。
4. 「今日のメッセージ」タブをクリックします。
5. 「始動時にメッセージを表示」チェック・ボックスを選択し、ユーザーに表示するメッセージを「今日のメッセージ」ボックスに入力します。
6. 「適用」または「OK」をクリックします。

ログイン・メッセージが表示されない設定に戻すには、次のどちらかの操作を行います。

- 入力したメッセージを削除する。
- 「始動時にメッセージを表示」チェック・ボックスの選択を解除する。

## 電子メールの設定

Rational DOORS クライアントは、以下の場合に電子メールを送信できます。


- Rational DOORS へのログイン試行が失敗した場合。
- ユーザーがチェンジ・プロポーザル・システムを使用して提出した、いずれかのチェンジ・プロポーザルの状態が変更された場合。例えば、ユーザーはチェンジ・プロポーザルが承認された場合、または却下された場合に電子メールで通知を受けることができます。

Rational DOORS により送信される電子メールには、常にデータベースの名前と URL が明記されています。

電子メールを送信できるようにクライアントをセットアップするには

1. データベース管理者、またはデータベースの管理権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。



2. データベース・エクスプローラーで、データベース・ビューが選択されていることを確認します。  
必要に応じて、「表示」>「データベース・ビュー」をクリックします。
3. 左ペインで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。
4. 「一般」タブで必要なオプションを選択します。  
以下の表は、オプションの説明を示しています。

オプション	説明
SMTP メール・サーバー	Rational DOORS で使用したい、SMTP のメール・サーバーを指定します。
メール・アカウント	SMTP メール・サーバーで使用するメール・アカウント。このオプションは必須項目ではありません。 このオプションが空白の場合、Rational DOORS は存在しないユーザーのメール・アカウント (smtp@doors) をデフォルトで使用します。SMTP サーバーによっては、認証のためにユーザー・アカウントが必要な場合があります。 Rational DOORS によって定義されたデフォルトのメール・アカウントは、有効な電子メールのフォーマットを持っていません。SMTP サーバーのセキュリティー管理で有効なユーザー・アカウントが必要な場合には、正当なユーザー・アカウントを指定する必要があります。 Rational DOORS クライアントから送信される電子メール・メッセージの「差出人 (From)」フィールドには、「<プロジェクト名>に関するチェンジ・プロポーザル」と表示されます。

オプション	説明
電子メールの接頭語に使用するテキスト	<p>Rational DOORS により自動送信される電子メール・メッセージの接頭語テキスト。</p> <p>自動送信されるメッセージには、デフォルトで次のメッセージが冒頭に付加されます。</p> <p>以下は <b>Rational DOORS</b> からの通知メッセージです。返信しないでください。<b>(The following is a notification message from DOORS - please do not reply as it was sent from an unattended mailbox.)</b></p> <p>異なるメッセージを電子メールの冒頭に付けたい場合は、ここに入力できます。</p>

5. 「OK」をクリックします。


## データベース・ルートのアクセス権の変更

データベース・ルートのアクセス権を変更するには、データベース・ルートに対する管理者権限が必要です。

データベース・ルートのアクセス権を変更するには

1. データベース管理者、またはデータベースの管理権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、データベース・ビューが選択されていることを確認します。

必要に応じて、「表示」>「データベース・ビュー」をクリックします。

3. 左ペインで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。
4. 「アクセス」タブをクリックします。
5. データベース・ルートに対する現在のアクセス権が表示されます。

デフォルトではこれらのアクセス権は、すべての最上位レベルのフォルダーおよびプロジェクト（データベース・ルート直下のフォルダーやプロジェクト）に引き継がれます。

タスクごとに必要となるアクセス権を、次の表で説明します。

アクセス権	実行すること
読み取り (R)	このアクセス権は、データベース・ルートに対しては意味を持ちません。既存ユーザーのデータベース・ルートに対する読み取り権限を拒否することはできません。ユーザーに対して、データベース・ルートの読み取り権限を削除するには、ユーザー・アカウントを無効にするか、ユーザーを削除します。
作成 (C)	データベースの最上位レベルにフォルダーおよびプロジェクトを作成できます。
変更 (M)	このアクセス権は、データベース・ルートに対しては意味がありません。しかし、フォルダーやプロジェクトなどのデータベースの項目に引き継がせることができます。
削除 (D)	このアクセス権は、データベース・ルートに対しては意味がありません。しかし、フォルダーやプロジェクトなどのデータベースの項目に引き継がせることができます。
管理 (A)	データベース・ルートに対するアクセス権を変更できます。

6. 必要なアクセス権を設定します。

以下の表は、アクセス権の設定の方法を示しています。

実行すること	方法
新規エントリーの追加	「追加」をクリックします。「アクセス権の追加 (Add Access)」ダイアログ・ボックスが表示されます。 「名前」ボックスで追加するユーザーまたはグループを選択します。 付与するアクセス権の設定したいアクセス権ボックスを選択して、「OK」をクリックします。
エントリーの削除	ユーザーまたはグループを選択し、「削除」をクリックします。
既存エントリーの編集	ユーザーまたはグループを選択し、「編集」をクリックします。 「アクセス権限の編集」ダイアログ・ボックスが表示されます。付与するアクセス権の設定したいアクセス権ボックスを選択して、「OK」をクリックします。
追加のアクセス権	追加のアクセス権を選択します。このアクセス権は作成権限を持つユーザー（またはグループ）に適用され、データベース・ルートの下位レベルの項目に伝搬されます。 追加アクセス権は、データベース・ルート of アクセス権を継承するその下のツリー項目に引き継がれます。

7. 「OK」をクリックします。

## ディスカッションの許可と不許可


データベース内のディスカッションの機能を制御できます。以下のことができます。

- すべてのユーザーにすべてのディスカッションへの参加を許可する
- データベース管理者またはモジュールに対する管理者権限を持つユーザーに、ディスカッションに参加できるユーザーを制御することを許可する

- データベースについて、すべてのディスカッションを使用不可にする

すべてのディスカッション機能を使用可能にするには、Rational DOORS 9.2 以降の Database Server を使用し、Rational DOORS 9.0 および 9.1 クライアントを除外するように構成する必要があります。

データベース内のディスカッションを許可または不許可にするには

1. データベース管理者、またはデータベースの管理権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、データベース・ビューが選択されていることを確認します。  
必要に応じて、「表示」>「データベース・ビュー」をクリックします。
3. 左ペインで「データベース」をクリックし、「プロパティ」をクリックします。
4. 「ディスカッションのアクセス権」タブをクリックします。
5. データベースに対する現在のアクセス権が表示されます。

次の表は、各ラジオ・ボタンの説明です。

ラジオ・ボタン	制御
ディスカッションを許可	すべてのユーザーにすべてのディスカッションへの参加を許可します。
ディスカッションを許可 (モジュールに対してアクセス制限を設定できる)	データベース管理者またはモジュールに対する管理者権限を持つユーザーに、ディスカッションに参加できるユーザーを制御することを許可します。
ディスカッションを許可しない	データベースについて、すべてのディスカッションを使用不可にします。 <b>注意</b> モジュールがディスカッションを開いているときにディスカッションを使用不可にした場合、そのディスカッションは Rational DOORS クライアントを停止し、再起動するまで、開いたままです。

6. 「OK」をクリックします。



# 7

## プロジェクトの管理

この章では以下の内容について説明します。

- プロジェクトの作成
- プロジェクト開始ウィザードの使用
- フォルダーからプロジェクトへの変換
- プロジェクトからフォルダーへの変換
- プロジェクト・プロパティの編集
- プロジェクトのアクセス権限の変更
- プロジェクトの削除、削除の取り消し、およびパーシ

### プロジェクトの作成

プロジェクトを作成する場合、新規に作成する方法と、既存のフォルダーを変換して作成する方法があります（79 ページの『フォルダーからプロジェクトへの変換』を参照）。

**注意** ウィザードを使用したプロジェクトの作成方法については、76 ページの『プロジェクト開始ウィザードの使用』を参照してください。

#### 新規のプロジェクトを作成するには

1. データベース管理者またはプロジェクトの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、新しいプロジェクトを作成するフォルダーまたはプロジェクトを選択します。これがプロジェクトの親になります。

親に対する作成権限が必要となります。最上位プロジェクトを作成するには、データベース・ルートへの作成権限が必要です（70 ページの『データベース・ルートのアクセス権の変更』を参照）。

3. 「ファイル」 > 「新規」 > 「プロジェクト」 をクリックします。
4. 「名前」 ボックスに新しいプロジェクトの名前を入力します。

この名前は大文字小文字が区別されます。例えば、**Myproject** と **MyPROJECT** は別の名前とみなされます。

プロジェクトの名前は、Rational DOORS データベース内で一意でなければなりません。2つのプロジェクトに同じ名前を指定することはできません。

名前には、次の文字を使用できます。

- 英数字（アルファベットの文字と数字）
  - スペース文字
  - ピリオド（.）
  - アンダースコア（\_）
  - ハイフン（-）
5. 新しいプロジェクトについての追加情報を入力する場合、「説明」ボックスに入力します。
  6. 「OK」をクリックします。

新しいプロジェクトは、アクセス権限を親から継承します。アクセス権限を変更する場合は、82 ページの『プロジェクトのアクセス権限の変更』の指示に従ってください。

**注意** プロジェクトの作成時に、「このプロジェクトを作成できません。ロック要求がタイムアウトになりました (Cannot create this Project: Lock request timed out)」とのエラーが表示される場合は、しばらく待ってから再度作成してください。プロジェクトを作成しようとして「OK」をクリックしたときに、別の Rational DOORS ユーザーが貼り付け操作を実行していると、このエラーが生成されます。

## プロジェクト開始ウィザードの使用

プロジェクト開始ウィザードを使用すると、モジュール、属性、およびビューが既に設定されたプロジェクトを作成できます。ウィザードには、新しいプロジェクトを素早くセットアップするのに役立つさまざまなデフォルトが用意されています。

プロジェクト開始ウィザードを使用するには

1. データベース管理者またはプロジェクトの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、新しいプロジェクトを作成するフォルダーまたはプロジェクトを選択します。これがプロジェクトの親になります。



親に対する作成権限が必要となります。最上位プロジェクトを作成するには、データベース・ルートへの作成権限が必要です（70ページの『データベース・ルートのアクセス権の変更』を参照）。

3. 「ファイル」 > 「新規」 > 「プロジェクト開始ウィザード」をクリックします。

プロジェクトを最初から作成する場合は、Step 4に進みます。

既存のプロジェクト定義を使用する場合には

- a. 「再利用」をクリックし、リストから定義を選択します。
- b. 「名前」ボックスに新しいプロジェクトの名前を入力します。また、プロジェクトについての追加情報を「説明」ボックスに入力します。
- c. 「次へ」をクリックして、ウィザードの最終画面を表示します。
- d. 「完了」をクリックします。

指定した定義に従って、プロジェクトが作成されます。アクセス権限は親から継承されます。アクセス権限を変更する場合は、82ページの『プロジェクトのアクセス権限の変更』の指示に従ってください。

4. プロジェクトを最初から作成する場合には、以下を行います。
  - a. 「新規」をクリックします。
  - b. 「名前」ボックスに、新しいプロジェクトの名前を入力します。
  - c. 「説明」ボックスにプロジェクトについての追加情報を入力します。
  - d. 「次へ」をクリックします。
5. プロジェクト・タイプ（「システム」または「ソフトウェア」）を選択し、適用したい形式（「フォーマル」、「インフォーマル」、または「非常にインフォーマル」）を選択します。
6. 「標準モジュールの追加」をクリックします。

指定したプロジェクト・タイプおよびアプローチのデフォルト・モジュールが、「モジュール」ボックスに表示されます。
7. プロジェクトに作成されるすべてのモジュールが「モジュール」ボックスに表示されます。

必要のないモジュールが「**モジュール**」ボックスに表示されている場合、選択して「**選択されたモジュールの削除**」をクリックします。

別のモジュールを追加したい場合には、モジュールの名前を「**モジュール名**」ボックスに入力し、「**カスタム・モジュールを挿入します**」をクリックします。

8. 「**次へ**」をクリックします。
9. それぞれのモジュールに必要な属性を指定します。
  - a. 「**モジュールに属性を追加**」ボックスでモジュールを選択します。
  - b. 「**標準的な属性**」ドロップダウン・リストで、モジュールのタイプを選択します。次に「**標準属性を挿入します**」をクリックします。

指定したモジュールのタイプに基づいたデフォルトの属性が「**選択したモジュール内の属性**」ボックスに表示されます。
  - c. モジュール内に必要のない属性がある場合、その属性を選択して、「**選択された属性の削除**」をクリックします。
  - d. 別の属性を追加して作成したい場合には、属性の名前を「**属性名**」ボックスに入力し、「**およびタイプ**」ボックスで属性のタイプを選択して、「**カスタム属性を挿入します**」をクリックします。
10. 「**次へ**」をクリックして、次のウィザード画面を表示します。
11. それぞれのモジュールに必要なビューを指定します。
  - a. 「**モジュールに表示**」ボックスでモジュールを選択します。
  - b. 「**標準的なビュー**」でビューを選択してから、「**標準ビューを挿入します**」をクリックします。

「**ビュー**」ボックスにビューの名前が表示され、そのビューに含めることができる列が「**使用可能な列**」ボックスに表示されます。矢印キーを使用して、ビューに必要な列を追加します。
  - c. 表示したくないビューが「**ビュー**」ボックスに表示されている場合、そのビューを選択して、「**選択されたビューの削除**」をクリックします。
  - d. 独自のビューを作成したい場合には、「**カスタム・ビュー名**」ボックスにビュー名を入力し、ビューに追加したい列を選択

します。そして、「カスタム・ビューを挿入します」をクリックします。

12. 「次へ」をクリックします。

13. 「定義名」ボックスに、プロジェクト定義の名前を入力します。

ここで定義したプロジェクトは、次回ウィザードを使用してプロジェクトを作成する際に、再利用できます。

14. 「次へ」をクリックして、ウィザードの最終画面を表示します。

15. 「完了」をクリックすると、新しいプロジェクトが作成されます。

**注意** 新しいプロジェクトは、アクセス権限を親から継承します。アクセス権限を変更する場合は、82 ページの『プロジェクトのアクセス権限の変更』の指示に従ってください。

## フォルダーからプロジェクトへの変換

プロジェクトとフォルダーの違いは、以下のとおりです。

- プロジェクトはデータベース内で固有の名前を持っています。したがって、プロジェクト内のデータの位置は、そのプロジェクトから始まるパスで一意に識別できます。
- データベース・エクスプローラーでプロジェクト・ビューを使用すると、あらゆるプロジェクトが最上位に表示されます。ツリー内の親オブジェクトおよび最上位の下にはサブプロジェクトが表示されます。
- プロジェクトは分割、アーカイブができますが、フォルダーはできません。
- プロジェクトにはチェンジ・プロポーザル・システムを作成できますが、フォルダーにはできません。

以下のいずれかの状態では、フォルダーからプロジェクトに変換できません。

- フォルダーが、チェンジ・プロポーザル・システムでレビュー用に構成されたモジュールを含んでいる場合。
- フォルダーまたはその中にあるものを開いている場合。モジュール、フォルダー、またはプロジェクトが開いている場合には、データベース・ツリー上でそのモジュールの上位のフォルダーもまた開いた状態になります。

フォルダーからプロジェクトに変換するには

1. データベース管理者またはプロジェクトの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーの右ペインで、変換するフォルダーを選択し、「ファイル」>「プロジェクトへの変換」をクリックします。  
フォルダーに対して管理者権限が必要です。

## プロジェクトからフォルダーへの変換

プロジェクトとフォルダーの違いは、以下のとおりです。

- プロジェクトはデータベース内で固有の名前を持っています。したがって、プロジェクト内のデータの位置は、そのプロジェクトから始まるパスで一意に識別できます。
- データベース・エクスプローラーでプロジェクト・ビューを使用すると、あらゆるプロジェクトが最上位に表示されます。ツリー内の親オブジェクトおよび最上位の下にはサブプロジェクトが表示されます。
- プロジェクトは分割、アーカイブができますが、フォルダーはできません。
- プロジェクトにはチェンジ・プロポーザル・システムを作成できますが、フォルダーにはできません。

以下のいずれかの状態では、プロジェクトからフォルダーに変換できません。

- プロジェクトにチェンジ・プロポーザル システムが設定してある場合。
- プロジェクトに、エクスポートしているパーティションまたはインポートしているパーティションがある場合。
- プロジェクトまたはまたはその中にあるものを開いている場合。モジュール、フォルダー、またはプロジェクトが開いている場合には、データベース・ツリー上でそのモジュールの上位のプロジェクトもまた開いた状態になります。

プロジェクトからフォルダーに変換するには

1. データベース管理者またはプロジェクトの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。

2. データベース・エクスプローラーの右ペインで、変換するプロジェクトを選択し、「ファイル」>「フォルダーへの変換」をクリックします。  
プロジェクトに対して管理者権限が必要です。
3. プロジェクトをフォルダーに変換してもよいかどうかを確認するメッセージが表示されます。「はい」をクリックします。

## プロジェクト・プロパティの編集

プロジェクトのプロパティを編集するには、プロジェクトに対して変更権限が必要です。

プロジェクトのプロパティを編集するには

1. データベース・エクスプローラーでプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。  
以下の表は、「一般」タブで使用できるオプションを示しています。

「一般」タブ	説明
名前	プロジェクトの名前。 他のユーザーが、ツリー内で、プロジェクト下にあるフォルダー、プロジェクトまたはモジュールを開いている場合には、そのプロジェクトの名前を変えることはできません。 プロジェクトにリンク・モジュールがあり、ビューとして保存されているいずれかのフォーマル・モジュール・フィルターにリンク・モジュールが指定されている場合は、プロジェクト名を変更すると、ビューにオブジェクトが表示されなくなります。
説明	プロジェクトの詳細情報
タイプ	プロパティが表示されている項目の種別。「プロジェクト」と表示され、変更することはできません。
URL	プロジェクトの URL
URL のコピー	システムのクリップボードに URL をコピーします。

2. 「OK」をクリックします。

## プロジェクトのアクセス権限の変更

プロジェクトのアクセス権限を変更するには、プロジェクトに対して管理者権限が必要です。

プロジェクトのアクセス権限を変更するには

1. データベース・エクスプローラーでプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。
2. 「アクセス」タブをクリックします。
3. そのプロジェクトの現在のアクセス権限が表示されます。

以下の表は、使用できるアクセス権限についての情報を示しています。

アクセス権	実行すること
読み取り (R)	プロジェクトを参照します。読み取り権限がない場合、そのプロジェクトはデータベース・エクスプローラーに表示されません。
作成 (C)	プロジェクトの配下に新しいモジュール、フォルダー、およびプロジェクトを作成できます。 プロジェクトの配下に既存のモジュール、フォルダーおよびプロジェクトを貼り付けできます。 プロジェクトにパーティション定義を作成できます。 プロジェクトにチェンジ・プロポーザル・システムを作成できます。
変更 (M)	プロジェクトの名前または説明を変更できます。 パーティション定義を編集できます。

アクセス権	実行すること
削除 (D)	プロジェクトの削除、削除の取り消し、およびページを実行できます。 データベース・エクスプローラーでプロジェクトを切り取ることもできます。 パーティション定義を削除できます。 プロジェクトのチェンジ・プロポーザル・システムを削除できます。
管理 (A)	プロジェクトのアクセス権限を変更できます。 プロジェクトの最上位モジュールのデフォルトのリンクセットを変更できます。

#### 4. 必要なアクセス権を設定します。

以下の表は、「アクセス」タブのボックスやボタンの説明を示しています。

「アクセス」タブ	説明
親からの継承	親のアクセス権限をプロジェクトに継承させるには、このチェック・ボックスを選択します。最上位フォルダーの場合は、データベース・ルートのアクセス権限を継承します。 このボックスがチェックされている場合はアクセス権限のリストが無効になり、そのプロジェクトが親から継承しているアクセス権限が表示されます。
追加	アクセス権限のリストに新しいエントリーを追加する場合は、「追加」をクリックします。「アクセス権の追加 (Add Access)」ダイアログ・ボックスが表示されます。 「名前」ボックスで追加するユーザーまたはグループを選択します。 付与するアクセス権の設定したいアクセス権ボックスを選択して、「OK」をクリックします。

「アクセス」タブ	説明
削除	アクセス権限のリストからエントリーを削除する場合は、そのエントリーを選択し、「 <b>削除</b> 」をクリックします。
編集	アクセス権限のリストでエントリーを編集する場合は、そのエントリーを選択し、「 <b>編集</b> 」をクリックします。 「 <b>アクセス権限の編集</b> 」ダイアログ・ボックスが表示されます。付与するアクセス権の設定したいアクセス権ボックスを選択して、「 <b>OK</b> 」をクリックします。
追加のアクセス権	追加のアクセス権を選択します。このアクセス権は作成権限を持つユーザー（またはグループ）に適用され、データベース・ルートの下位レベルの項目に伝搬されます。 追加のアクセス権限は、フォルダーのアクセス権限を継承するその下のツリー項目に引き継がれます。



5. 「OK」をクリックします。

## プロジェクトの削除、削除の取り消し、およびパージ

プロジェクトを削除しても、そのプロジェクトのデータは破棄されません。それは単に、プロジェクトが削除されたとマークし、ユーザーをそのプロジェクトにアクセスできなくするだけです。データを破棄するには、プロジェクトを削除してからパージする必要があります。

削除したフォルダーをパージすると、それらのプロジェクトがデータベースから永久に削除されます。

プロジェクトまたはその中にあるものを開いている場合、そのプロジェクトを削除することはできません。


**注意** データベース・エクスプローラーの左ペインで、フォルダーまたはプロジェクトを選択している場合、フォルダーまたはプロジェクトは開いた状態になっています。開かれているフォルダーのアイコン、または開かれているプロジェクトのアイコンが表示されています。また、選択している項目のすべ




ての上位のフォルダーまたはプロジェクトも開いた状態です（アイコンは通常のアイコンのままです）。モジュールが開いている場合には、データベース・ツリー上でそのモジュールの上位のフォルダーやプロジェクトもまた開いた状態になります。

プロジェクトの削除、削除の取り消し、パーズを実行するには、そのプロジェクトとその配下のすべてのフォルダーおよびモジュールに対して削除権限が必要です。


#### プロジェクトを削除するには

- データベース・エクスプローラーの右ペインで、削除するプロジェクトを選択し、「ファイル」>「削除」の順にクリックします。

#### プロジェクトの削除を取り消すには

1. データベース・エクスプローラーに削除された項目が表示されていることを確認します。必要に応じて、「表示」>「削除済みの表示」をクリックします。
2. データベース・エクスプローラーの右ペインで、削除を取り消すプロジェクトを選択し、「ファイル」>「削除の取り消し」の順にクリックします。

#### プロジェクトをパーズするには

1. データベース・エクスプローラーに削除された項目が表示されていることを確認します。必要に応じて、「表示」>「削除済みの表示」をクリックします。
2. データベース・エクスプローラーの右ペインで、パーズするプロジェクトを選択し、「ファイル」>「パーズ」の順に選択します。

オブジェクトをパーズするかどうかを確認するメッセージが表示されます。

3. 「はい」をクリックします。

プロジェクトおよびその配下のすべてのデータは、データベースから永久に削除されます。



# 8

## データのアーカイブと復元

この章では次の内容について説明します。

- ディスクのバックアップ
- Rational DOORS アーカイブ
- サーバ・アーカイブの有効化
- モジュールまたはプロジェクトのアーカイブ
- モジュールの復元
- プロジェクトの復元
- ユーザー情報のアーカイブと復元
- データベース全体の復元

### ディスクのバックアップ

Rational DOORS データベースのデータを、保存先のディスクの障害から保護するため、ディスクの定期的なバックアップを行ってください。バックアップには一般的なファイル・システムのバックアップ・ツールを使用します。

ディスク障害が起きた場合、バックアップからすべてのデータを戻すことができます。

ディスクのバックアップを取得する際

- 全体バックアップ (Full Backup) と差分バックアップ (Differential Backup) を行います。増分バックアップ (Incremental Backup) は行わないでください。

Rational DOORS データベースの構造から、増分バックアップを行うとデータの不整合を起こす可能性があります。

- 差分バックアップの場合、少なくとも週に1回は全体のバックアップを取得します。
- バックアップを取得する前に、すべてのユーザーが Rational DOORS からログアウトしていることを確認します。

多くのバックアップ・ツールは、開いたファイルのバックアップを行いません。ユーザーがデータベースにアクセスしているためファイルがスキップされた場合、データの不整合が生じる可能性があります。

## Rational DOORS アーカイブ

特定のモジュールやプロジェクトのバックアップを行うために Rational DOORS のアーカイブを使用します。例えば、ユーザーが間違っ  
てプロジェクトを削除し、抹消してしまっても、アーカイブから戻すことができます。

Rational DOORS データベースの以下のアイテムをアーカイブできます。

Rational DOORS アーカイブ	拡張子
プロジェクト全体	.dpa
単一モジュール	.dma
データベースのユーザーおよびグループの情報	.dua

Rational DOORS のアーカイブは、Rational DOORS クライアント・マシンまたは Rational DOORS データベース・サーバー・マシンに作成できます。

## サーバ・アーカイブの有効化

アーカイブは、ローカル・マシンに保存する代わりに、Rational DOORS データベースのサーバー・マシンに保存することができます。この場合、アーカイブはデータ・フォルダー内のフォルダーに保存されます。このことにより、ローカル・マシンにしか復元できなかったアーカイブが、任意のコンピュータの Rational DOORS クライアントに復元できるようになりました。

ユーザーが Rational DOORS データベース・サーバー・マシンにアーカイブを作成し、復元できるようにするには、次の手順を行います。

### Windows の場合：

1. Rational DOORS データベース・サーバ・マシンの Rational DOORS 9.2 データ・フォルダーに移動します。データ・フォルダーの中に **serverarchive** などのフォルダーを作成します。データベースのすべてのサーバー・アーカイブがこのフォルダーに作成されます。
2. レジストリー・エディターを開き、  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\Telelogic\ DOORS\_Server\9.2\Config に移動します。

3. 「**DOORS\_Archive\_Location**」という文字列を作成します。
4. この文字列を右クリックし、「**修正**」を選択します。先ほど作成したフォルダーの名前を「**値のデータ**」ボックスに入力します。例えば、「**serverarchive**」と入力します。
5. Rational DOORS 9.2 Database Server を停止し、再起動します。  
サーバー・アーカイブが有効になっていることを確認します。
1. Rational DOORS を起動し、アーカイブと復元を実行する権限を持つユーザーとしてログインします。
2. データベース・エクスプローラーの右ペインでプロジェクトを選択し、「ファイル」>「アーカイブ」の順に選択します。「アーカイブ・プロジェクト」ダイアログ・ボックスに、「サーバー上でアーカイブ」チェック・ボックスが表示されます。このチェック・ボックスは、「アーカイブ・モジュール」チェック・ボックスでも使用できます。「プロジェクトの復元」および「モジュールの復元」ダイアログ・ボックスに、「サーバーからの復元」チェック・ボックスが表示されます。

#### UNIX の場合：

Rational DOORS データベース・サーバーを実行するユーザーのプロファイルまたはスタートアップ・スクリプトの一部として次の環境変数が含まれます。

```
DOORS_ARCHIVE_LOCATION=<directoryname>
```


<directoryname> のディレクトリーは、\$SERVERDATA に関連して作成されます。


## モジュールまたはプロジェクトのアーカイブ

モジュールが、共有編集モードまたは排他的編集モードで開かれていた場合、モジュールのアーカイブを取得できません。

また、プロジェクトやその配下のモジュールなどが開かれていた場合、プロジェクトのアーカイブを取得できません。

アーカイブを作成する前に、アーカイブ対象モジュールを含んでいるベースライン・セットが、すべて閉じられていることを確認してください。

**注意** データベース・エクスプローラーの左ペインで、フォルダーまたはプロジェクトを選択している場合、フォルダーまたはプロジェクトは開いた状態になっています。開かれているフォルダーのアイコン、

または開かれているプロジェクトのアイコンが表示されています。また、選択している項目のすべての上位のフォルダーまたはプロジェクトも開いた状態です（アイコンは通常のアイコンのままです）。モジュールが開いている場合には、データベース・ツリー上でそのモジュールの上位のフォルダーやプロジェクトもまた開いた状態になります。

### モジュールまたはプロジェクトをアーカイブするには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはデータのアーカイブ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。

2. データベース・エクスプローラーの右ペインで、アーカイブするモジュールまたはプロジェクトを選択します。

データベース・エクスプローラーにモジュールやプロジェクトを表示するには、読み取り権限が必要です（その他の権限は必要ありません）。アーカイブには、自分が何も権限を持っていないデータも含めて、すべてのモジュールまたはプロジェクトのデータが含まれています。

サーバー・マシンにアーカイブ・ファイルを作成するには、Step 4に進みます。データベース管理者がサーバー・アーカイブが可能なように Rational DOORS を設定している場合は、ユーザーはサーバー・マシンにのみアーカイブ・ファイルを作成することができます。詳しくは、88 ページの『サーバ・アーカイブの有効化』を参照してください。

3. クライアント・マシンにアーカイブ・ファイルを作成するには、次の手順を実行します。
  - a. 「ファイル」> 「アーカイブ」をクリックします。
  - b. 「ファイル名」ボックスで、アーカイブ・ファイルのパスとファイル名を入力するか、または参照を使用してアーカイブ・ファイルを選択します。Step 5に進みます。
4. サーバー・マシンにアーカイブ・ファイルを作成するには、次の手順を実行します。
  - a. 「ファイル」> 「アーカイブ」をクリックします。
  - b. 「サーバー上でアーカイブ」を選択します。ダイアログ・ボックスでは、「参照」ボタンが表示されません。

**注意** このオプションは、データベース管理者が、Rational DOORS でサーバー・アーカイブを可能にするように設定している場合のみ表示されます。詳しくは、88 ページの『サーバー・アーカイブの有効化』を参照してください。

- c. アーカイブ・ファイルの名前を入力します。アーカイブ・ファイルをサーバーのサブフォルダーに作成する場合は、サブフォルダーへのパスの後にアーカイブ・ファイル名を入力します例えば、「**myarchives/project.dpa**」のように入力します。

**myarchives** というフォルダーがサーバー上に作成され、その中に **project.dpa** が保存されます。

サーバー上のアーカイブ・フォルダーの場所を確実に参照できるように、アーカイブの名前と場所はメモに残しておいてください。アーカイブを復元するときに、このパスとファイル名を入力する必要があります。

5. 特に指定しない場合、アーカイブにはすべてのベースラインが含まれます。アーカイブにベースラインを含めない場合は、「**ベースラインを保存しません**」を選択します。
6. アーカイブ・ファイルを複数のディスクに分割する場合は、「**複数ディスクに分割**」チェック・ボックスを選択します。これは、フロッピー・ディスクにアーカイブを作成する場合に非常に便利です。
- アーカイブを作成する場合には、フロッピー・ディスクのラベルにアーカイブを取得した順番を記入してください。たとえば、1 枚目のフロッピーのラベルには「1」、2 枚目には「2」を記入してください。
7. カスタマー・サポートから指示されている場合は、「**DOORS バックアップ・システム・ファイルを組み込みます (日常のアーカイブでは必要ありません)**」を選択します。それ以外の場合は、データをアーカイブする場合にこのチェック・ボックスを選択する必要はありません。
8. 「**OK**」をクリックします。

クライアントまたはサーバー・マシンの指定の場所にアーカイブ・ファイルが作成されます。

**注意** アーカイブ・ファイルは、DOORS データベースが格納されているディスクとは別のディスクに

保存し、DOORS データベースのディスクで障害が発生した場合でもアクセスできるようにしてください。

アーカイブしようとしている対象がロックされているためにアーカイブが失敗する場合は、“Managing locks,” on page 226 の指示に従ってください。

## モジュールの復元

アーカイブしたモジュールは、アーカイブを作成した元のデータベースに復元します。別のデータベースに復元すると、モジュールのアクセス権の情報がすべて失われます。これはアクセス権が元のデータベースのユーザーやグループに対して設定されているためです。

**注意** Rational DOORS のデータベース間でデータを転送する場合は、アーカイブではなくパーティションを使用します。パーティションの詳細については、153 ページの『パーティションの管理』を参照してください。

モジュールを復元する場所	失われる情報
同じ（元の）データベース	すべてのインリンクおよびアウトリンクの情報。モジュール内のオブジェクト間のリンク（内部リンク）情報も失われます。
別のデータベース	すべてのインリンクおよびアウトリンクの情報。モジュール内のオブジェクト間のリンク（内部リンク）情報も失われます。 復元されたモジュールのアクセス権に関するすべての情報。復元されたモジュール、およびそのモジュール内のすべてのデータはデフォルトのアクセス権しか使用できません。これは、モジュールが復元される元であるプロジェクトまたはフォルダーからアクセス権が継承されることを意味しています。

モジュールを復元するには

1. 分割された複数のフロッピー・ディスクのアーカイブから復元を行う場合は、フロッピー・ディスク・ドライブに、最後のフロッ



ピー・ディスクを挿入してください。最後のフロッピー・ディスクには、アーカイブされたフロッピー・ディスクの総数の情報が格納されています。

2. データベース・エクスプローラーで、モジュールの復元先となるプロジェクトまたはフォルダーを選択します。

このプロジェクトまたはフォルダーに対する作成権限が必要です。

サーバー・マシンからモジュールのアーカイブを復元する場合は、Step 4 に進みます。

3. クライアント・マシンからモジュールのアーカイブを復元する場合は、次の手順を実行します。

- a. 「ファイル」> 「復元」> 「モジュール」をクリックします。

- b. 「ファイル名」ボックスで、復元するモジュールが含まれているアーカイブ・ファイルの名前を入力するか、または「参照」を使用してファイルの場所を特定します。Step 5 に進みます。

4. サーバー・マシンからモジュールのアーカイブを復元する場合は、次の手順を実行します。

- a. 「ファイル」> 「復元」> 「モジュール」をクリックします。

- b. 「サーバー上でアーカイブ」を選択します。ダイアログ・ボックスでは、「参照」ボタンが表示されません。

**注意** このオプションは、データベース管理者が、Rational DOORS でサーバー・アーカイブを可能にするように設定している場合のみ表示されます。詳しくは、88 ページの『サーバ・アーカイブの有効化』を参照してください。

- c. 「サーバー・ファイル名」ボックスに、復元するモジュールのアーカイブ名を入力します。サーバー上のファイルを参照して指定することはできないため、サーバーのサブディレクトリーにアーカイブを作成した場合は、アーカイブの名前とパスをメモに残しておきます。

5. 「OK」をクリックします。

「モジュールの復元」ダイアログ・ボックスが表示されます。

6. 「新規名」ボックスに、復元したモジュールの名前を入力します。

この名前は大文字小文字が区別されます。例えば、**Mymodule** と **MyMODULE** は別の名前とみなされます。

このモジュール名は、親プロジェクトまたは親フォルダー内で一意でなければなりません。1つの親に従属するすべてのプロジェクト、フォルダー、およびモジュールはそれぞれ異なる名前にする必要があります。

名前には、次の文字を使用できます。

- 英数字（アルファベットの文字と数字）
- スペース文字
- ピリオド（.）
- アンダースコア（\_）
- ハイフン（-）

7. 「OK」をクリックします。

## プロジェクトの復元

アーカイブしたプロジェクトを復元する場合、プロジェクト内のどの部分を復元するかを選択できます。全体のプロジェクトを復元することも、選択した一部のプロジェクト、フォルダー、およびモジュールを復元することもできます。

復元されたモジュール内に完全に含まれているリンクは、保持されません。

復元されたモジュールの一部に、リンクのソース・モジュールおよびターゲット・モジュール、またそのリンクのモジュールが含まれている場合は、リンクが保持されます。

プロジェクトは、アーカイブを作成した元のデータベースに復元します。別のデータベースに復元すると、プロジェクトのチェンジ・プロポーザル・システムがある場合は、それに関する情報およびプロジェクトのアクセス権が失われます。これらのものは、元のデータベースのユーザーおよびグループに特有のものであるためです。

**注意** Rational DOORS のデータベース間でデータを転送する場合は、アーカイブではなくパーティションを使用します。パーティションの詳細については、153

ページの『パーティションの管理』を参照してください。

プロジェクトを復元する場所	保持される情報	失われる情報
同じ（元の）データベース	復元されたモジュール内で完結しているすべてのリンク	復元されたモジュール内で完結していないリンク。
別のデータベース	復元されたモジュール内で完結しているすべてのリンク	<p>復元されたモジュール内で完結していないリンク。</p> <p>復元されたプロジェクトのアクセス権に関するすべての情報。復元されたプロジェクト、およびそのプロジェクト内のすべてのデータのアクセス権はすべてデフォルトの状態となります。これは、プロジェクトを復元する元であるプロジェクトまたはフォルダーからアクセス権が継承されることを意味しています。</p> <p>チェンジ・プロポーザル・システムのすべての情報。</p>

### プロジェクトを復元するには

1. 分割された複数のフロッピー・ディスクのアーカイブから復元を行う場合は、フロッピー・ディスク・ドライブに、最後のフロッピー・ディスクを挿入してください。最後のフロッピー・ディスクには、アーカイブされたフロッピー・ディスクの総数の情報が格納されています。

2. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはプロジェクトの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
3. データベース・エクスプローラーの左ペインで、アーカイブしたプロジェクトの復元先となるプロジェクトまたはフォルダーを選択します。

このプロジェクトまたはフォルダーに対する作成権限が必要です。

サーバー・マシンからプロジェクトのアーカイブを復元する場合は、Step 5 に進みます。

4. プロジェクトのアーカイブをクライアント・マシンから復元するには、次の操作を行います。
  - a. 「ファイル」> 「復元」> 「プロジェクト」をクリックします。
  - b. 「ファイル名」ボックスに、アーカイブしたプロジェクトが含まれているファイル名を入力するか、または「参照」を使用してファイルの場所を特定します。Step 6 に進みます。
5. サーバー・マシンからプロジェクトのアーカイブを復元する場合は、次の手順を実行します。
  - a. 「ファイル」> 「復元」> 「プロジェクト」をクリックします。
  - b. 「サーバーからの復元」を選択します。ダイアログ・ボックスでは、「参照」ボタンが表示されません。

**注意** このオプションは、データベース管理者が、Rational DOORS でサーバー・アーカイブを可能にするように設定している場合のみ表示されます。詳しくは、88 ページの『サーバ・アーカイブの有効化』を参照してください。
  - c. 「サーバー・ファイル名」ボックスに、復元するプロジェクトのアーカイブ名を入力します。サーバー上のファイルを参照して指定することはできないため、サーバーのサブディレクトリにアーカイブを作成した場合は、アーカイブの名前とパスをメモに残しておきます。
6. 「OK」をクリックします。
7. 「新規名」ボックスに、復元したプロジェクトの名前を入力します。

この名前は大文字小文字が区別されます。例えば、**Myproject** と **MyPROJECT** は別の名前とみなされます。

プロジェクトの名前は、Rational DOORS データベース内で一意でなければなりません。2つのプロジェクトに同じ名前を指定することはできません。

名前には、次の文字を使用できます。

- 英数字（アルファベットの文字と数字）
  - スペース文字
  - ピリオド（.）
  - アンダースコア（\_）
  - ハイフン（-）
8. デフォルトでは、プロジェクト全体が復元されます。アーカイブ内の特定のフォルダー、プロジェクト、またはモジュールを復元しない場合は、左側のボックスの選択を解除します。
  9. 「OK」をクリックします。

## ユーザー情報のアーカイブと復元

ユーザー情報は定期的にアーカイブしてください。ユーザー情報のアーカイブには、データベースのすべてのユーザーとグループの情報が含まれます。

Rational Directory Server を使用するよう Rational DOORS データベースを設定している場合は、Rational DOORS でユーザーおよびグループをアーカイブできません。

ユーザー情報をアーカイブするには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはデータのアーカイブ権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順にクリックします。
3. 「アーカイブ」タブをクリックします。
4. 「ユーザーとグループのアーカイブ」セクションで、データをアーカイブするファイルの名前を「ファイル名」ボックスに入力するか、「参照」を使用してファイルの場所を特定します。
5. アーカイブ・ファイルを複数のディスクに分割する場合は、「複数ディスクに分割」チェック・ボックスを選択します。これは、

フロッピー・ディスクにアーカイブを作成する場合に非常に便利です。

アーカイブを作成する場合には、フロッピー・ディスクのラベルにアーカイブを取得した順番を記入してください。たとえば、1枚目のフロッピーのラベルには「1」、2枚目には「2」を記入してください。

6. 「**アーカイブ**」をクリックします。

7. 「**OK**」をクリックします。

アーカイブされたユーザー情報を復元すると、現在のユーザー情報は、アーカイブの情報にすべて置き換えられます。例えば、次のようになります。

- アーカイブを作成した後で削除されたユーザーは、もう一度作成されます。
- アーカイブを作成した後に付与されたユーザーのアクセス権は、既存のユーザーやグループのものと一致しくなくなります。Rational DOORS は、これらのアクセス権を自動的に削除します。
- 別のデータベースでアーカイブしたユーザー・リストを復元すると、現行のデータベースの管理者パスワードは、アーカイブ元のデータベースの管理者パスワードで上書きされます。

ユーザー情報を復元するには

1. 分割された複数のフロッピー・ディスクのアーカイブから復元を行う場合は、フロッピー・ディスク・ドライブに、最後のフロッピー・ディスクを挿入してください。最後のフロッピー・ディスクには、アーカイブされたフロッピー・ディスクの総数の情報が格納されています。
1. 管理者ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、「ツール」>「ユーザーの管理」の順をクリックします。
3. 「**アーカイブ**」タブをクリックします。
4. 「ユーザーとグループの復元」セクションで、アーカイブされたユーザー情報が含まれているファイルの名前を「**ファイル名**」ボックス入力するか、「**参照**」を使用してファイルの場所を特定します。
5. 「**復元**」をクリックします。
6. 「**OK**」をクリックします。

## データベース全体の復元

Rational DOORS データベース全体が破損した場合には、データベースが格納されているディスクを復元してください。ディスク全体を復元するには、ディスクのバックアップを使用します。

例えば、バックアップ・テープを損失したためにディスクを復元できない場合は、Rational DOORS のカスタマー・サポート・チームに連絡してください。Rational DOORS のアーカイブを使用してデータベースを復元するための手順をお伝えします。データを復旧するためのアドバイスを受けられます。





# 9

## 電子署名の管理

この章では次の内容について説明します。

- 電子署名について
- 電子署名の機能
- 署名とともに保存される情報の種類
- ラベル指定子タイプの作成
- 電子署名の設定

### 電子署名について

レビュー・プロセスは、プロジェクトのライフ・サイクルの重要な一部です。レビュー・プロセスは複雑で時間を要する活動であり、レビューと承認のために文書を大量にコピーしてさまざまなユーザーに配布する必要があります。さらに、レビューの後、このコピーを回収して、整理統合し、保管する必要もあります。こういった作業はすべて Rational DOORS の外部で行うことになるので、作業のトレーサビリティや履歴は確保できず、文書へのアクセス制御もほとんどできません。

Rational DOORS に電子署名が導入されたことによって、上で述べたプロセスはすべて自動化され、文書をデータベースから削除する必要がなくなります。文書は、レビューが必要になった段階で、ユーザーが電子的に評価をできるように設定できます。

また、文書をレビューするユーザーを自由に設定でき、すべての署名がモジュールとともに同じ場所に保存されます。これによって、プロセスは確実なものになり、管理は容易になります。署名情報の取得とレビューも簡単にできます。

文書をレビューするユーザーを設定するほかに、そのユーザーが署名時に選択する必要がある値のリストを定義できます。この値をあらかじめ定義することで、署名情報を評価する際の解釈ミスの危険を軽減できます。また、ベースラインに署名する際には、ユーザー自身のコメントを入力できます。

Rational DOORS の電子署名機能を使うと、従来の文書評価では取り込めなかった情報を記録できます。Rational DOORS は、正確な日時に署名にタイムスタンプを刻印し、ユーザーがどの情報を評価可能だったのかが明確になるようにアクセス制限をすべて記録します。ユーザーに選択させる値のリストを設定しておけば、各ユーザーが選

扱える値のみがリストされます。一度署名されたものについては、署名のいかなる部分も変更できません。

この章の残りの部分では、電子署名がどのように機能するか、および電子署名を使用するための文書の設定でなければならないことについて、詳しく説明します。

## 電子署名の機能

レビュー用の文書を配布する前に、レビューするユーザー全員に同じバージョンの文書が確実に手渡されるように注意する必要があります。従来は、このために文書のコピーを大量に作成して配布する必要がありました。

Rational DOORS のベースライン機能は、この作業を電子的に行うことを可能にしました。ベースラインとは、ある特定の時点での特定のモジュールの読み取り専用のスナップショットです。文書がレビューを受けるのに適切な段階になったところで、ベースラインを作成します。ユーザーはこのベースラインにアクセスして内容をレビューし、署名をします。すべてのユーザーが同じベースラインにアクセスして署名し、全員の署名が同じ場所に保存されるため、署名へのアクセスや署名の相互参照が容易になります。

プロジェクトが進むに連れ、一連のベースラインが作成されて、それぞれにタイムスタンプ付きの署名が記録されます。つまり、モジュール開発の段階ごとの履歴、およびレビュー・プロセスに参加したすべてのユーザーの履歴をすべて取得できます。

すべてのベースラインはモジュールとともに保存され、署名もまた、署名に関連付けられたベースラインとともに保存されるため、ベースラインの検索や確認が非常に容易になります。ベースラインに署名できるユーザー、あるいは署名を読み取れるユーザーを制御できるように、Rational DOORS にはアクセス制御機能が装備されています。

## 署名とともに保存される情報の種類

ユーザーがベースラインに署名すると、その署名とともに次の情報が保存されます。

- ユーザーの Rational DOORS ユーザー名。
- ユーザーの氏名。

Rational DOORS ユーザーを作成すると氏名が与えられます。このフィールドは必須ではありません。Rational DOORS ユーザーに

「氏名」が指定されていない場合、署名の「氏名」欄は空白になります。

- ユーザーがベースラインに署名した日時（Rational DOORS クライアントではなく、Rational DOORS データベース・サーバーの日時です）。

詳しくは、17 ページの『日付と時刻の記録方式』を参照してください。

- 電子署名を設定するには、各ベースラインの評価と署名を行うユーザーにリストを提供し、そのリストから値をレビューアーに選択させる方法を指定できます。Rational DOORS では、このリストをラベル指定子と呼び、リスト内に含まれる値を署名ラベルと呼びます。署名ラベルはモジュールのライフ・サイクルを通して編集できるため、Rational DOORS はベースラインへの署名時にユーザーが使用可能だった署名ラベルを記録します。
- ラベル指定子をユーザーに提供し、その中の署名ラベルをユーザーに選択させる場合は、ユーザーにより選択されたラベルが署名とともに記録されます。
- ベースラインに署名する各ユーザーはコメント欄を使用できます。ユーザーが追加したコメントはすべて署名とともに記録されます。
- データベースがパスワードを使用するようにセットアップされている場合、ユーザーは、署名を追加する前に Rational DOORS のユーザー名とパスワードを憶えておく必要があります。データベースがパスワードを使用するようにセットアップされていない場合は、ユーザー名のみを憶えておいてください。データベースのパスワード・ポリシーは、モジュールのライフ・サイクルの間に変換することがあるため、この情報は署名とともに保存されません。
- Rational DOORS のアクセス制御は、ユーザーがモジュールに保存されているすべての情報にアクセスできないようにする場合があります。さらに、モジュール内の情報の一部を表示できないことに、ユーザーは気付かない場合があります。ユーザーがベースラインに署名する際には、そのユーザーがモジュールへのアクセスを制限されていたかどうか記録されます。この記録により、当時ユーザーが評価できなかった情報についてはユーザーが責任を負うことはありません。

## ラベル指定子タイプの作成

ユーザーにリストを提供し、ベースラインへの署名時にそのリストから値を選択させる場合は、ラベル指定子タイプを作成する必要があります。ラベル指定子は列挙型属性であり、他の列挙型属性と同じ方法で作成されます。この列挙型属性に一連の値を割り当てると、それらの値は、ベースラインへの署名時にユーザーが選択しなければならない値になります。

モジュールの中には膨大な数の列挙型属性がある場合があるため、ラベル指定子タイプとして使用するために作成する列挙型属性には、簡単に識別できる名前を付けるようにしてください。

ラベル指定子タイプにユーザーが値を追加できないようにしたい場合は、列挙型属性タイプにアクセス制限を設定します。

列挙型属性タイプを作成する方法については、「*Rational DOORS の使用*」の『属性の使用』の章を参照してください。

## 電子署名の設定

電子署名はモジュールのベースラインに関連付けられるため、電子署名を設定する前にモジュールをベースライン化する必要があります。

1. モジュールで「ファイル」>「ベースライン」>「表示」の順にクリックします。

「ベースラインの表示」ダイアログ・ボックスが表示され、作成されたベースラインがすべて表示されます。

2. ベースラインを選択し、「署名」をクリックします。どのベースラインを選択してもかまいません。設定がモジュール内のすべてのベースラインに適用されます。この設定はいつでも変更できます。

「ベースライン署名」ダイアログ・ボックスが表示されます。

3. 「構成」をクリックします。

「署名の構成」ダイアログ・ボックスが表示されます。

4. ユーザーに値のリストを提供する場合は、「署名ラベルの組み込み」を選択します。「ラベル指定子タイプ」リストが有効になります。

**注意** ラベル指定子として使用する列挙型を作成していない場合は、操作を続ける前に作成する必要があります。詳しくは、104 ページの『ラベル指定子タイプの作成』を参照してください。

5. 「ラベル指定子タイプ」リストからタイプを選択します。

## アクセス制御の設定

「署名の構成」ダイアログ・ボックスには、電子署名のアクセス制御を設定する2つのタブがあります。「アクセス(署名者)」タブおよび「アクセス(ラベル指定子)」タブです。

- **アクセス(署名者)**

このタブのアクセス制御は、署名の読み取り、ベースラインへの署名、および署名リストの管理が可能なユーザーを決定します。

アクセス権	可能な操作
R	署名の読み取り
M	ベースラインへの署名
A	署名リストの管理

ユーザーに電子署名用のアクセス権を付与するには

- a. 「追加」をクリックします。

「アクセス権の追加 (Add Access)」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- b. 追加したいユーザーまたはグループを上部ペインで選択し、アクセス権を下部ペインで割り当てます。この選択と割り当ては、チェック・ボックスの選択または選択解除によって行います。

- c. 「OK」をクリックします。

「アクセス権の追加」ダイアログ・ボックスが閉じ、ユーザーが追加されます。

- **アクセス(ラベル指定子)**

このタブのアクセス制御は、ラベル指定子タイプを変更できるユーザーを決定します。

アクセス権	可能な操作
M	モジュールを「署名ラベルの組み込み」に設定する。「ラベル指定子タイプ」を変更する

アクセス権	可能な操作
A	ラベル指定子のアクセス権を変更する。

**注意** 「ラベル指定子タイプ」の値(ベースラインに署名を追加する署名者に表示されるドロップダウン・リストのオプション)のアクセス制御は、属性タイプ定義に保持されます。詳細については、「*Rational DOORS の使用*」の『属性タイプへのアクセスの制御』を参照してください。

ユーザーにラベル指定子へのアクセス権を付与するには

- a. 「追加」をクリックします。  
「アクセス権の追加 (Add Access)」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- b. 追加したいユーザーまたはグループを上部ペインで選択し、アクセス権を下部ペインで割り当てます。この選択と割り当ては、チェック・ボックスの選択または選択解除によって行います。
- c. 「OK」をクリックします。  
「アクセス権の追加」ダイアログ・ボックスが閉じ、ユーザーが追加されます。

# 10

## Intelligent Traceability を使用した インクリメンタル開発の管理

この章では次の内容について説明します。

- インクリメンタル開発と Intelligent Traceability
- Intelligent Traceability とベースライン・セット
- ベースライン・セット内でのリンクの振る舞い
- ベースライン・セット外でのリンクの振る舞い
- ベースライン・セット定義とは
- ベースライン・セット定義の作成
- ベースライン・セット定義のコピー
- ベースライン・セット定義の名称変更
- ベースライン・セット定義のアクセス制御
- ベースライン・セット定義の表示
- ベースライン・セットの作成
- ベースライン・セット内でのモジュールのベースライン化
- ベースライン・セットを閉じる
- ベースライン・セット定義の削除

### インクリメンタル開発と Intelligent Traceability

#### インクリメンタル開発

複雑なプロジェクトでは、さまざまなチームが並行して1つのデータセットを使用する場合があります。例えば、開発者の手元にあるユーザー要件文書、システム要件文書、およびテスト文書は、すべて相互に依存しています。プロジェクトの理想的なライフ・サイクルでは、インクリメンタルないくつかのフェーズを通して文書が流動的に使用されます。「インクリメンタルな」とは、作業を1フェーズずつ完了させていき、次のフェーズに着手する前に承認と署名を受けることです。このため、第1フェーズではアナリストがユーザー要件文書を作成し、エンジニアがそのユーザー要件に基づいてシステム要件を作成し、テスト・エンジニアがシステム要件に対応するテストを開発します。このプロセスが完了し、結果の承認と署名が得られれば、プ

プロジェクトが次のフェーズに進み、再び新しいプロセスが開始されます。

ところが、実際のプロジェクトではそれほどスムーズにはプロセスが進行しません。アナリストがエンジニアより先に、そしてエンジニアがテスターより先に第1フェーズでの作業を完了することも、珍しくありません。このことがプロジェクト管理者にジレンマをもたらします。次のフェーズに進めるチームを、他のチームが追いつくまで足止めするか、一部のチームの作業を残したまま、プロジェクトを次のフェーズに進めるかの選択に迫られるからです。ほぼすべてのプロジェクトにおいて「時間」は決定的な要素となるため、プロジェクトを進行させないわけにはいきません。しかし、これが問題の積み残しを招き、プロジェクトの計画と管理を困難にします。

Rational DOORS では、フェーズの作業を完了したチームに、フェーズに関する読み取り専用の記録を作成させることにより、この問題を解決しています。記録を作成したチームは次のフェーズに進み、作業中のチームは残された記録へのアクセスやリンクを実行できます。さまざまなチームが、そのフェーズに関連する文書を完成させてゆくとともに、完成した文書をデータセットに追加することができます。

## Intelligent Traceability

要件管理ツールである Rational DOORS の最も強力な機能は、リンクとトレーサビリティです。リンクを使用すると、プロジェクトに存在する要件間の関係を構築できます。その後は、リンクにアクセスすることによりプロジェクトへの変更を容易に把握できるほか、その変更がリンク先の要件にどのような影響を及ぼすのかを確認できます。

一般的には、要所で要件データのスナップショットを取得すれば、記録は作成できます。しかし、要件間の関係までは記録できません。プロジェクト完了時には、さまざまな要所で作成された文書がそれぞれファイルとしてプロジェクトに残されますが、以上のような理由から、各要所における文書間の関係についてはほとんど知ることができません。

インテリジェント・トレーサビリティは、開発中の各要所において要件間の関係を記録できることを意味します。この手法では、文書ごとのスナップショットを取ることはしません。その代わりに、要件間の関係を保持しながら関連するすべての文書のグループ・ショットを取ります。

Rational DOORS のインテリジェント・トレーサビリティには、同じインクリメンタル・フェーズの異なる時点で作成された複数の文書に



署名する機能があります。この機能によりプロジェクトの計画と管理が容易になり、プロジェクトの履歴がわかりやすくなります。

## Intelligent Traceability とベースライン・セット

ベースラインとは、モジュールの読み取り専用のスナップショットです。モジュールを個別にベースライン化できるほか、モジュールのグループをベースライン・セットとしてベースライン化することもできます。

プロジェクト内でインテリジェント・トレーサビリティを維持するには、モジュールをベースライン化する際にベースライン・セットを使用する必要があります。ベースライン・セットとは、プロジェクトの計画と管理のためにひとかたまりとして扱うベースラインのグループです。プロジェクト開発のフェーズごとにベースライン・セットを1つ作成します。1フェーズが完了したら必要なモジュールをすべてベースライン・セット内にベースライン化し、ベースライン・セットを閉じます。そして、次のフェーズでベースライン・セットを作成します。Rational DOORS には、プロジェクト開発の各フェーズにおける要件の全レコードと、それらの要件間の関係が保持されます。

**注意** また、ベースライン・セットを使用することにより、大規模なモジュール・グループを同時にベースライン化する際の管理上の手間が省けます。

## ベースライン・セット内でのリンクの振る舞い

現行バージョンのモジュール同士のリンクであっても、現行バージョンから既にベースライン・セットの一部となっているベースラインへのリンクであっても、ベースライン・セット内にベースライン化されるモジュール間のリンクはすべてモジュール・セット内に保持されます。フェーズが完了し、モジュール・セット内のすべてのモジュールがベースライン化されたら、ベースライン化されたモジュール間でリンクにアクセスすることができます。その後は、プロジェクト履歴の特定フェーズにおけるモジュールのベースラインを開けば、いつでもベースライン・セット内のモジュール間のリンクを追跡できます。これにより、プロジェクト内のいかなるフェーズにあっても、リンクを作成した当時のままに、リンクされている要件の内容を確認できます。

**注意** ベースライン・セットの一部になっているモジュール間、モジュール・ベースライン間、またはそれらのモジュールとモジュール・ベースライン間に作成

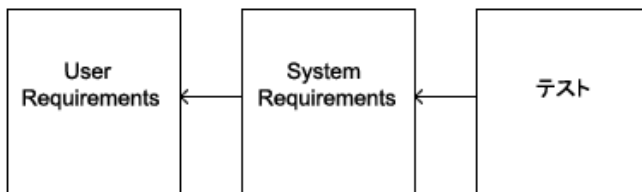
されたリンクのみが、これらの図で説明されているように動作します。ベースライン・セットの一部ではないモジュール間、モジュール・ベースライン間、またはそれらのモジュールとモジュール・ベースライン間のリンクについて詳しくは、113 ページの『ベースライン・セット外でのリンクの振る舞い』を参照してください。

いくつかの図を使いながら、ベースライン・セットの一部としてモジュールをベースライン化した際のリンクの動作をわかりやすく解説します。

1. 3つのモジュール (User Requirements、System Requirements、Tests) をベースライン化して、ベースライン・セットに含めるものとします。

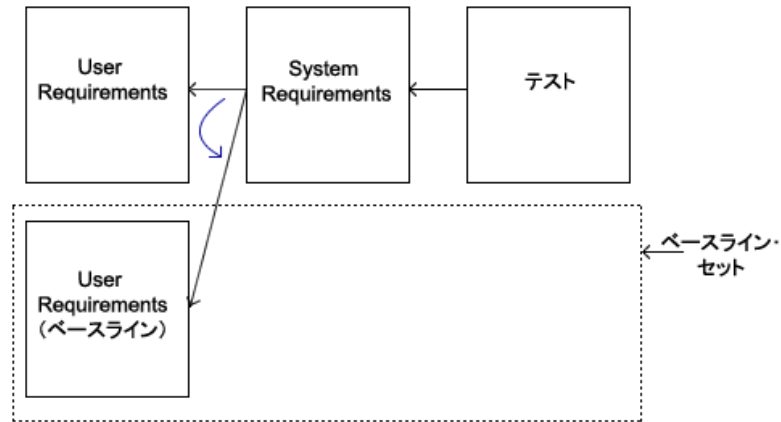
以下のリンクが存在します。

- System Requirements から User Requirements へのリンク
- Tests から System Requirements へのリンク



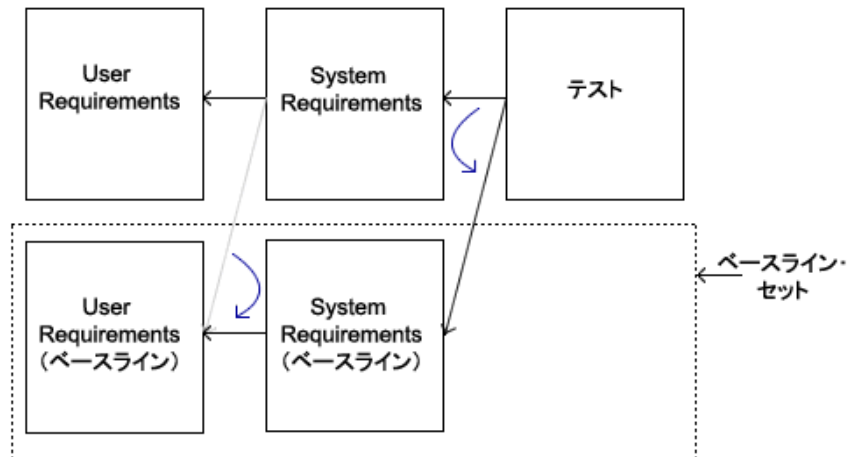
2. User Requirements をベースライン化すると、System Requirements からのインリンクがベースラインにコピーされます。この時点で System Requirements には2つのアウトリンクがあります。1つは

User Requirements へのアウトリンク、もう 1 つは User Requirements (ベースライン) へのアウトリンクです。

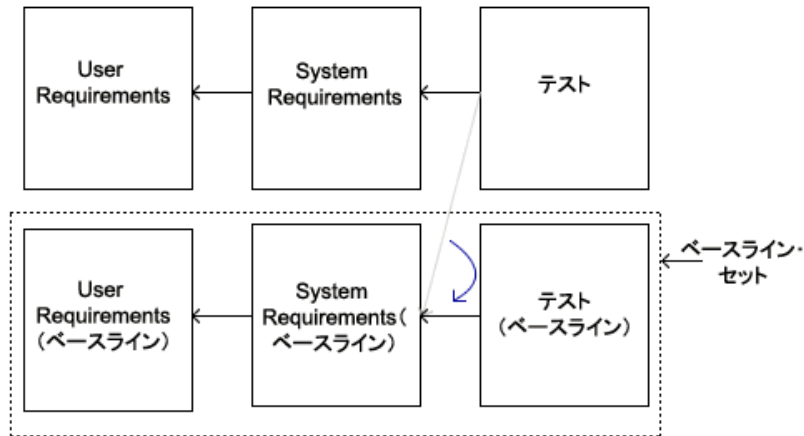


3. System Requirements をベースライン化すると、次のような結果になります。

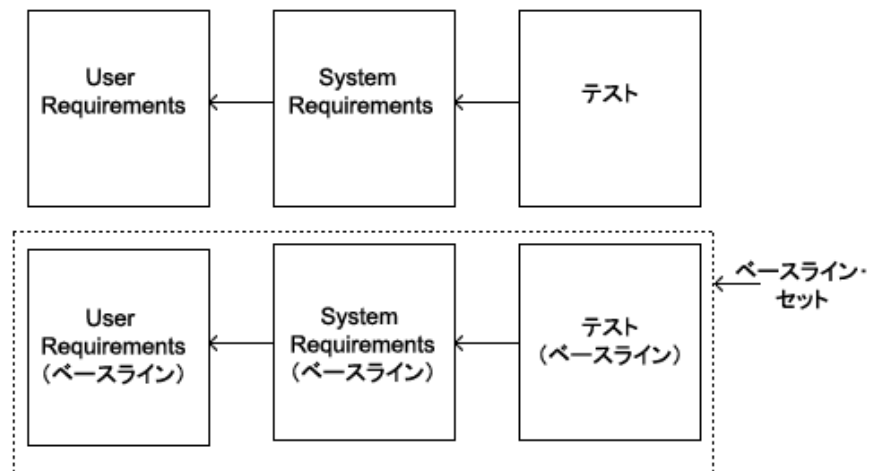
- System Requirements から User Requirements へのアウトリンクがベースライン・セット内に移動します。
- Tests から System Requirements へのインリンクが System Requirements (ベースライン) にコピーされます。



- Tests をベースライン・セット内にベースライン化すると、Tests から System Requirements (ベースライン) へのアウトリンクがベースライン・セット内に移動します。

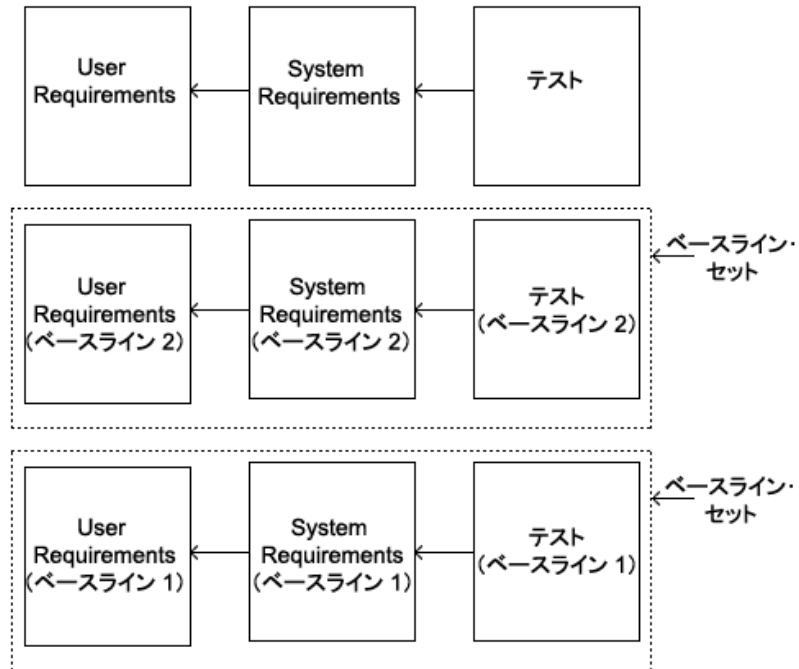


- 最終的なベースライン・セットは、リンクに関して自己完結したベースライン・グループになります。ベースライン化した際にモジュール間に存在していた関係はすべて保持されます。



- さまざまな開発フェーズを通してプロジェクトを進行させるとともに、一連のベースライン・セットを作成します。これにより、

各フェーズが完了した時点の要件とその関係を確認することができます。



**注意** 現行モジュールからモジュール・ベースラインへのリンクを作成することができます。たとえば、上の例の System Requirements モジュールをベースライン化した後は、Tests モジュールからそのベースラインへのリンクを作成できます。ベースライン・セット内の Tests モジュールをベースライン化すると、System Requirements (ベースライン) へのリンクがベースライン・セット内に移動します。プロジェクトのすべてのインクリメンタル・フェーズを通じてトレーサビリティを維持するには、ベースラインへのリンクを作成する際に、そのモジュール・ベースラインの現行バージョンにも、必ず同じリンクを作成します。

## ベースライン・セット外でのリンクの振る舞い

プロジェクト内のモジュールの中には、「常に精密なトレーサビリティを要する」というほどには関連性が高くないものがあります。



現行バージョンで使用される場合にのみ意味を持つようなリンクでは、ベースライン・セットが不要なオーバーヘッドになることがあります。また、関連性の低い文書をベースライン・セットに置くと、緊密な関係を持つ文書の重要性が損なわれかねません。

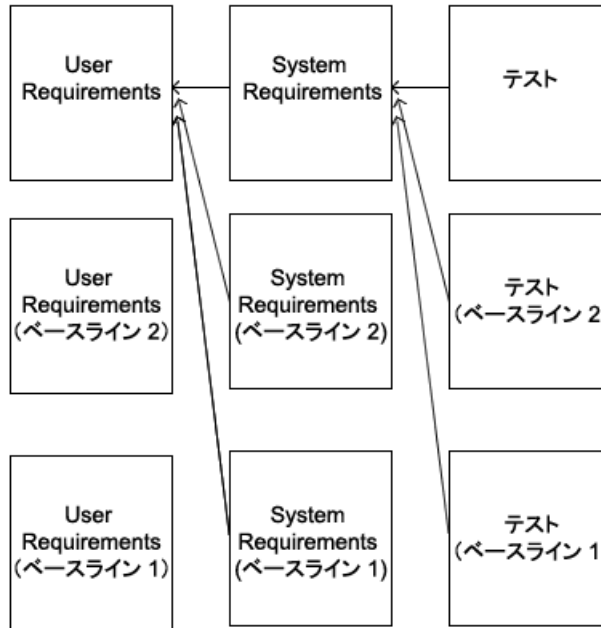
リンクされている複数のモジュールを、ベースライン・セットの外部でベースライン化すると、それらのモジュール間のリンクがベースラインにコピーされます。このようなリンクは、ベースラインから現行バージョンのソース・モジュール（またはターゲット・モジュール）への追跡のみが可能です。現行バージョンからベースラインへのリンクは存在しません。前のセクションの例を使って説明しましょう。ベースライン・セットの外でモジュールがベースライン化されている場合、そのリンクは次の図のように振る舞います。

たとえば、User Requirements へのリンクを持つモジュールは次のとおりです。

- System Requirements ( ベースライン 1)
- System Requirements ( ベースライン 2)
- System Requirements

一方、User Requirements には、現行バージョンの System Requirements へのリンクが 1 つあるだけです。ystem Requirements ( ベースライン x) から User Requirements へのリンクにアクセスすることはできますが、逆方向には追跡できません ( ベースライン方向には追跡できません)。

この種のリンクは振る舞いが他のリンクと異なるため、リンクを表すリンク矢印の表記も異なりますインリンクのリンク矢印は  アウトリンクのリンク矢印は 。



## ベースライン・セット定義とは

ベースライン・セット定義とは、プロジェクトのライフ・サイクル期間内に作成するベースライン・セットのテンプレートです。ベースライン・セットは、プロジェクト管理を効率化するためにひとかたまりとして扱うモジュール・ベースラインのグループです。インテリジェント・トレーサビリティを保持させたいモジュール・グループごとにベースライン・セット定義を作成します。ベースライン・セット定義を作成したら、その後はプロジェクトのフェーズごとにインクリメンタルなベースライン・セットを作成できます。ベースライン・セットはベースライン・セット定義とともに保存されるため、いつでも簡単にベースライン・セットにアクセスし、比較することができます。

**注意** ベースライン・セットを作成する前に、そのベースライン・セットの一部としてベースライン化するすべてのモジュールが、ベースライン・セット定義にリストされていることを確認してください。ベースライン・セットの作成時には、ベースライン・セット定義に表示されているモジュールのみがベースラ

イン・セット内にベースライン化できます。このベースライン・セットを閉じてから、次のベースライン・セット定義向けにモジュールを追加します。

## ベースライン・セット定義の作成

ベースライン・セット定義を作成するには

1. ベースライン・セット定義の管理に使用するプロジェクトまたはフォルダーを選択します。プロジェクトまたはフォルダーに対して、変更および作成権限が必要です。

ベースライン・セット定義に追加するモジュールは、プロジェクトまたはフォルダーに含まれている必要はありません。データベース内のどこからでも選択できます。

2. 右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「ベースライン・セット定義」タブを選択し、「新規」をクリックします。

「新規ベースライン・セット定義」ダイアログ・ボックスが表示されます。

4. 名前を指定し、必要に応じてベースライン・セット定義の説明を入力します。
5. 「OK」をクリックします。

「ベースライン・セット定義」ダイアログ・ボックスが表示されます。

6. 「編集」をクリックします。

「ベースライン・セット定義の編集」ダイアログ・ボックスが表示されます。

このダイアログでは次の操作を行います。

- ベースライン・セット定義に含まれているベースライン・セットに、ベースライン化を可能にしたいモジュールを追加する。
  - ベースライン・セット定義に対するアクセス制御を設定する。
7. データベース階層内を移動し、ベースライン・セット定義に追加するモジュールを選択します。「追加」をクリックすると、選択したモジュールが追加されます。

**注意** ベースライン・セットを作成する前に、そのベースライン・セットの一部としてベースライ



ン化するすべてのモジュールが、ベースライン・セット定義にリストされていることを確認してください。ベースライン・セットの作成時には、ベースライン・セット定義に表示されているモジュールのみがベースライン・セット内にベースライン化できます。このベースライン・セットを閉じてから、次のベースライン・セット定義向けにモジュールを追加します。

8. 親プロジェクトまたは親フォルダーのアクセス制御をベースライン・セット定義に継承させたくない場合は、次の操作を行います。
  - a. 「アクセス」タブを選択します。
  - b. 「親からの継承」ボックスのチェックを解除します。
  - c. 「追加」をクリックして新規ユーザーまたは新規グループを追加します。次にユーザーまたはグループを選択し、アクセス権を割り当て、「OK」をクリックします。
  - d. ユーザーまたはグループを選択し、「編集」をクリックしてそのアクセス権を編集します。必要に応じてアクセス権を変更し、「OK」をクリックします。

ベースライン・セットに適用するアクセス権については、119ページの『ベースライン・セット定義のアクセス制御』を参照してください。

9. モジュールの追加とアクセス権の設定が完了したら、「OK」をクリックします。

「ベースライン・セット定義の編集」ダイアログ・ボックスが閉じ、定義に追加したモジュールが「ベースライン・セット定義」ダイアログ・ボックスに表示されます。

**注意** ベースライン・セット定義のアクセス権を編集する場合は、「ベースライン・セット定義の表示」ダイアログ・ボックスの「アクセス」タブは使用できません。アクセス権を変更するには、「ベースライン・セット定義の表示」ダイアログ・ボックスの「定義」タブで「編集」ボタンをクリックする必要があります。

## ベースライン・セット定義のコピー

ベースライン・セット定義をコピーする場合は、定義に含まれているモジュールのほか、定義に設定されているアクセス制御をコピーします。ベースライン・セット定義から作成されたベースライン・セットをコピーすることはありません。

ベースライン・セット定義をコピーするには

1. コピーしたいベースライン・セット定義を含むプロジェクトまたはフォルダーを選択します。
2. 右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「ベースライン・セット定義」タブを選択します。  
ベースライン・セット定義がリストされます。
4. コピーしたいベースライン・セット定義を選択し、「コピー」をクリックします。  
「ベースライン・セット定義のコピー」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 定義の新しい名前を「コピー先:」ボックスに入力し、必要に応じてその説明を「新規説明」ボックスに入力します。
6. 「OK」をクリックします。

プロジェクトまたはフォルダーのプロパティの「ベースライン・セット定義」タブにコピーの一覧が表示されます。

## ベースライン・セット定義の名称変更

ベースライン・セット定義の名前を変更するには

1. 名称を変更したいベースライン・セット定義を含むプロジェクトまたはフォルダーを選択します。
2. 右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「ベースライン・セット定義」タブを選択します。  
ベースライン・セット定義がリストされます。
4. 名前を変更したいベースライン・セット定義を選択し、「名称変更」をクリックします。  
「ベースライン・セット定義の名称変更」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 定義の名前または説明を編集します。

6. 「OK」をクリックします。

更新された名前と説明が「ベースライン・セット定義」タブに表示されます。

## ベースライン・セット定義のアクセス制御

次の表では、ベースライン・セット定義に適用されるアクセス制御について説明します。

ベースライン・セット定義に必要なアクセス権	実行すること
読み取り (R)	ベースライン・セット定義を参照する。
変更 (M)	ベースライン・セット定義の名前を変更する。 ベースライン・セット定義の説明を変更する。 ベースライン・セット定義にモジュールを追加する。 ベースライン・セット定義からモジュールを削除する。
作成 (C)	ベースライン・セット定義を作成する。 ベースライン・セット定義からベースライン・セットを作成する。
削除 (D)	ベースライン・セット定義を削除する。
管理 (A)	ベースライン・セット定義に対するユーザーまたはグループのアクセス権を変更する。

## ベースライン・セット定義の表示

1. データベース・エクスプローラーで、ベースライン・セット定義を表示するプロジェクトまたはフォルダーを選択します。
2. 右クリックして「プロパティ」を選択します。

3. 「ベースライン・セット定義」タブを選択します。

選択したプロジェクトまたはフォルダーのベースライン・セット定義がリストされます。

## ベースライン・セットの作成

ベースライン・セット定義を作成したら、ベースライン・セットを作成します。ベースライン・セットは、そのセット内でベースライン化された各モジュールのベースラインのバージョン番号、ベースラインのサフィックス、およびベースラインの説明を提供します。

ベースライン・セットを作成するには、その基になるベースライン・セット定義を作成する必要があります。詳しくは、115 ページの『ベースライン・セット定義とは』および 116 ページの『ベースライン・セット定義の作成』を参照してください。

**注意** ベースライン・セットを作成する前に、ベースライン・セットに含めるすべてのモジュールがベースライン・セット定義に表示されていることを確認してください。ベースライン・セットを開くと、ベースライン・セット定義にはそれ以上モジュールを追加できません。ベースライン・セットが閉じていればモジュールを追加できます。

1. ベースライン・セット定義を作成したプロジェクトまたはフォルダーを選択します。
2. 右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「ベースライン・セット定義」タブを選択します。  
プロジェクトまたはフォルダーに作成したベースライン・セット定義の一覧が表示されます。
4. ベースライン・セットの作成に使用するベースライン・セット定義を選択します。
5. 「セットの作成」をクリックします。

**注意** 各ベースライン・セット定義において同時に開くことのできるベースライン・セットは1つだけです。ベースライン・セットが開いている場合はベースライン・セットを作成できず、「セットの作成」ボタンが無効になります。

「ベースライン・セット定義の表示」および「新規ベースライン・セット」ダイアログ・ボックスが表示されます。

6. ベースライン・セットに対応する「バージョン」を選択し、「サフィックス」と「説明」を入力します。

**注意** ベースライン・セットにサフィックスを指定することをお勧めします。モジュールは複数のベースライン・セットに属していることがあり、目的のベースライン・セットの外でベースライン化されている可能性があります。このため、ベースライン・セット内のすべてのベースラインが必ずしも同じバージョン番号であるとは限りません。サフィックスを指定することにより、ベースラインがどのセットに属しているのかを簡単に識別できるようになります。

7. 「OK」をクリックします。
8. 「新規ベースライン・セット」ダイアログ・ボックスが閉じ、ベースライン・セットの一覧が「ベースライン・セット」タブに表示されます。

## ベースライン・セット内でのモジュールのベースライン化

モジュールがベースライン・セット定義に含まれている場合は、その定義の一部としてモジュールをベースライン化するかどうかを指定できます。

ベースライン・セット内にモジュールをベースライン化する方法は2つあります。

- 「ベースライン・セット定義」ダイアログ・ボックスを使用する方法
- 新しいベースラインをモジュールに作成する方法

### 「ベースライン・セット定義」ダイアログ・ボックスを使用する方法

1. 目的のベースライン・セット定義（ベースライン化するベースラインを保持する定義）を含むプロジェクトまたはフォルダーを選択します。
2. 右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「ベースライン・セット定義」タブを選択します。

このプロジェクトに作成されたベースライン・セット定義の一覧が表示されます。

4. モジュールをベースライン化するベースライン・セットを含む定義を選択し、「ビュー」をクリックします。

「ベースライン・セット定義」ダイアログ・ボックスが表示され、定義に含まれるモジュールの一覧が表示されます。

**注意** ベースライン・セット内にベースライン化するモジュールは、このリストに含まれていなければなりません。リストに含まれていないモジュールは、目的のベースライン・セット内にベースライン化できません。

5. 「ベースライン・セット」タブを選択します。

このベースライン・セット定義内に作成されたベースライン・セットがリストされます。ベースライン・セットが開いている場合に限り、モジュールをそのベースライン・セット内にベースライン化できます。開いているベースライン・セットは、「開く」列にアスタリスク (\*) で表されます。

6. リスト内の開いているベースライン・セットを選択し、「ベースライン」タブをクリックします。

ベースライン・セットの一部としてベースライン化できるモジュールの一覧が表示されます。

7. 「セットに追加」をクリックします。

「ベースライン・セットの拡張」ダイアログ・ボックスが表示されます。

8. ベースライン・セットの一部としてベースライン化するモジュールのチェック・ボックスを選択します (複数選択可)。

9. 「OK」をクリックします。

選択したモジュールがベースライン化されます。ベースライン化されたモジュールの隣にある「バージョン」列に、ベースラインのバージョン番号とベースライン・セットのサフィックスが表示されます。

**注意** バージョン番号はモジュールのベースライン・バージョンであり、ベースライン・セットのバージョンではありません。これは、同一ベースライン・セット内の複数のモジュールが、それぞれ異なるバージョン番号を持つことを意味します。そのベースラ

イン・セットの外でモジュールがベースライン化されることがあるためです。また、モジュールが複数のベースライン・セットに含まれ、そうしたベースライン・セットの一部としてベースライン化されている場合もあります。ベースライン・セットのサフィックスは、そのセット内のすべてのベースラインに共通のものであるため、他のセットに属しているベースラインと区別する際に役立ちます。

## 新しいベースラインをモジュールに作成する方法

1. ベースライン・セットの一部としてベースライン化するフォーマル・モジュールにおいて、「ファイル」>「ベースライン」>「新規」の順にクリックします。

「新規ベースライン」ダイアログ・ボックスが表示されます。モジュールから作成されたベースラインは「既存のベースライン」ペインに表示されます。

2. 「ベースライン・セット」で適切なベースライン・セットが選択されていることを確認します。

**注意** このダイアログ・ボックスのオプションはすべて無効になります。作成したモジュール・ベースラインのバージョン・タイプ（メジャーまたはマイナー）、サフィックス、および説明は、そのベースラインが追加されるベースライン・セットから取得されるためです。

3. 「OK」をクリックします。

目的のベースラインがどのベースライン・セットに追加されるのかを示す確認メッセージが表示されます。

4. 「確認」をクリックします。

モジュールがベースライン・セット内にベースライン化されます。

## ベースライン・セットを閉じる

ベースライン・セットに含めたいモジュールをすべてベースライン化したら、ベースライン・セットを閉じます。ベースライン・セット定義内の有効なモジュールがすべてセット内にベースライン化されると、ベースライン・セットが自動的に閉じます。

閉じているベースライン・セットには、モジュールをベースライン化できません。

**注意** ベースライン・セット内のベースラインと、そのベースライン・セット外のモジュール (現在のバージョン) との間に存在するリンクは、ベースライン・セットを閉じると失われます。

1. 目的のベースライン・セット定義 (閉じるベースラインを保持する定義) を含むプロジェクトまたはフォルダーを選択します。
2. 右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「ベースライン・セット定義」タブを選択します。

このプロジェクトに作成されたベースライン・セット定義の一覧が表示されます。

4. 閉じるベースライン・セットを含む定義を選択し、「ビュー」をクリックします。

「ベースライン・セット定義」ダイアログ・ボックスが表示され、定義に含まれるモジュールの一覧が表示されます。

5. 「ベースライン・セット」タブを選択します。

このベースライン・セット定義内に作成されたベースライン・セットがリストされます。開いているベースライン・セットは、「開く」列にアスタリスク (\*) で表されます。

6. 開いているベースライン・セットを選択します。

ベースライン・セット定義内のリスト内のモジュールが実際にセット内でベースライン化されことを確認するには、「ベースライン」タブを選択します。

ベースライン・セットの一部としてベースライン化されたモジュールには、その隣の「バージョン」列にバージョン番号とサフィックスが表示されます。

**注意** 利用可能なすべてのモジュールがベースライン化される前にベースライン・セットを閉じてもかまいません。

7. 「閉じる」をクリックします。

目的のベースライン・セットの一部としてはベースライン化されなかったモジュールがベースライン・セット定義内に存在する場合は、ベースライン・セットを閉じるかどうかを確認するメッセージが表示されます。



8. 「はい」をクリックします。  
ベースライン・セットが閉じます。

## ベースライン・セット定義の削除

ベースライン・セット定義を削除しても、その定義とともに保存されていたベースライン・セット内のベースラインは一切削除されません。この操作では、プロジェクトまたはフォルダーから定義が削除されるほか、作成されたベースライン・セットのレコードが削除されません。削除した定義に関連付けられていたベースライン・セットに属するベースラインは、その後も現行バージョンのモジュールから開くことができます。ただし、ベースライン・セット定義を削除すると、そのベースライン・セットにはアクセスできなくなり、同セットに属していたベースラインも同じ場所からは開かなくなります。

ベースライン・セット定義を削除するには

1. 削除したいベースライン・セット定義を含むプロジェクトまたはフォルダーを選択します。
2. 右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「ベースライン・セット定義」タブを選択します。  
ベースライン・セット定義がリストされます。
4. 削除したいベースライン・セット定義を選択し、「削除」をクリックします。
5. 「はい」をクリックします。  
ベースライン・セット定義が削除されます。



# 11

## チェンジ・プロポーザル・システムの管理

この章は、プロジェクト管理者およびデータベース管理者を対象としています。

ここでは、チェンジ・プロポーザルの管理者が実行するタスクについて説明しますが、具体的には次のトピックが含まれています。

- チェンジ・プロポーザル・システムの作成
- レビューのためにモジュールを構成する
- チェンジ・プロポーザル・ユーザーの表示
- 新しいチェンジ・プロポーザル・ユーザーの追加
- チェンジ・プロポーザル・ユーザーのロールの変更
- チェンジ・プロポーザル・ユーザーの削除
- チェンジ・プロポーザル・システムの削除

標準のチェンジ・プロポーザル・ユーザーおよびチェンジ・プロポーザル・レビューアーが実行するタスクの詳細については、「*Rational DOORS の使用*」を参照してください。

### チェンジ・プロポーザル・システムの作成

**注意** チェンジ・プロポーザル・システム (CPS) を作成すると、作成したユーザーは、自動的にチェンジ・プロポーザル管理者になります。

チェンジ・プロポーザル・システムを作成するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。

**注意** 管理者ユーザーは CPS を作成することはできません。

2. データベース・エクスプローラーの左ペインで、CPS を作成するプロジェクトを選択します。プロジェクトに対して、フル・アクセス権 (RMCD) が必要です。
3. 「ツール」 > 「チェンジ・プロポーザル・システム」 > 「セットアップ」 > 「新規」を順にクリックします。

プロジェクトの下に、「チェンジ・プロポーザル・システム」というフォルダーが作成されます。ここには、サジェスション・モジュールおよびプロポーザル・モジュールを含む、CPS のすべての情報が格納されます。

**注意** 「チェンジ・プロポーザル・システム」フォルダーのモジュールを管理するには、この章、および「*Rational DOORS の使用*」に記載されている手順を使用してください。決して直接これらのモジュールを編集しないでください。

4. Rational DOORS により、CPS をすぐに構成するか、または後で構成するかが確認されます。
5. CPS をすぐに構成しない場合は、「いいえ」をクリックします。チェンジ・プロポーザル・システムが構成されるまで、ユーザーはプロジェクトに対してチェンジ・プロポーザルを提出できません。
6. CPS を構成する場合は「はい」をクリックします。

「<projectname> のチェンジ・プロポーザル・システム」ウィンドウが表示されます。

この章の残りの部分では、チェンジ・プロポーザル・システムのモジュールおよびユーザーを構成する方法について説明します。

## レビューのためにモジュールを構成する

チェンジ・プロポーザルの管理者は、レビュー用にどのモジュールを構成するか、また、それらのモジュール内のどの属性をレビューの対象とするかを決定します。

レビュー用に属性を設定すると、その属性値に対して読み取り権限のない Rational DOORS ユーザーに対しても、それらの属性が間接的に表示されてしまうことに注意してください。たとえば、Jim は **Confidential** という属性に対して読み取り権限を持っていませんが、Sue は持っているとしします。Jim はチェンジ・プロポーザルを提出するときに、この属性を見ることはできません。ただし Jim が、Sue の提出したチェンジ・プロポーザルを見た場合には、Jim にもその (Confidential) の値が表示されます。これは、値が Sue のプロポーザルに含まれているためです。Jim が属性定義に対する読み取り権限を持っていない場合は、その属性は表示されず、そのチェンジ・プロポーザルをレビューすることもできません。

レビューのためにモジュールを構成するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、CPS を構成するプロジェクトを選択します。  
自身が、この CPS のチェンジ・プロポーザル管理者でなければなりません。
3. 「ツール」 > 「チェンジ・プロポーザル・システム」 > 「セットアップ」 > 「構成」を順にクリックします。  
「モジュール」タブに、現在レビューの対象として設定されているすべてのモジュールが表示されます。
4. リストにモジュールを追加するには
  - a. 「追加」をクリックします。  
ミニエクスプローラーが表示されます。
  - b. 追加するモジュールを選択し、「OK」をクリックします。
5. デフォルトでは、「オブジェクト見出し」および「オブジェクト・テキスト」の属性が、レビュー用に設定されています。  
レビューのために構成する属性をチェックまたは変更するには
  - a. モジュールを選択し、「属性」をクリックします。  
レビューに含めることができる属性のリストが表示されます。ユーザー定義の属性と、以下のシステム属性を含めることができます。オブジェクト見出し、オブジェクト・ショート・テキスト、およびオブジェクト・テキスト。
  - b. 設定したい属性のチェック・ボックスをチェックします。
  - c. 「OK」をクリックします。
6. リストからモジュールを削除するには
  - a. モジュールを選択し、「削除」をクリックします。  
モジュールを削除してよいかどうかを確認するメッセージが表示されます。
  - b. 「はい」をクリックします。
7. 終了したら、「OK」をクリックします。  
構成に対して行った変更が適用されます。処理に少し時間がかかる場合があります。  
新しいモジュールを追加した場合

- 「チェンジ・プロポーザル・システム」フォルダーに、プロポーザル・モジュールが作成されます。このモジュールには、定義されているチェンジ・プロポーザル・ユーザーに対してそれぞれ1つのセクションがあります。
- 新しく作成されたプロポーザル・モジュールから元のモジュールへのリンクに対するリンクセットが作成されます。

モジュールを削除した場合

- 「チェンジ・プロポーザル・システム」フォルダーから、プロポーザル・モジュールが削除およびページされます。このことは、すでにソース・モジュールに適用されているプロポーザルには影響しません。ただし、履歴情報も含めて、プロポーザル・モジュールに格納されているすべての情報が失われます。
- プロポーザル・モジュールから元のモジュールへのリンクに対するリンクセットが削除されます。

## チェンジ・プロポーザル・ユーザーの表示

チェンジ・プロポーザル・ユーザーを表示するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、参照する CPS が定義されているプロジェクトを選択します。

自身が、この CPS のチェンジ・プロポーザル管理者でなければなりません。

3. 「ツール」 > 「チェンジ・プロポーザル・システム」 > 「セットアップ」 > 「構成」を順にクリックします。
4. 「ユーザー」タブをクリックします。

レビューに参加するように設定されているすべてのユーザーのリストが表示されます。

5. 複数のユーザーを選択するには、「Shift」または「Ctrl」キーを使います。

ユーザー・リスト内の任意の場所をクリックして文字を入力すると、入力した名前にハイライトが移動します。例えば、「john」と入力すると、名前が **john** で始まる最初のユーザーが強調表示されます。

6. このプロポーザルのステータスが変わったとき、またはグループに対してこれらのプロポーザルが追加または削除されたときに、この CPS のユーザーに通知しない場合は、「更新を電子メールで通知します」チェック・ボックスの選択を解除します。
7. レビュー中にレビューアーがチェンジ・プロポーザルを修正できるようにするには、「レビューアーによる CP の編集を許可」を選択します。

## 新しいチェンジ・プロポーザル・ユーザーの追加

新しいチェンジ・プロポーザル・ユーザーを追加するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、CPS を管理するプロジェクトを選択します。  
自身が、この CPS のチェンジ・プロポーザル管理者でなければなりません。
3. 「ツール」 > 「チェンジ・プロポーザル・システム」 > 「セットアップ」 > 「構成」を順にクリックします。
4. 「ユーザー」タブをクリックします。
5. 「追加」をクリックします。  
新しいチェンジ・プロポーザル・ユーザーを追加しても、既存のチェンジ・プロポーザル・ユーザーには影響しないことを示すメッセージが表示されます。すでに存在しているチェンジ・プロポーザル・ユーザーを追加しても、そのユーザーのチェンジ・プロポーザルのロールは変更されません。
6. 「OK」をクリックして処理を続けます。  
データベースのすべてのユーザー、およびすべてのグループのリストが表示されます。
7. 追加するユーザーおよびグループを選択します。  
グループにどのユーザーが所属しているかを確認する場合は、グループを選択し、「メンバー」をクリックします。グループ内のすべてのユーザーのリストが表示されます。
8. 「CP ロール」ボックスで、ユーザーのチェンジ・プロポーザル・ロールを選択します。

**注意** すべてのチェンジ・プロポーザル管理者は、ユーザー作成権限を持っているようにします。CPS を管理するにはこの権限が必要です。

9. 「OK」をクリックします。

10. 「ユーザー」タブのメンバーのリストに、Step 7 で選択したユーザーが追加されます。

グループを選択した場合は、グループ名ではなく、グループ内のすべてのユーザーの名前が表示されます。グループを選択することにより、グループに所属しているすべてのユーザーをすばやく選択できます。

**注意** グループのメンバーが変更され、その変更をチェンジ・プロポーザル・ユーザーに反映させて更新したい場合は、単純にグループをもう一度追加します。新しいメンバーは、新しいチェンジ・プロポーザル・ユーザーになります。既存のユーザーは何も変更されません。つまり、すでにそのグループには所属していないユーザーも、そのままチェンジ・プロポーザル・ユーザーとなります。

11. 「OK」をクリックします。

新しいユーザーが追加されます。処理に少し時間がかかる場合があります。

追加された新しいユーザーに対して、「チェンジ・プロポーザル・システム」フォルダーのサジェスション・モジュール、およびそれぞれのプロポーザル・モジュールに新しいセクションが作成されます。

## チェンジ・プロポーザル・ユーザーのロールの変更

チェンジ・プロポーザル・ユーザーのロールを変更するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、CPS を管理するプロジェクトを選択します。

自身が、この CPS のチェンジ・プロポーザル管理者でなければなりません。



3. 「ツール」 > 「チェンジ・プロポーザル・システム」 > 「セットアップ」 > 「構成」を順にクリックします。
4. 「ユーザー」タブをクリックします。
5. ロールを変更したいユーザーを選択し、「編集」をクリックします。

**注意** 自分自身のロールを変更することはできません。自分のロールを変更したい場合は、他のチェンジ・プロポーザル管理者に依頼します。すべてのチェンジ・プロポーザル管理者は、ユーザー作成権限を持っているようにします。CPSを管理するにはこの権限が必要です。
6. 「CP ロール」ボックスで、対象のロールを選択します。
7. 「OK」をクリックします。
8. 「OK」をクリックします。

## チェンジ・プロポーザル・ユーザーの削除

チェンジ・プロポーザル・ユーザーを削除しても、「チェンジ・プロポーザル・システム」フォルダーの既存のモジュールには影響がありません。削除したユーザーのセクションは、サジェスション・モジュール、およびプロポーザル・モジュールに残ったままとなります。

ユーザー削除の影響が出るのは、削除以降に新しく作成されたプロポーザル・モジュールです。レビューのために次にモジュールを追加したときに、ユーザーはセクションを取得できません。

### チェンジ・プロポーザル・ユーザーを削除するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、CPS を管理するプロジェクトを選択します。

自身が、この CPS のチェンジ・プロポーザル管理者でなければなりません。
3. 「ツール」 > 「チェンジ・プロポーザル・システム」 > 「セットアップ」 > 「構成」を順にクリックします。
4. 「ユーザー」タブをクリックします。
5. 削除するユーザーを選択し、「削除」をクリックします。

**注意** 自分自身を削除することはできません。自分を削除したい場合は、他のチェンジ・プロポーザル管理者に依頼してください。

6. 「OK」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。

## チェンジ・プロポーザル・システムの削除

チェンジ・プロポーザル・システムを削除するには

1. データベース管理者、またはユーザーの作成権限を持つカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、CPS を削除するプロジェクトを選択します。

自身が、CPS のチェンジ・プロポーザル管理者でなければなりません。また、プロジェクトに対して削除権限を持っていることが必要です。

3. 「ツール」 > 「チェンジ・プロポーザル・システム」 > 「セットアップ」 > 「削除」を順にクリックします。

CPS を削除してもよいかどうかを確認するメッセージが表示されます。

4. 「はい」をクリックします。

そのプロジェクトの「チェンジ・プロポーザル・システム」フォルダーが削除、およびパージされます。

# 12

## データベース・サーバーの管理

この章は、データベース管理者、およびデータベースの管理権限を持っているユーザーを対象に説明します。

この章のトピックスは、次のとおりです。

- サーバーのパスワードの変更
- サーバーの起動
- サーバーの停止
- Windows 上でのサーバーの削除および再インストール
- 追加のデータベース・サーバー・サービスのインストールと削除
- マシン上で動作しているデータベース・サーバー・サービスの確認
- サーバーのポート番号の変更
- サーバーに接続しているユーザーの確認
- 不適切な接続およびロックされたファイルの解消
- dbadmin コマンド・スイッチについて

### サーバーのパスワードの変更

Rational DOORS データベース・サーバーを管理するために Server Manager または dbadmin コマンドを使用する場合は、サーバーのパスワードを入力する必要があります。

最初に Rational DOORS サーバーをインストールした際には、サーバーのパスワードは空白（ブランク）に設定されています。これは、誰でもサーバーを管理できてしまうことを意味しています。通常のユーザーがサーバーを管理できないように、サーバーのパスワードを変更してください。

サーバーのパスワードを変更する方法は、サーバーが実行されているコンピューター的环境に依存します。

- Windows 上でのパスワードの変更
- UNIX 上でのパスワードの変更

**注意** Rational DOORS データベース・サーバーのパスワードを忘れてしまった場合には、Rational DOORS のサ

ポートに連絡してください。パスワードのリセット方法をお伝えします。

## Windows 上でのパスワードの変更

1. 「開始」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Rational」 > 「IBM Rational Lifecycle Solutions Tools」 > 「IBM Rational DOORS 9.2」 > 「DOORS Database Server Admin」を順にクリックします。

Server Manager が実行されます。

2. パスワードを変更したいサーバーに接続します。
  - a. 「データベース」ボックスに `port@computer` の形式でサーバーの場所を指定します。

パラメーター	説明
port	サーバーが使用しているポート番号（デフォルトは 36677）。
computer	サーバーが実行されているコンピューター名。

- b. 「パスワード」ボックスに、サーバーの現在のパスワードを入力します。
  - c. 「リストの最新表示 (Refresh List)」をクリックします。
3. 「パスワードの変更」をクリックします。
4. 新しいパスワードを「新規パスワード」と「新規パスワードの確認」ボックス両方に入力し、「OK」をクリックします。
5. 「閉じる」をクリックし、Server Manager を終了します。

## UNIX 上でのパスワードの変更

**注意** UNIX マシンおよび Windows マシンが混在している環境では、Windows コンピューターの Server Manager を使用して、UNIX サーバーのパスワードを変更できません。

UNIX コンピューターのパスワードを変更するには

1. `$Rational DOORSHOME/bin` ディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力します。

```
dbadmin -data port@computer [-password oldpassword]
-newpassword newpassword
```

パラメーター	説明
port	サーバーが使用しているポート番号（デフォルトは 36677）。
computer	サーバーが実行されているコンピューター名。
oldpassword	現在のパスワード（パスワードが現在空白になっている場合、-password スイッチを省略する）
newpassword	新しいパスワード

## サーバーの起動

Rational DOORS データベース・サーバーを起動する方法は、Rational DOORS データベース・サーバーが実行されているコンピューターの環境に依存します。

- Windows
- UNIX

### Windows 上でのサーバーの起動

Windows 上では、Rational DOORS データベース・サーバーはサービスとして実行されます。すべてのサービス同様、データベース・サーバーの起動と停止はコントロールパネルから行うことができます。

サーバーは、そのサーバーを実行するコンピューターが起動されると自動的に起動します。

サーバーは、起動時に以下の設定情報をレジストリーから読み取ります。

レジストリーの値	説明
portnumber	サーバーが使用するポート番号。デフォルトは 36677 です。  1000 未満のポート番号は使用しないでください。ポート番号が 1000 未満の場合、サーバーは特権モードで実行する必要があります。特権モードでサーバーを実行しないでください。

レジストリーの値	説明
serverdata	Rational DOORS データの位置。すべてのデータベース・ファイルが格納されているフォルダーの絶対パス。
home	Rational DOORS のホーム・ディレクトリー。Rational DOORS がインストールされているフォルダーの絶対パス。

Rational DOORS データベース・サーバーを開始する場合、必要に応じてデータベースの動作をログに記録できます。Windows でログ収集を有効にするには、以下のレジストリー値を作成する必要があります。

レジストリーの値	説明
logfile	サーバーのログを収納するファイルへのパス。
loglevel	ログ収集レベル、1（最低）から 6（最も詳細）の範囲。

Windows 上でサーバーを起動するには

1. 「コントロールパネル」の「管理ツール」を開き、「サービス」を選択します。
2. サービス・リストの中から、「**DOORS Database Server 9.2**」を選択し、「開始」をクリックします。

サーバーの起動時に、レジストリーから設定情報が読み取られます。ただし、doorsd コマンドにおいてレジストリーの設定を無効にするスイッチを使用している場合はこの限りではありません。

レジストリーの値	スイッチ (省略形)	説明
portnumber	-portnumber (-p)	サーバーが使用するポート番号。デフォルトは 36677 です。 1000 未満のポート番号は使用しないでください。ポート番号が 1000 未満の場合、サーバーは特権モードで実行する必要があります。特権モードでサーバーを実行しないでください。
serverdata	-serverdata (-s)	Rational DOORS データの位置。すべてのデータベース・ファイルが格納されているフォルダーの絶対パス。
home	-home (-h)	Rational DOORS のホーム・ディレクトリー。Rational DOORS がインストールされているフォルダーの絶対パス (「doorsd.exe」ファイルを格納している「bin」フォルダーの親フォルダー)。

また、doorsd コマンドに -logfile 引数と -loglevel 引数を付けて、データベースの動作をログに記録するようにサーバーを設定することもできます。

レジストリーの値	スイッチ (省略形)	説明
logfile	-logfile (-l)	サーバーのログ収集を収納するファイルへのパス
loglevel	-loglevel (-L)	ログ収集レベル、1 (最低) から 6 (最も詳細) の範囲。

## UNIX 上でのサーバーの起動

Rational DOORS データベース・サーバーは、起動時に環境変数から設定情報を読み取ります。ただし、doorsd コマンドにおいて環境変

数を無効にするコマンド・ライン・スイッチを使用している場合はこの限りではありません。

環境変数	スイッチ (省略形)	説明
PORTNUMBER	-portnumber (-p)	サーバーが使用するポート番号。 デフォルトは 36677 です。 1000 未満のポート番号は使用しないでください。ポート番号が 1000 未満の場合、サーバーは特権モード (ルート・ユーザーとして) で実行する必要があります。特権モードでサーバーを実行しないでください。
SERVERDATA	-serverdata (-s)	Rational DOORS データの位置。すべてのデータベース・ファイルが格納されているフォルダーの絶対パス。
Rational DOORSHOME	-home (-h)	Rational DOORS のホーム・ディレクトリー。Rational DOORS がインストールされているフォルダーの絶対パス (「doorsd」ファイルを格納している「bin」フォルダーの親フォルダー)。

Rational DOORS データベース・サーバーを開始する場合、データベースの動作をログに記録できます。UNIX での doorsd コマンドの引数を以下の表に示します。

スイッチ (省略形)	パラメーター	説明
-logfile (-l)	ファイルのパス	サーバーのログ収集を収納するファイルへのパス
-loglevel (-L)	1 ~ 6 の整数	ログ収集レベル 1 (最低) から 6 (最も詳細) の範囲。



## UNIX コンピューターからサーバーを起動するには

1. Rational DOORS の所有者のユーザーとしてログインします。

Rational DOORS をインストールする際、Rational DOORS 所有者を指定する必要があります。このユーザーは、データ・ディレクトリーとその中のすべてのファイルの所有者となります。

2. `$Rational DOORSHOME/bin` ディレクトリーに移動します。
3. 以下のコマンドを入力します。環境変数を上書きしたいときには、スイッチを使用します。

```
./doorsd
```

## サーバーの停止

Rational DOORS を再インストールしたり、アップグレードするためには、Rational DOORS データベース・サーバーを停止することが必要な場合があります。

**注** Rational DOORS を使用しているユーザーがいるときにサーバーを停止すると、そのユーザーの作業データが失われる可能性があります。

サーバーを停止する前に、ユーザーに対してサーバーを停止する旨の通知を行い、Rational DOORS を終了させるようにしてください。Server Manager を使用して、サーバーに誰も接続していないことを確認してください（146 ページの『サーバーに接続しているユーザーの確認』を参照）。クライアント・セッションがサーバーから切断され、2 分以内に再接続されない場合、そのクライアント・セッションは無効になったものと見なされ、保存していないデータは失われます。

Rational DOORS データベース・サーバーを停止する方法は、Rational DOORS データベース・サーバーが実行されているコンピューターの環境に依存します。

- Windows
- UNIX

### Windows 上でのサーバーの停止

Windows では、Rational DOORS データベース・サーバー・サービスは、コンピューターがシャットダウンされると自動的に停止します。コンピューターをシャットダウンせずに Rational DOORS データベース・サーバー・サービスを停止する場合は、コントロールパネルまたは Server Manager を使用します。

**注意** サーバーを停止するショートカットを作成できます (151 ページの『dbadmin コマンド・スイッチについて』を参照)。

### コントロールパネルからのサーバーの停止

Windows では、コントロールパネルを使用して Rational DOORS データベース・サーバー・サービスを停止できます。

**Windows 上でサーバーを停止するには**

1. 「コントロールパネル」の「管理ツール」を開き、「サービス」を選択します。
2. サービス・リストの中から、「**DOORS Database Server 9.2**」を選択し、右クリックして「**停止**」をクリックします。

### Server Manager を使ったサーバーの停止

Windows では、Server Manager を使用して Rational DOORS データベース・サーバーを停止できます。

1. 「スタート」>「すべてのプログラム」>「**IBM Rational**」>「**IBM Rational Lifecycle Solutions Tools**」>「**IBM Rational DOORS 9.2**」>「**DOORS Database Server Admin**」の順にクリックします。
2. 以上の操作で Rational DOORS Database Server Administration Tool が起動します。
3. 停止したいサーバーに接続します。
  - a. 「データベース・サーバー」ボックスに `port@computer` の形式でサーバーの場所を指定します。

パラメーター	説明
port	サーバーが使用しているポート番号 (デフォルトは 36677)。
computer	サーバーが実行されているコンピューター名。

- b. 「パスワード」ボックスに、サーバーのパスワードを入力します。
  - c. 「リストの最新表示 (Refresh List)」をクリックします。
4. 「サーバーのシャットダウン (Shutdown Server)」をクリックします。

サーバーを停止してよいかを尋ねるメッセージが表示されます。

5. 「はい」をクリックします。
6. 「閉じる」をクリックし、Server Manager を終了します。

## UNIX 上でのサーバーの停止

**注意** UNIX マシンおよび Windows マシンが混在している環境では、Windows コンピューターの Server Manager を使用して、UNIX サーバーを停止できません。

UNIX コンピューターからサーバーを停止するには

1. \$Rational DOORSHOME/bin ディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力します。

```
dbadmin -data port@computer -killserver [-password password]
```

パラメーター	説明
port	サーバーが使用しているポート番号（デフォルトは 36677）。
computer	サーバーが実行されているコンピューター名。
password	サーバーのパスワード（パスワードが現在空白になっている場合は -password スイッチを省略する）

## Windows 上でのサーバーの削除および再インストール

Windows で Rational DOORS データベース・サーバー・サービスの削除と再インストールを行うには

1. DOS コマンドプロンプトを開きます。
  - a. 「スタート」 > 「ファイル名を指定して実行」をクリックします。
  - b. 「名前」ボックスに、**cmd** と入力します。
  - c. 「OK」をクリックします。
2. cd (change directory) コマンドを使用して、「Rational\DOORS\9.2\bin」フォルダーに移動します。例えば以下のように入力します。

```
cd "c:\program files\IBM\Rational\DOORS\9.2\bin"
```

3. Rational DOORS データベース・サーバー・サービスを削除する場合は、以下のコマンドを入力します。

```
doorsd -remove
```

4. Rational DOORS データベース・サーバー・サービスを再インストールする場合は、以下のコマンドを入力します。

```
doorsd -install
```

サービスは、コンピューターが再起動するたびに自動的に起動します。また、シャットダウンするたびに停止します。

## 追加のデータベース・サーバー・サービスのインストールと削除

1つのマシンに複数の Rational DOORS データベース・サーバー・サービスをインストールし、実行することができます。

Windows マシンに別の Rational DOORS データベース・サーバー・サービスをインストールするには

1. コマンド・プロンプトを開きます。
2. 次のコマンドを入力します。

```
doorsd -mininstall -p portnumber -s server data path
```

ここで、*portnumber* は新しいサービスが使用するポートであり、*server data path* はサーバー・データへのパスです。

**注意** 新しいサービスには、既存のサービスとは異なるポート番号を使用しなければなりません。

例えば、次のようになります。

```
doorsd -mininstall -p 36666 -s  
"C:\Program Files\IBM\Rational\DOORS\9.2\newdoorsdata"
```

3. **Return** キーを押します。

新しいサービスがインストールされ、レジストリー内に一意の ID 番号を持つ「Config」フォルダーが作成されます。同じ固有 ID 番号を持つ新しいサービスが、「サービス」ウィンドウにも表示されます。

4. 「サービス」ウィンドウで目的のサービスを強調表示させて、「操作」メニューから「開始」を選択するか、ツールバーの「サービスの開始」ボタンをクリックしてサービスを開始します。

デフォルト・サービスではなくデータベース・サーバー・サービスを削除するには

1. コマンド・プロンプトを開きます。
2. 次のコマンドを入力します。

```
doorsd -mremove -i unique ID
```

ここで、*unique ID* はサービスの作成時にサービスに割り当てられた ID 番号です。

サービスが削除されます。

## マシン上で動作しているデータベース・サーバー・サービスの確認

ご使用の Windows マシンで動作している Rational DOORS データベース・サーバー・サービスのリストを確認するには

1. コマンド・プロンプトを開きます。
2. 次のコマンドを入力します。

```
doorsd -list
```

動作中のサービスがウィンドウにリストされます。

## サーバーのポート番号の変更

Rational DOORS データベース・サーバーは、デフォルトで 36677 のポート番号を使用します。このポート番号は通常他のソフトウェアで使用されることはありません。しかし、このポート番号を他のソフトウェアで使用したい場合、Rational DOORS が別のポート番号を使用するように設定できます。

**注意** 1000 未満のポート番号は使用しないでください。

ポート番号が 1000 未満の場合、サーバーは特権モー

ドで実行する必要があります。特権モードでサーバーを実行しないでください。

対象マシン	方法
Windows	レジストリーの「PortNumber」行を編集します。例えば、サーバーがポート番号 44889 を使用するようにしたい場合は、「PortNumber」を右クリックし、「変更」を選択します。そして、「値のデータ」フィールドに <b>44889</b> を入力します。次回にサーバーが起動されると、新しいポート番号が使用されます。 サーバーをコマンド行またはショートカットから起動し、一時的に違うポート番号を使いたい場合には、 <code>-portnumber</code> スイッチを使用します。このスイッチは省略して <code>-p</code> と指定できます。
UNIX	<code>PORTNUMBER</code> 環境変数の値を変更します。または、コマンド行で <code>-portnumber</code> スイッチを使用します。このスイッチは省略して <code>-p</code> と指定できます。

## サーバーに接続しているユーザーの確認

Rational DOORS クライアントは、データをディスクから読み込むとき、またはディスクに書き込むときだけサーバーに接続します。データの転送が完了すると、すぐに接続は終了します。

現在サーバーに接続されているユーザーを確認する方法は、サーバーが実行されているコンピューターの環境に依存します。

- Windows
- UNIX

### Windows 上で接続しているユーザーの確認

Windows 上で実行されているサーバーに現在接続しているユーザーを確認するには

1. 「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Rational」 > 「IBM Rational Lifecycle Solutions Tools」 > 「IBM Rational DOORS 9.2」 > 「DOORS Database Server Admin」の順にクリックします。

Server Manager が実行されます。

2. ユーザーを確認したいサーバーに接続します。
  - a. 「データベース」ボックスに port@computer の形式でサーバーの場所を指定します。

パラメーター	説明
port	サーバーが使用しているポート番号（デフォルトは 36677）。
computer	サーバーが実行されているコンピューター名。

- b. 「パスワード」ボックスに、サーバーのパスワードを入力します。
  - c. 「リストの最新表示 (Refresh List)」をクリックします。
  - d. 現在接続しているすべてのユーザーのリストが、「ユーザーおよびロックされたファイル (Users and locked files)」ボックスに user\_name@computer の形式で表示されます。

ユーザー名の下に、そのユーザーによって現在ロックされているすべてのファイルが表示されます。

3. 「リストの最新表示 (Refresh List)」をクリックし、ユーザーとロックされたファイルのリストを更新します。
4. 「閉じる」をクリックし、Server Manager を終了します。

## UNIX 上で接続しているユーザーの確認

**注意** UNIX マシンおよび Windows マシンが混在している環境では、Windows コンピューターの Server Manager を使用して、UNIX サーバーへの接続状況を確認できます。また、その逆も可能です。

サーバーに接続しているユーザーを UNIX コンピューターで確認するには

1. \$Rational DOORSHOME/bin ディレクトリに移動します。
2. すべてのユーザーの接続情報を表示するには、以下のコマンドを入力します。

```
dbadmin -data port@computer [-password password] -userlist
```

パラメーター	説明
port	サーバーが使用しているポート番号（デフォルトは36677）。
computer	サーバーが実行されているコンピューター名。
password	サーバーのパスワード（パスワードが現在空白になっている場合は -password スイッチを省略する）

例えば、次のようになります。

```
marg$ dbadmin -data 36677@homer -userlist
-I- DBADMIN 6823:ptfrint@bart
-I- DBADMIN 8978*admin@marg
marg$ dbadmin -data 36677@hog -killprocess 6823
```

現在接続されているすべてのユーザーのリストが `channel-id:user_name@computer` の形式で表示されます。

dbadmin コマンドによる接続は、admin というユーザー名でユーザー名の前にコロンではなくアスタリスクが表示されます。

## 不適切な接続およびロックされたファイルの解消

Rational DOORS データベース・サーバーに接続されているユーザーのコンピューターがクラッシュしてしまった場合、そのユーザーに対しての不適切な接続情報や、その接続に関連したロックされたファイルが、Rational DOORS データベース・サーバーに残る場合があります。

**注意** サーバーを停止し、再起動することにより、不適切な接続やロックされたファイルを自動的に解消できます。

不適切な接続やロックされたファイルを解消する方法は、サーバーが実行されているコンピューターの環境に依存します。

- Windows
- UNIX



## Windows 上でのクリーンアップ

サーバーが Windows コンピューター上にある場合に不要接続およびロックのクリーンアップを行うには

1. 「開始」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Rational」 > 「IBM Rational Lifecycle Solutions Tools」 > 「IBM Rational DOORS 9.2」 > 「DOORS Database Server Admin」を順にクリックします。

Server Manager が実行されます。

2. クリーンアップを行いたいサーバーに接続します。
  - a. 「データベース」ボックスに port@computer の形式でサーバーの場所を指定します。

パラメーター	説明
port	サーバーが使用しているポート番号（デフォルトは 36677）。
computer	サーバーが実行されているコンピューター名。

- b. 「パスワード」ボックスに、サーバーの現在のパスワードを入力します。
  - c. 「リストの最新表示 (Refresh List)」をクリックします。
3. 接続を切断するには、切断したい接続を「ユーザーおよびロックされたファイル (Users and locked files)」ボックスで選択し、「ユーザーの切断 (Disconnect User)」をクリックします。

**注意** 現在接続中のユーザーを切断したり、ユーザーがアクセス中のファイルをロック解除すると、データベースが破損する可能性があるため、そのようなことは行わないよう注意してください。

4. ファイルをロック解除するには、対象を「ユーザーおよびロックされたファイル (Users and locked files)」ボックスで選択し、「ファイルのロック解除 (Unlock File)」をクリックします。
5. 「閉じる」をクリックし、Server Manager を終了します。

## UNIX 上でのクリーンアップ

**注意** UNIX マシンおよび Windows マシンが混在している環境では、Windows コンピューターの Server

Manager を使用して、UNIX サーバーの接続をクリーンアップできます。

### UNIX コンピューターから不適切な接続およびファイルのロックをクリーンアップするには

1. \$Rational DOORSHOME/bin ディレクトリーに移動します。
2. すべてのユーザーの接続状況を表示するために、以下のコマンドを入力します。

```
dbadmin -data port@computer [-password password] -userlist
```

そして、以下のコマンドで接続の切断を行います。

```
dbadmin -data port@computer [-password password] -killprocess  
channel_identifier
```

パラメーター	説明
port	サーバーが使用しているポート番号（デフォルトは 36677）。
computer	サーバーが実行されているコンピューター名。
password	パスワード（パスワードが現在空白になっている場合、-password スイッチを省略する）
channel_identifier	チャネル ID（-userlist スイッチを使用すると表示されます）

例えば、次のようになります。

```
marg$ dbadmin -data 36677@homer -userlist  
-I- DBADMIN 6823:ptfrint@bart  
-I- DBADMIN 8978*admin@marg  
marg$ dbadmin -data 36677@hog -killprocess 6823
```

dbadmin コマンドによる接続は、admin というユーザー名でユーザー名の前にコロンではなくアスタリスクが表示されることに注意してください。

3. すべてのロックされたファイルの状況を表示するには、以下のコマンドを実行します。

```
dbadmin -data port@computer [-password password] -locklist
```

そして、以下のコマンドでファイルをロック解除します。

```
dbadmin -data port@computer [-password password] -unlock  
channel_identifier
```

ここで、channel\_identifier は、-userlist スイッチを使用すると表示されるチャンネル ID です。

**注意** 現在接続中のユーザーを切断したり、ユーザーがアクセス中のファイルをロック解除すると、データベースが破損する可能性があるため、そのようなことは行わないよう注意してください。

## dbadmin コマンド・スイッチについて

Rational DOORS データベース・サーバーを管理するために、dbadmin コマンドを使用することができます。

```
dbadmin -data port@computer [switches]
```

以下の表は、スイッチとその省略形を示しています。

スイッチ (省略形)	パラメーター	説明
-data (-d)	port@computer	Rational DOORS データの位置。これは、サーバーが使用しているポート番号とサーバーが稼動しているコンピュータの名前を指定します。
-killprocess (-k)	channel_identifier	ユーザーの接続を切断します。
-killserver (-K)		サーバーを停止します。
-locklist (-l)		現在ロックされているすべてのファイルを表示します。channel_identifier は -locklist で表示できます。
-outfile (-o)	filename	結果をファイルに出力します (-locklist スイッチおよび -userlist スイッチと一緒に使用します)。
-password (-P)	password	サーバーの現在のパスワード。

スイッチ (省略形)	パラメーター	説明
-newpassword (-p)	newpassword	サーバーの新しいパスワード。
-unlock (-U)	channel_identifier	ロックされたファイルのロックを解除します。 channel_identifier は -locklist で表示できます。
-userlist (-u)		接続されているすべてのユーザーを表示します。
-serverLogging	loglevel 1 - 6	再起動を必要とせずに、サーバー上のログ収集レベルの変更を許可します。これは、loglevel および logfile パラメーターを指定して <b>doorsd</b> が既に始動されていることを前提としています。これらのパラメーターについて詳しくは、137 ページの『サーバーの起動』を参照してください。
-tdsUserFilterLimit	string	RDS ユーザー検索に制限を設定します。
-tdsGroupFilterLimit	string	RDS グループ検索に制限を設定します。

例えば、サーバーをシャットダウンするショートカットを次の方法で作成できます。

- 「Rational DOORS\9.2\bin」フォルダー内にある dbadmin.exe へのショートカットを作成する
- サーバーを停止する -killserver スイッチを使用する

# 13

## パーティションの管理

パーティションの概要は、オンライン・ヘルプまたは「*Rational DOORS 入門*」の『パーティションについて』を参照してください。

この章は、データベース管理者、プロジェクト管理者、およびパーティション・データを操作する権限を持つユーザーを対象としています。この章のトピックスは、次のとおりです。

- パーティション
- 同期
- 3つのファイル
- パーティション定義の作成
- パーティション定義の表示
- パーティション定義の編集
- パーティション定義の削除
- パーティションのエクスポート
- エクスポートされたパーティションの表示
- パーティションのインポート
- インポートされたパーティションの表示
- インポートされたパーティションの詳細の表示
- インポートされたパーティションにデータを追加
- インポートされたパーティションの同期
- エクスポートされたパーティションの同期
- インポートされたパーティションのリターン
- パーティションの再結合
- パーティションのリカバリー

### パーティション

パーティションを使用することで、他のデータベースのモジュールをインポートし、ローカルで編集できるようになります。

モジュールの起点となるデータベースはホーム・データベースと呼ばれます。ユーザー側のデータベースはアウエイ・データベースです。

ホーム・データベースおよびアウェイ・データベースでの作業の流れを以下に示します。

1. ホーム・データベースのユーザーは**パーティション定義**を行います。

定義には、どのデータをパーティションに含むか、またアウェイ・データベース側のユーザーはデータに対してどんなアクセス権限を持つかが記述記述されています。

2. ホーム・データベースのユーザーは、パーティションを**エクスポート**します。

パーティション定義の記述に従ってデータがコピーされ、**パーティション・ファイル**が作成されます。

アウェイ・データベース側で編集ができるモジュールに対しては、**Rational DOORS** はホーム・データベースの該当するモジュールをロックし、読み取り専用にします。

パーティションに含まれるそれぞれのモジュールは、ホーム・データベースで読み取り専用、またはアウェイ・データベースで読み取り専用のいずれかの状態となります。両方のデータベースで同一のモジュールを編集することはできません。

3. ホーム・データベースのユーザーは、パーティション・ファイルをアウェイ・データベースのユーザーに送ります。
4. アウェイ・データベースのユーザーは、パーティションを**インポート**します。

この操作で、パーティション・ファイルからアウェイ・データベースにデータをコピーします。

5. アウェイ・データベースのユーザーは、データを編集します。パーティション定義に含まれるモジュールを共有編集用にセットアップすることはできません。これは、アウェイ・データベースのユーザーは、パーティション定義に含まれるモジュール内のオブジェクトに対して管理者権限を持っていないためです。
6. 編集が終了したら、インポートしたパーティションを**リターン**します。

この操作で**リターン・ファイル**が作成され、パーティションのデータがファイルにコピーされます。このとき、以下の2つの操作のうちいずれかを選択します。

- アウェイ・データベースからすべてのパーティション・データを削除する。

- アウエイ・データベースでパーティション・データを保持する。しかし、状況はリセットされ、通常のローカル・データと同じように扱うことができる。
- 7. アウエイ・データベースのユーザーは、リターン・ファイルをホーム・データベースのユーザーに送ります。
- 8. ホーム・データベースのユーザーは、リターン・ファイルを使ってパーティションを**再結合**します。

Rational DOORS はリターン・ファイルからデータをコピーし、Step 2 で適用されたロックを解除します。ホーム・データベースのデータは読み取り専用が解除されます。

**注** インポートされたパーティションの一部であるモジュールを含むようなパーティション定義をアウエイ・データベースに作ることもできますが、お勧めしません。どのパーティションにもデータを再結合または復元できないためです。

## 同期

アウエイ・データベースで編集可能なモジュールは、ホーム・データベース側では、パーティションが再結合されるまでは読み取り専用のまま残ります。アウエイ・データベースではモジュールが編集されていくため、ホーム・データベースの読み取り専用のモジュールは、次第に古くなっていきます。

従って、定期的にアウエイ・データベースで行われた変更をホーム・データベースに戻し、2つのデータベース間で**同期**を取ることが必要となります。

- アウエイ・データベースのユーザーは、アウエイ・データベース側で行われた更新を含んだ**同期ファイル**を作成します。
- アウエイ・データベースのユーザーは、同期ファイルをホーム・データベースのユーザーに送ります。
- ホーム・データベースのユーザーは、同期ファイルを使ってデータベースの同期を取ります。データは同期ファイルからホーム・データベースへと書き戻されるため、両方のデータベースの同期が取られます。

## 3つのファイル

3つの異なるファイルを使用してデータのパーティション、同期、およびリターンを行います。これら3つのファイルはすべて「.par」という拡張子を持っています。

ファイル	説明
パーティション・ファイル	ホーム・データベースからアウェイ・データベースへデータを転送するために使用します。 アウェイ・データベースで編集可能なモジュールは、ホーム・データベースでは編集ができないように読み取り専用ロックされます。
同期ファイル	アウェイ・データベースからホーム・データベースに更新を転送し、両データベースの同期を取るために使用します。
リターン・ファイル	アウェイ・データベースからホーム・データベースへ最終的な更新ファイルを転送するために使用します。ホーム・データベースの読み取り専用のロックは解除され、データを編集できるようになります。

## パーティション定義の作成

パーティション定義をインポートしようとしているモジュール内のオブジェクトに、アクティブなチェンジ・プロポーザルがないことを確認します。パーティション定義に含まれているモジュールに、ホーム・データベースのそのモジュールに対してアクティブなチェンジ・プロポーザルが存在している場合、アウェイ・データベースのプロジェクトがロックされます。モジュールが読み取り専用権限で分割されていても同様です。

パーティション定義を作成するには

1. ホーム・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、パーティション定義を作成するプロジェクトを選択し、「ファイル」>「プロパティ」をクリックします。

プロジェクトに対する作成権限が必要です。



3. 「パーティション定義」タブをクリックします。
4. パーティション定義を新規に作成する場合は、「新規」をクリックします。また、既存の定義を利用する場合には、コピーしたいパーティション定義を選択し、「コピー」をクリックします。

**注意** 既存の定義をコピーして作成することにより、時間を節約できます。なぜなら、多くの情報を入力する必要がないからです。

5. 「名前」ボックスに、新しいパーティション定義の名前を入力します。
6. パーティション定義についての追加情報を入力する場合、「説明」ボックスに入力します。
7. 「OK」をクリックします。

「パーティション定義の編集」ウィンドウが表示されます。

8. 画面の上部は、データベース・エクスプローラーに似た画面になっています。パーティション定義に含めるモジュールを右ペインから選択します。選択できるのは、Step 2 で選択したプロジェクトのモジュールのみです。
9. 「使用アクセス権限」チェック・ボックスを使用し、アウエイ・データベースのユーザーに持たせたい最大のアクセス権限を設定します。これにより、アウエイ・データベースから設定できるアクセス権限が制限されます。

例えば、「読み取り」と「変更」チェック・ボックスのみを選択した場合、アクセス権限は次のように制限されます。

- アウエイ・データベースでは、誰も作成権限または削除権限がありません。

アウエイ・データベースに管理者権限を持つユーザーは、作成権限および削除権限を設定できますが、これらのアクセス権限は無視されます。

- アウエイ・データベースに管理者権限を持つユーザーは、特定のユーザーやグループにさらに制限を与えることができます。たとえば、QA グループには読み取り権限と変更権限を与え、その他のユーザーには読み取り権限を与えることができます。

10. アクセス権限を指定しつつパーティションにモジュールを追加するには、「選択したモジュールの追加」をクリックします。

選択したモジュールは、画面下部のボックス内にリストが表示されます。ここには、パーティションに含まれるすべてのデータが表示されます。モジュールをパーティション・リストに追加すると、ユーザーが指定したアクセス権限が各モジュールの属性に継承されます。

**注意** 読み取り権限などの特定のアクセス権限を適用してパーティションにモジュールを追加した後に、読み取りも変更も許可されるモジュールを再び追加しても、モジュールの属性は読み取り権限のまま変わりません。属性に新しいアクセス権限を継承させたい場合は、パーティション定義からモジュールを削除し、適切なアクセス権限を使用して再びモジュール定義に追加する必要があります。

11. デフォルトでは、パーティションにはモジュールのすべての属性が含まれます。

特定のモジュールに、含めたくない属性がある場合には、以下の操作を行います。

- a. 画面の下部でリストから該当するモジュールを選択し、「**属性の編集**」をクリックします。
- b. パーティションに含めたくない属性を解除します。  
「**アクセス**」列にはアウエイ・データベースでの最高のアクセス権限が表示されます。
- c. 特定の属性について、アウエイ・データベースでの最高のアクセス権限を変更したい場合には、属性を選択して「**アクセス権限の編集**」をクリックします。
- d. 目的のアクセス権限のボックスを選択し、「**OK**」をクリックします。
- e. 「**パーティション属性の編集**」ダイアログ・ボックスで、「**OK**」をクリックします。

12. デフォルトでは、パーティションに追加したそれぞれのモジュールは、すべてのビューも含まれています。

特定のモジュールに、含めたくないビューがある場合には、以下の操作を行います。

- a. 画面の下部でリストから該当するモジュールを選択し、「**ビューの編集**」をクリックします。

- b. パーティションに含めたくないビューを解除します。  
「アクセス」列にはアウエイ・データベースでの最高のアクセス権限が表示されます。
  - c. 特定のビューについて、アウエイ・データベースでの最高のアクセス権限を変更したい場合には、ビューを選択して「**アクセス権限の編集**」をクリックします。
  - d. 目的のアクセス権限のボックスを選択し、「**OK**」をクリックします。
  - e. 「**パーティション・ビューの編集**」ダイアログ・ボックスで、「**OK**」をクリックします。
13. 「**パーティション定義の編集**」ウィンドウで、「**OK**」をクリックします。
- リンク・モジュールを選択した際に、選択したモジュールがそれらのリンクセットのソース・モジュールおよびターゲット・モジュールを持っていれば、「**リンクセットの選択**」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 「**リンクセットの選択**」ダイアログ・ボックスには、パーティションに含めることのできるすべてのリンクセットが表示されます。それぞれのリンクセットには、ソース・モジュール、ターゲット・モジュール、リンク・モジュールが表示されます。「**パーティション定義の編集**」画面で3つのモジュールすべてを選択した場合に、リンクセットが表示されます。
- 注意** アウエイ・データベース側でソース・オブジェクトやターゲット・オブジェクトに加えられた変更の結果、サスペクト・リンクが生じた場合でも、パーティションの同期や再結合により、その旨を示すマークが付加されることはありません。
14. 追加したいリンクセットのチェック・ボックスを選択し、「**OK**」をクリックします。

## パーティション定義の表示

パーティション定義を表示するには

1. データベース・エクスプローラーで、表示するパーティション定義を含むプロジェクトを選択し、右クリックして「**プロパティ**」を選択します。

2. 「パーティション定義」タブをクリックします。

プロジェクトのすべてのパーティション定義のリストが表示されます。

## パーティション定義の編集

パーティション定義を編集するには

1. ホーム・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、編集するパーティション定義を含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。

プロジェクトに対して、変更権限が必要です。

3. 「パーティション定義」タブをクリックします。
4. 編集したいパーティション定義を選択し、「編集」をクリックします。

「パーティション定義の編集」ウィンドウが表示されます。画面の下部にパーティションに含まれるすべてのモジュールが表示されます。

5. パーティション定義からモジュールを削除するには、モジュールを選択して、「削除」をクリックします。
6. パーティション定義にモジュールを追加するには、画面上部のエクスプローラーを使います。モジュールを上部右側の画面で選択し、「選択したモジュールの追加」をクリックします。

エクスプローラー画面では、Step 2 で選択したプロジェクトに含まれるモジュールのみを選択できます。他のプロジェクトのモジュールは追加できません。

**注意** パーティションに既に含まれているモジュールのアクセス権限を変更するには、モジュールを一度削除し、新しいアクセス権限を適用して再び追加します。パーティション定義に含まれているモジュールを上書きすると、モジュール自体のアクセス権限は更新されますが、モジュール内の属性へのアクセス権限は更新されません。

7. 「属性」列の値がモジュールの「すべての属性」の場合、該当するパーティションにはモジュールのすべての属性が含まれています。

特定のモジュールのパーティション定義に、どの属性を含めるかを制御するには

- a. 画面の下部でリストから該当するモジュールを選択し、「属性の編集」をクリックします。
- b. パーティションに含めたい属性を選択します。  
「アクセス」列にはアウエイ・データベースでの最高のアクセス権限が表示されます。
- c. 特定の属性について、アウエイ・データベースでの最高のアクセス権限を変更したい場合には、属性を選択して「アクセス権限の編集」をクリックします。
- d. 目的のアクセス権限のチェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。
- e. 「パーティション属性の編集」ダイアログ・ボックスで、「閉じる」をクリックします。

8. 「ビュー」列の値が「すべてのビュー」の場合、該当するパーティションにはモジュールのすべてのビューが含まれています。

特定のモジュールのパーティション定義に、どのビューを含めるかを制御するには

- a. 画面の下部でリストから該当するモジュールを選択し、「ビューの編集」をクリックします。
- b. パーティションに含めたいビューを選択します。  
「アクセス」列にはアウエイ・データベースでの最高のアクセス権限が表示されます。
- c. 特定のビューについて、アウエイ・データベースでの最高のアクセス権限を変更したい場合には、ビューを選択して「アクセス権限の編集」をクリックします。
- d. 目的のアクセス権限のボックスを選択し、「OK」をクリックします。
- e. 「パーティション・ビューの編集」ダイアログ・ボックスで、「OK」をクリックします。

9. 「パーティション定義の編集」ウィンドウで、「OK」をクリックします。

リンク・モジュールを選択した際に、選択したモジュールがそれらのリンクセットのソース・モジュールおよびターゲット・モジュールを持っている場合、「リンクセットの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。

「リンクセットの選択」ダイアログ・ボックスには、パーティションに含めることのできるすべてのリンクセットが表示されます。それぞれのリンクセットには、ソース・モジュール、ターゲット・モジュール、リンク・モジュールが表示されます。「パーティション定義の編集」画面で3つのモジュールすべてを選択した場合に、リンクセットが表示されます。

10. 追加したいリンクセットのチェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。

## パーティション定義の削除



パーティション定義を削除するには

1. ホーム・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、削除するパーティション定義を含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。  
プロジェクトに対して、削除権限が必要です。
3. 「パーティション定義」タブをクリックします。
4. 削除したいパーティション定義を選択し、「削除」をクリックします。
5. パーティション定義を削除してよいかどうかを確認するメッセージが表示されます。「確認」をクリックします。
6. プロジェクト・プロパティ・シートで、「OK」をクリックします。

## パーティションのエクスポート

パーティションを定義したプロジェクト、またはその配下のモジュールが開かれていると、パーティションをエクスポートすることはできません。

**注意** データベース・エクスプローラーの左ペインで、フォルダーまたはプロジェクトを選択している場合、

フォルダーまたはプロジェクトは開いた状態になっています。開かれているフォルダーのアイコン、または開かれているプロジェクトのアイコンが表示されています。また、選択している項目のすべての上位のフォルダーまたはプロジェクトも開いた状態です（アイコンは通常のアイコンのままです）。モジュールが開いている場合には、データベース・ツリー上でそのモジュールの上位のフォルダーやプロジェクトもまた開いた状態になります。

### パーティションをエクスポートするには

1. ホーム・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、エクスポートするパーティションを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。  
プロジェクトに対して、変更権限が必要です。
3. 「パーティション定義」タブをクリックします。
4. エクスポートしたいデータを記述したパーティション定義を選択し、「エクスポート」をクリックします。  
パーティションのすべてのモジュールに対して、管理者権限が必要です。
5. 「パーティション・ファイル名」ボックスに、データを書き込みたいパーティション・ファイルの名前を入力します。または、「参照」を使用してファイルを検索します。
6. 「パーティション名」ボックスにエクスポートするパーティションの名前を入力します。  
名前には、アウエイ・データベースでパーティションのフォルダー名として使用されます。
7. アウエイ・データベースのユーザーにコメントを送りたい場合には、「コメント」ボックスに入力します。
8. 「OK」をクリックします。

Rational DOORS では、パーティション定義の記述に従ってデータがコピーされ、パーティション・ファイルが作成されます。

アウェイ・データベース側で編集ができるモジュールに対しては、Rational DOORS はホーム・データベースの該当するモジュールをロックし、読み取り専用にします。パーティションに含まれるそれぞれのモジュールは、ホーム・データベースで読み取り専用、またはアウェイ・データベースで読み取り専用のいずれかの状態となります。両方のデータベースで同一のモジュールを編集することはできません。

9. アウェイ・データベースのユーザーに、パーティション・ファイルを送ります。アウェイ・データベースのユーザーは、パーティションをインポートできます。

## エクスポートされたパーティションの表示

エクスポートされたパーティションを表示するには

1. データベース・エクスプローラーで、表示するエクスポートされたパーティションを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。
2. 「エクスポートされたパーティション」タブをクリックします。

プロジェクトに対してエクスポートされたすべてのパーティションのリストが表示されます。

**注意** エクスポートしたパーティション中のモジュールのアクセス権限が、アウェイ・データベース側ですべて読み取り専用の場合、このリストにエクスポートしたパーティションは表示されません。ここに表示されるパーティションは、少なくとも1つ以上の読み取り専用ではないモジュールを含んでいます。

## インポートされたパーティションへのアクセス権限

パーティション定義が作成されると、そのパーティションの各モジュールにアクセス権限が割り当てられます。各モジュールに割り当てられるアクセス権限は、アウェイ・データベースのデータに対してすべてのユーザーが持っている最大限のアクセス権限です。

パーティションのインポート先プロジェクトにアクセス権限を設定することにより、アウェイ・データベースのユーザーおよびグループのアクセス権限をさらに制限できます。プロジェクトにインポートされたデータは、制限付きのアクセス権限をプロジェクトから継承します。このため、モジュールのパーティションにフル・アクセスが設定



されていても、その親のプロジェクトに対して読み取り専用権限しか持たないユーザーやグループは、パーティション・データに対してもやはり読み取り専用権限しか持ちません。

パーティションをインポートする前に、その親となるプロジェクトに対するユーザーやグループのアクセス権限が十分であることを確認してください。パーティションのインポート後に、既存ユーザーの既存属性に対するアクセス権限を引き上げることはできません。パーティションがインポートされる前に親プロジェクトに割り当てられた、プロジェクト固有のアクセス権限を持たないユーザーには、「**その他全員**」グループのアクセス権限が割り当てられます。

## パーティションのインポート

パーティションをインポートするには

1. アウエイ・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。

2. データベース・エクスプローラーの右ペインで、データをインポートするフォルダーまたはプロジェクトを選択します。

フォルダーまたはプロジェクトに対して、作成権限が必要です。

プロジェクトに所属していないフォルダー（上位にプロジェクトのないフォルダー）にはパーティションをインポートすることはできません。フォルダーのすぐ上位がプロジェクトである必要はありません。しかし、階層構造の中でフォルダーの上位のどこかにプロジェクトが存在していなければなりません。

3. 「ファイル」 > 「パーティションのインポート」をクリックします。

4. 「パーティション・ファイル名」ボックスに、インポートしたいデータを含むパーティション・ファイルの名前を入力します。または、「参照」を使用してファイルを検索します。

5. 「OK」をクリックします。

パーティションに関し、次の情報を示す画面が表示されます。

- パーティション・ファイルの名前
- パーティションの名前
- パーティションを作成したホーム・データベースのユーザーのコメント

- Step 2 で選択した、パーティションがインポートされる上位のプロジェクトまたはフォルダー

6. 「インポート」をクリックします。

Rational DOORS はターゲットのプロジェクトまたはフォルダーの下に、**パーティション・フォルダー**を作成します。パーティション・フォルダーの名前は、パーティションの名前と同じです。

Rational DOORS はすべてのパーティションのデータをパーティション・フォルダーの中にコピーします。ホーム・データベースの階層構造を再現するために、パーティション・フォルダーの中にフォルダーが作成される場合もあります。

**注意** トレーサビリティ・カラムを持つモジュールが含まれているパーティションを作成し、別のデータベースに復元すると、トレーサビリティ・カラムに情報が表示されなくなります。復元したプロジェクトでトレーサビリティ情報を表示するには、再びトレーサビリティ・カラムを追加する必要があります。

**注** パーティションにサブフォルダーがあり、そのサブフォルダーをアウェイ・データベースの別の場所に移動すると、パーティション定義を編集できなくなるほか、パーティションの再結合と復旧もできなくなります。

## インポートされたパーティションの表示

インポートされたパーティションを表示するには

1. データベース・エクスプローラーで、表示するインポートされたパーティションを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。
2. 「インポートされたパーティション」タブをクリックします。

現在プロジェクトにインポートされており、まだ戻されていないすべてのパーティションのリストが表示されます。

## インポートされたパーティションの詳細の表示

インポートされたパーティションの詳細を表示するには

1. データベース・エクスプローラーで、詳細を表示するパーティションを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。
2. 「インポートされたパーティション」タブをクリックします。
3. パーティションを選択し、「詳細」をクリックします。  
パーティションの詳細が表示されます。  
以下の表に、表示される詳細情報をリストします。

項目	説明
パーティション名	パーティションの名前。ローカル（アウエイ）データベースのパーティション・フォルダーと同じ名前。
説明	ホーム・データベースでパーティションを作成したユーザーによって追加された情報。
定義名	パーティション定義の名前。
エクスポート元 (Exported by)	ホーム・データベースでパーティション・ファイルを作成したユーザーのユーザー名。
エクスポート日付	ホーム・データベースでパーティション・ファイルが作成された日時。
インポート日付	アウエイ・データベースでパーティションがインポートされた日時。
同期日付	最後にパーティションの同期を取得した日時。これは、ローカル（アウエイ）データベースで、最後に同期ファイルが作成された日時になります。
同期元	ローカル（アウエイ）データベースで最後に同期ファイルを作成したユーザーのユーザー名。
タイプ	パーティションが読み取り専用かどうかを表示。

Rational DOORS が日付を処理する方法の詳細については、17 ページの『日付と時刻の記録方式』を参照してください。

4. 「閉じる」をクリックします。

## インポートされたパーティションにデータを追加

インポートされたパーティションの同期を取る、またはリターンする前に、パーティションにデータを追加できます。

フォーマル・モジュール、リンク・モジュールを追加できます。これらのモジュールは、パーティション・フォルダーに属している必要があります。パーティションにモジュールを追加すると、追加したモジュールはパーティションの他のモジュールと同じように、別のデータベースからインポートしたデータのように見えます。追加したモジュールは、追加した後にパーティションから削除することはできません。

**注意** 読み取り専用のインポートされたパーティションにはデータを追加できません。

ホーム・データベースのオリジナル・パーティションに含まれているリンク・モジュールに新しいリンクセットを追加した場合は、新しいリンクセットをパーティションにも追加する必要があります。このようにしないと、ホーム・データベースにリターンする際に、新しいリンクセットをパーティションに含められません。

新しいフォーマル・モジュールおよびリンク・モジュールを格納できるインポートしたパーティションには、子フォルダーおよび子プロジェクトも追加できます。新しいフォルダーおよびプロジェクトもパーティション・フォルダーに保存しなければなりません。子ディレクトリーの新しいモジュール間にリンクを作成する場合、この子ディレクトリーはフォルダーでなければなりません。子プロジェクトを作成し、パーティションを再結合すると、その子プロジェクトが保持しているモジュール間のリンクが失われます。これはソフトウェア上の制限であるため、アウェイ・データベースにインポートされたパーティションのプロジェクトにのみ影響します。

**インポートされたパーティションにデータを追加するには**

1. アウェイ・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、パーティションを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「インポートされたパーティション」タブをクリックします。
4. データを追加したいパーティションを選択し、「データの追加」をクリックします。

5. パーティションに追加したいモジュールを選択します。

画面の上部は、データベース・エクスプローラーに似た画面になっています。ここでパーティションに含めたいモジュールを右画面で選択します。そして、「**選択したモジュールの追加**」をクリックします。

選択したモジュールは、画面下部のボックス内に表示されます。ここには、パーティションに含まれるすべてのデータが表示されます。

エクスプローラー・パネル（画面上部）では、パーティション・フォルダーに含まれているモジュールだけが選択可能です。

その他のデータベースでの最大アクセス権限は、常に読み取り、修正、作成、および削除です。「**使用アクセス権限**」の各チェック・ボックスは使用できません。
6. デフォルトでは、パーティションに追加したそれぞれのモジュールには、すべての属性が含まれています。

特定のモジュールに、含めたくない属性がある場合には、以下の操作を行います。

  - a. 画面の下部でリストから該当するモジュールを選択し、「**属性の編集**」をクリックします。
  - b. パーティションに含めたくない属性を解除します。
7. デフォルトでは、パーティションには、選択したモジュールのすべてのビューが含まれています。

特定のモジュールに、含めたくないビューがある場合には、以下の操作を行います。

  - a. 画面の下部でリストから該当するモジュールを選択し、「**ビューの編集**」をクリックします。
  - b. パーティションに含めたくないビューを解除します。
  - c. 「**パーティション・ビューの編集**」ダイアログ・ボックスで、「**OK**」をクリックします。
8. 「**パーティションにデータを追加**」ダイアログ・ボックスで、「**OK**」をクリックします。

リンク・モジュールを追加していて、それらのリンクセットのソース・モジュールおよびターゲット・モジュールがパーティションに含まれていれば、「**リンクセットの選択**」ダイアログ・ボックスが表示されます。

「リンクセットの選択」ダイアログ・ボックスには、パーティションに追加することのできるすべてのリンクセットが表示されます。それぞれのリンクセットには、ソース・モジュール、ターゲット・モジュール、リンク・モジュールが表示されます。パーティション定義の編集画面で、3つのモジュールすべてを選択した場合に、リンクセットが表示されます。

9. 追加したいリンクセットのチェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。

## インポートされたパーティションの同期

アウエイ・データベース側で行った変更を、ホーム・データベース側に反映して、データを更新したい場合には、インポートされたパーティションの同期を行います。

同期の処理では、ホーム・データベースの読み取り専用のロックは解除されません。従って、アウエイ・データベースのユーザーが編集を続けている間は、ホーム・データベースのユーザーは依然としてデータに対して読み取りしかできません。

インポートされたパーティションを同期するには

1. アウエイ・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、パーティションを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「インポートされたパーティション」タブをクリックします。
4. 同期を取りたいパーティションを選択し、「同期化」をクリックします。

パーティションのすべてのモジュールに対して、管理者権限が必要です。

5. 「同期ファイル名」ボックスに、データを書き込みたい同期ファイルの名前を入力します。または、「参照」を使用してファイルを検索します。
6. ホーム・データベースのユーザーにコメントを送りたい場合には、「コメント」ボックスに入力します。
7. 「OK」をクリックします。

Rational DOORS は同期ファイルを作成し、データをその中にコピーします。



8. ホーム・データベースのユーザーに同期ファイルを送ります。ホーム・データベースのユーザーは同期ファイルを使って、データベースの同期を取ります。

## エクスポートされたパーティションの同期

エクスポートされたパーティションを同期することにより、アウェイ・データベースで行われた変更をホーム・データベースに反映できます。

同期の処理では、ホーム・データベースの読み取り専用のロックは解除されません。従って、読み取り専用のアクセス権限でエクスポートされたデータに対し、アウェイ・データベースのユーザーが編集を続けている間は、ホーム・データベースのユーザーは依然としてデータに対して読み取りしかできません。

パーティションを定義したプロジェクト、またはその配下のモジュールが開かれていると、エクスポートされたパーティションの同期を取ることとはできません。

**注意** データベース・エクスプローラーの左ペインで、フォルダーまたはプロジェクトを選択している場合、フォルダーまたはプロジェクトは開いた状態になっています。開かれているフォルダーのアイコン、または開かれているプロジェクトのアイコンが表示されています。また、選択している項目のすべての上位のフォルダーまたはプロジェクトも開いた状態です（アイコンは通常のアイコンのままです）。モジュールが開いている場合には、データベース・ツリー上でそのモジュールの上位のフォルダーやプロジェクトもまた開いた状態になります。

### エクスポートされたパーティションを同期するには

1. ホーム・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、同期を取るデータを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。

プロジェクトに対して、作成権限および変更権限が必要です。

3. 「**エクスポートされたパーティション**」タブをクリックします。
4. 同期を取りたいパーティションを選択し、「**同期化**」をクリックします。

パーティションのすべてのモジュールに対して、管理者権限が必要です。

5. 「**同期ファイル名**」ボックスに、同期ファイルの名前を入力します。または、「**参照**」を使用してファイルを検索します。
6. 「**OK**」をクリックします。

パーティションに関し、次の情報を示す画面が表示されます。

- 同期ファイル名
- パーティションの名前
- 同期ファイル作成時に、アウェイ・データベースのユーザーが作成したコメント

ボタン	実行すること
詳細	パーティションや同期ファイルの詳細情報を表示します。
レポート	すべてのモジュールを含むパーティションの詳細情報を表示する新しい画面を開きます。 <b>注意</b> 印刷する場合は、画面の情報を切り取り / 貼り付けでテキスト・エディターに貼り付け、印刷します。
同期化	アウェイ・データベースとホーム・データベースの同期を行います。

## インポートされたパーティションのリターン

インポートされたパーティションのモジュールへの編集が終了したら、ホーム・データベースにパーティションをリターンします。

パーティションに含まれているモジュールが開かれていると、リターンできません。

インポートされたパーティションをリターンするには



1. アウエイ・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、リターンするパーティションを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。
3. 「インポートされたパーティション」タブをクリックします。
4. リターンしたいパーティションを選択し、「リターン」をクリックします。

パーティションのすべてのモジュールに対して、管理者権限が必要です。

5. 「リターン・ファイル名」ボックスに、データを書き込みたいファイルの名前を入力します。または、「参照」を使用してファイルを検索します。
6. ホーム・データベースのユーザーにコメントを送りたい場合には、「コメント」ボックスに入力します。
7. アウエイ・データベースにデータを残すか、削除するかを「リターン後」ラジオ・ボタンを使用して指定します。
  - 「インポートされたデータの削除」をクリックすると、アウエイ・データベースからすべてのパーティション・データを削除およびパージします。
  - 「インポートされたデータを保持します」をクリックすると、アウエイ・データベースのすべてのパーティション・データはそのまま残されます。データは、他のデータベースからインポートされたということがわからなくなり、ユーザーは通常のデータと同じように編集を続けることができます。パーティションのアクセス権限はローカルに定義されたアクセス権限を制限しなくなります。

8. 「OK」をクリックします。

Rational DOORS はリターン・ファイルを作成し、更新されたデータをその中にコピーします。

9. リターン・ファイルをホーム・データベースのユーザーに送ります。ホーム・データベースのユーザーは、パーティションを再結合します。

## パーティションの再結合



再結合されたパーティションを同期することにより、アウエイ・データベースで行われた変更をホーム・データベースに反映できます。アウエイ・データベースで変更を加えたユーザーが、ホーム・データベース内にも存在しているとは限らないため、履歴レコードでは変更を加えたユーザーとして、パーティションの再結合を実行したホーム・データベース内のユーザーが記録されます。

パーティションを再結合すると、以下のシステム属性が自動的に作成されます。

- リモート作成者
- リモート作成日
- リモート最終変更者
- リモート最終変更日

エクスポートしたパーティションの再結合を実行すると、ホーム・データベースの読み取り専用ロックが解除されます。ホーム・データベースのユーザーは、再びデータを編集できるようになります。

パーティションを定義したプロジェクト、またはその配下のモジュールが開かれていると、パーティションを再結合することはできません。

**注意** データベース・エクスプローラーの左ペインで、フォルダーまたはプロジェクトを選択している場合、フォルダーまたはプロジェクトは開いた状態になっています。開かれているフォルダーのアイコン、または開かれているプロジェクトのアイコンが表示されています。また、選択している項目のすべての上位のフォルダーまたはプロジェクトも開いた状態です（アイコンは通常アイコンのままです）。モジュールが開いている場合には、データベース・ツリー上でそのモジュールの上位のフォルダーやプロジェクトもまた開いた状態になります。

### パーティションを再結合するには

1. ホーム・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。

2. データベース・エクスプローラーで、再結合するパーティションを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。

プロジェクトに対して、作成権限および変更権限が必要です。

3. 「エクスポートされたパーティション」タブをクリックします。
4. 再結合したいパーティションを選択し、「再結合」をクリックします。

パーティションのすべてのモジュールに対して、管理者権限が必要です。

5. 「リターン・ファイル名」ボックスに、リターン・ファイルの名前を入力します。または、「参照」を使用してファイルを検索します。

6. 「OK」をクリックします。

パーティションに関し、次の情報を示す画面が表示されます。

- リターン・ファイル名前
- パーティションの名前
- リターン・ファイル作成時に、アウエイ・データベースのユーザーが作成したコメント



ボタン	実行すること
詳細	パーティションやリターン・ファイルの詳細情報を表示します。
レポート	すべてのモジュールを含むパーティションの詳細情報を表示する新しい画面を開きます。 <b>注意</b> 印刷する場合は、画面の情報を切り取り / 貼り付けでテキスト・エディターに貼り付け、印刷します。
再結合	ホーム・データベースにパーティションを再結合します。 Rational DOORS はホーム・データベースのデータを更新し、パーティションのすべての読み取り専用のロックを解除します。

## パーティションのリカバリー

アウエイ・データベースでデータが損なわれたり、紛失したりして再結合できなくなったパーティションがホーム・データベースにある場合、元のデータをリカバリーできます。リカバリーでは、パーティションの読み取り専用のロックを解除するため、ホーム・データベースのユーザーはデータを編集できるようになります。

**注意** パーティションのリカバリーを行った場合、アウエイ・データベースで行われた変更は、ホーム・データベースに反映できなくなります。

パーティションを定義したプロジェクト、またはその配下のモジュールが開かれていると、パーティションをリカバリーすることはできません。

**注意** データベース・エクスプローラーの左ペインで、フォルダーまたはプロジェクトを選択している場合、フォルダーまたはプロジェクトは開いた状態になっています。開かれているフォルダーのアイコン、または開かれているプロジェクトのアイコンが表示されています。また、選択している項目のすべての上位のフォルダーまたはプロジェクトも開いた状態です（アイコンは通常アイコンのままです）。モジュールが開いている場合には、データベース・ツリー上でそのモジュールの上位のフォルダーやプロジェクトもまた開いた状態になります。

### パーティションのリカバリーを行うには

1. ホーム・データベースで、プロジェクト管理者、データベース管理者、またはパーティション・データ権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインします。
2. データベース・エクスプローラーで、リカバリーするパーティションを含むプロジェクトを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。  
プロジェクトに対して、変更権限が必要です。
3. 「エクスポートされたパーティション」タブをクリックします。
4. リカバリーしたいパーティションを選択し、「リカバリー」をクリックします。

パーティションのすべてのモジュールに対して、管理者権限が必要です。

パーティションを修復してよいかどうかを確認するメッセージが表示されます。

5. 「**確認**」をクリックします。



# 14

## Requirements Interchange Format

この章は、データベース管理者、プロジェクト管理者、およびパーティション・データを操作する権限を持つユーザーを対象としています。この章のトピックスは、次のとおりです。

- RIF
- RIF 定義の作成
- RIF 定義の編集
- RIF 定義の削除
- RIF パッケージのエクスポート
- RIF パッケージのインポート
- RIF パッケージのマージ
- RIF ロックのリカバリー

### RIF

Requirements Interchange Format (RIF) は、要件データベースおよび要件ツール間の要件情報のやり取りに使用できる標準化されたフォーマットです。

Rational DOORS データを別の Rational DOORS データベースまたは別の要求ツールに送信して編集することができます。データの編集後、そのデータを送信元の Rational DOORS データベースに返して、適宜、元のデータとマージすることができます。データの戻しと、データのマイグレーションは、2ステップのプロセスです。

すべての RIF 機能を使用可能にするには、Rational DOORS 9.2.0.1 以降の Database Server を使用し、最小クライアント・バージョンであるバージョン 9.2.0.1 を使用するように構成する必要があります。

2つの Rational DOORS クライアント間で、Rational DOORS のデータを転送する場合、両方のクライアントが同じバージョンでなければなりません。

RIF 機能の用途は、ユーザーが完了する必要があるタスクに応じて異なります。

- レビューまたは編集用にデータを送信する
- RIF ファイル内の Rational DOORS データの受信と編集

## レビューまたは編集用にデータを送信する

レビューまたは編集用にデータを送信する場合、以下のタスクを実行する必要があります。

- データのパッケージング
- データのエクスポート
- データのインポート
- データのマージ

## データのパッケージング

データ・パッケージングの最初の手順は、サード・パーティーに送信するデータを収めるモジュールの特定です。

モジュール全体を送信するか、モジュール内のデータのサブセットを送信できます。モジュール内のデータのサブセットのみを送信する場合、Rational DOORS ビューを使用して、送信するデータを指定します。

データのセットアップが完了したら、**RIF 定義**を作成する必要があります。

RIF 定義は以下の項目で構成されます。

- 1 つ以上のフォーマル・モジュール
- 各モジュールのデータのビュー
- データに適用するロック

サード・パーティーで編集するためのデータを送信する場合、ローカル・コピーをロックし、それを読み取り専用にする必要があります。

同様に、編集用ではなく、サード・パーティーで表示するためのデータを送信する場合、エクスポートしたコピーをロックする必要があります。

RIF 定義内のデータの各部分は、ローカル Rational DOORS データベースまたはエクスポートしたコピー内でロックされています。両方の場所で同一のデータを編集することはできません。

## データのエクスポート

RIF 定義は、**RIF パッケージ**としてエクスポートされます。これは、RIF 定義で指定されたデータを xml ファイルにコピーしたものです。



RIF パッケージには、同じ Rational DOORS プロジェクトのフォーマル・モジュールおよびリンク・モジュールのデータを含めることができます。ベースライン・データも含めることが可能です。

リンクが RIF パッケージに含まれるのは、リンクの両端とそのリンクモジュールが RIF パッケージに含まれる場合のみです。外部リンクは含まれません。

リンクセットのペアも RIF パッケージに含まれている必要があります。

レイアウト DXL は、読み取り専用テキストとして RIF パッケージに含まれます。

RIF パッケージ内のオブジェクトの絶対数は、サード・パーティーのデータベース内での数と異なる場合があります。

## データのインポート

サード・パーティーがデータを編集し、ファイルを返した後、そのファイルをローカル・データベースにインポートしてください。

xml ファイルをインポートすると、Rational DOORS は、ユーザーが最初に作成した RIF 定義に、このファイル内のデータが関連付けられていることを認識します。

## データのマージ

返されたデータを元のデータとマージします。ロックは、すべて削除されます。

## RIF ファイル内の Rational DOORS データの受信と編集

RIF データを受信し、Rational DOORS を使用してこれを編集する必要がある場合は、以下のタスクを実行する必要があります。

- データの受信およびインポート
- データのエクスポート

## データの受信およびインポート

xml ファイル内の RIF データを受信します。これはインポートする必要があります。

xml ファイルをインポートする場合、RIF 定義を作成する必要があります。これは、データを返す準備が整ったときに使用します。データを初めてインポートするときに、フォルダーが自動的に作成されま

す。次にインポートするときは、インポートした RIF データを収める新規フォルダーを作成する必要があります。

RIF データは、インポート後はモジュールとして表示されます。モジュール内の一部のデータが、編集可能であったり、読み取り専用であったりする場合もあります。

## データのエクスポート

レビューまたは編集が完了したら、インポートのために作成した RIF 定義を選択して、そのデータをエクスポートします。

**注意** 編集の一部としてオブジェクトを削除する場合、データをエクスポートしてからオブジェクトをパージしてください。

同様に、リンクについてもデータをエクスポートしてから削除するようにしてください。

編集ロックを返して、データにこれ以上の更新を行えないようにすることができます。

データは xml ファイルにエクスポートされます。これは元の Rational DOORS データベースに戻すことができます。

## RIF 定義の作成

RIF 定義は、1 つ以上のフォーマル・モジュール、各モジュール内のデータのビュー、およびデータに適用されるロックで構成されています。

### RIF 定義を作成するには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはデータのパーティション権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインし、プロジェクトに対するアクセス権を変更します。
2. データベース・エクスプローラーで、RIF 定義を作成するプロジェクトを選択し、「ファイル」>「プロパティ」の順にクリックします。
3. 「RIF 定義」タブをクリックします。
4. 「新規」をクリックします。  
「新規 RIF 定義」ウィンドウが表示されます。
5. 「RIF 定義名」ボックスに名前を入力します。

6. RIF 定義の情報を追加する場合は、「説明」ボックスに入力します。
7. 「OK」をクリックします。  
「RIF 定義の追加」ウィンドウが表示されます。
8. プロジェクトを開いて、RIF 定義に追加する最初のモジュールを選択します。
9. エクスポートするデータを収めるモジュールのバージョンを選択します。  
モジュールがベースライン化されている場合は、モジュールの現行バージョンまたはベースラインのうちの1ついずれかを選択できます。
10. ローカル・モジュールでロックするデータを選択します。

リスト項目	説明
すべてのデータをロック	<p>ローカル・データベースのモジュール内のすべてのデータがロックされます。</p> <p>リモート・データベースのユーザーは、このモジュールのすべてのデータを編集できます。</p> <p>リモート・データベースのあらゆる更新は、インポートしてローカル・モジュールとマージすることができます。</p> <p><b>注意</b> このオプションを選択すると、「ビューのデータを含む」フィールドが使用できなくなります。</p> <p>モジュールに機密情報が含まれる場合は、このオプションを使用しないでください。このようなモジュールが RIF 定義に含まれないようにすることはできません。</p> <p>このオプションを選択する場合、RIF 定義にレイアウト DXL を含めることはできません。</p>

リスト項目	説明
オブジェクトをロック	<p>ローカル・データベースのモジュール内の選択したデータがロックされます。</p> <p>リモート・データベースのユーザーは、指定されたオブジェクトの変更と新規オブジェクトの追加を行うことができます。</p> <p>リモート・データベース内の指定されたオブジェクトへの更新は、インポートしてローカル・モジュールとマージすることができます。</p> <p><b>注意</b> その他のオブジェクトへの更新は、ローカル・モジュールとマージされません。</p>
属性をロック	<p>ローカル・データベースのモジュール内の選択した属性がロックされます。</p> <p>リモート・データベースのユーザーは、指定された属性を変更できます。</p> <p>リモート・データベース内の指定された属性への更新は、インポートしてローカル・モジュールとマージすることができます。</p> <p><b>注意</b> その他の属性への更新は、ローカル・モジュールとマージされません。</p>
ロックがありません	<p>ローカル・データベースのモジュール内のデータはロックされていません。</p> <p>リモート・データベースのユーザーは、このモジュールのすべてのデータを編集できます。</p> <p>リモート・データベースのすべての更新をインポートしてローカル・モジュールとマージすることはできません。</p>

リスト項目	説明
ロックがありません。 エクスポートしたデータ は読み取り専用です。	ローカル・データベースのモジュール内のデータはロックされていません。 リモート・データベースのユーザーは、このモジュールのデータの表示のみ可能です。 リモート・データベース内のデータへの更新は、ローカル・モジュールとマージすることができません。

11. エクスポートするデータを表示するビューを選択します。  
モジュールの特定のビューのデータのみを含めるには、「**ビューのデータを含む**」を選択し、ドロップダウン・リストからビューを選択します。
12. 「**オブジェクトをロック**」または「**属性をロック**」を選択した場合、「**ロックをビューのオブジェクトに適用**」フィールドで別のビューを選択する必要があります。  
**注意** 「**属性をロック**」を選択した場合は、ラベルが「**ロックをビューの属性に適用**」に変わります。  
  
このビューは、エクスポートされたデータ内で編集可能にするオブジェクトまたは属性を表示します。
13. 「**モジュールの追加または更新**」をクリックして、モジュールをRIF 定義に追加します。  
RIF 定義が完成するまで、モジュールの追加を続けます。
14. 「**OK**」をクリックします。

## RIF 定義の編集

モジュールの追加や削除、またはユーザーが組み込んだデータとロックの変更により、RIF 定義の内容を変更できます。

**注意** RIF 定義が既にエクスポートされている場合、その定義に既に含まれているモジュールを変更したり、削除したりすることはできません。新規モジュールを追加するか、ベースライン化されたモジュールの場合は、異なるバージョンのベースラインを追加することのみ行えます。例えば、RIF 定義に、ベース

ライン化された現在のバージョンのモジュールが含まれている場合、そのモジュールのベースラインを選択し、それを定義に追加することができます。

### RIF 定義を編集するには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはデータのパーティション権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインし、プロジェクトに対するアクセス権を変更します。
2. データベース・エクスプローラーで、RIF 定義を変更するプロジェクトを選択し、「ファイル」>「プロパティ」の順にクリックします。
3. 「RIF 定義」タブをクリックします。
4. 編集する RIF 定義を選択し、「編集」をクリックします。  
「RIF 定義の編集」ウィンドウが開き、RIF 定義の現在の内容が表示されます。
5. プロジェクトを開いて、変更したい最初のモジュールを選択します。
6. モジュールを変更して、「モジュールの追加または更新」をクリックします。定義「RIF 定義内容」ペインに表示されたモジュールのプロパティが更新されます。  
すべての変更を行うまで、続けてモジュールを選択し変更できます。
7. RIF パッケージにモジュールを追加する場合は、182 ページの『RIF 定義の作成』の Step 8 から Step 13 を行ってください。
8. RIF 定義からモジュールを削除したい場合は、「RIF 定義内容」ペインで対象モジュールを選択し、「削除」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

## RIF 定義の削除

### RIF 定義を削除するには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはデータのパーティション権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインし、プロジェクトに対するアクセス権を変更します。

2. データベース・エクスプローラーで、RIF パッケージを変更するプロジェクトを選択し、「ファイル」>「プロパティ」の順にクリックします。
3. 「RIF 定義」タブをクリックします。
4. 削除する RIF 定義を選択し、「削除」をクリックします。
5. 「はい」をクリックします。

## RIF パッケージのエクスポート

RIF パッケージをエクスポートするには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはデータのパーティション権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインし、プロジェクトに対するアクセス権を変更します。
2. エクスポートする RIF 定義内のプロジェクトおよびモジュールが開いていないことを確認します。
3. データベース・エクスプローラーで、エクスポートする RIF 定義を含むプロジェクトを選択し、「ファイル」>「プロパティ」の順にクリックします。
4. 「RIF 定義」タブをクリックします。
5. 「エクスポート」をクリックします。

「RIF 定義のエクスポート (Export RIF Definition)」ウィンドウが表示されます。

6. 「RIF パッケージ・ファイル名」ボックス内のファイル名を使用するか、新しいファイル名を参照します。

RIF 定義名は、読み取り専用です。

7. 「OK」をクリックします。

RIF パッケージがエクスポートされます。

## RIF パッケージのインポート

RIF パッケージをインポートするには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはデータのパーティション権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインし、プロジェクトに対するアクセス権を変更します。

2. データベース・エクスプローラーで、RIF パッケージをインポートするプロジェクトまたはフォルダーを選択し、「ファイル」>「RIF パッケージのインポート」の順にクリックします。  
「RIF パッケージ・ファイルのインポート」ウィンドウが表示されます。
3. インポートする .xml ファイルを参照します。
4. 「OK」をクリックします。  
「RIF パッケージのインポート」ウィンドウが表示されます。
5. 「既存の RIF 定義の使用」チェックボックスを選択または選択解除します。  
このチェック・ボックスは、RIF パッケージがインポートされたのが今回が最初である場合で、それが Rational DOORS パッケージではない場合にのみ有効です。  
既存の RIF 定義を使用する場合は、そのチェック・ボックスを選択してください。「RIF 定義名」ボックスに定義が表示されます。ドロップダウン・リストから 1 つを選択します。  
新規 RIF 定義を入力する場合は、チェックボックスを選択解除し、「RIF 定義名」ボックスに名前を入力して、「RIF 定義の説明」ボックスに説明を入力します。
6. 「RIF インポート・パッケージの説明」ボックスに説明を入力します。
7. RIF パッケージのインポート先となるフォルダー名を入力します。  
既に存在するフォルダーの名前を入力することはできません。  
この RIF パッケージを以前にインポートしたことがない場合、このフィールドは読み取り専用になります。デフォルトで、RIF パッケージはプロジェクトのルート・フォルダーにインポートされます。
8. 「インポート」をクリックします。  
指定したフォルダーに RIF パッケージがインポートされ、これをマージする準備が整います。  
**注意** インポートが完了する前に、このフォルダーを開くと、インポートするデータが破損する可能性があります。

RIF パッケージをインポートしたユーザーのみ、RIF パッケージがインポートされたフォルダーにアクセスできます。ただし、そ



のフォルダーに対するアクセス権限が変更されていない場合に限ります。

## RIF パッケージのマージ

RIF パッケージのインポートを完了すると、そこに含まれるモジュールをローカル・データベース内のモジュールとマージすることができます。

マージを実行するには、RIF 定義を選択します。Rational DOORS システムにインポートされた RIF 定義をベースとする RIF パッケージがリストされます。マージする RIF パッケージを選択します。

### RIF パッケージをマージするには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはデータのパーティション権限を持っているカスタム・ユーザーとして Rational DOORS にログインし、プロジェクトに対するアクセス権を変更します。
2. データベース・エクスプローラーで、マージする RIF パッケージを含むプロジェクトを選択し、「ファイル」>「プロパティ」の順にクリックします。
3. 「RIF 定義」タブをクリックします。
4. マージする RIF パッケージがベースとしている RIF 定義を選択し、「インポート」をクリックします。

「RIF 定義インポート」ウィンドウが表示され、この RIF 定義をベースとしている RIF パッケージがリストされます。

マージが必要な RIF パッケージのみを表示するには、「マージが必要なインポートのみ表示」を選択します。

5. マージする RIF パッケージを選択します。

RIF パッケージの詳細を表示するには、「詳細」をクリックします。

「RIF インポートの詳細」ウィンドウが開き、RIF パッケージの詳細が表示されます。

6. 「マージ」をクリックします。

RIF パッケージがマージされます。

続けて RIF パッケージを選択し、マージできます。

7. 「閉じる」をクリックします。

## RIF ロックのリカバリー

ローカル・モジュール内のオブジェクトのロックをリカバリーすることが必要になる場合があります。

例えば、RIF パッケージの再送信が必要な場合、ローカル・モジュールのロックをリカバリーしてから、パッケージを再送信する必要があります。

**注意** モジュールのすべてのロックをリカバリーする場合、その後、リカバリーしたロックに関連付けられた RIF パッケージをマージすることはできません。

### ロックをリカバリーするには

1. プロジェクト管理者、データベース管理者、またはデータのパーティション権限を持っているカスタム・ユーザーとして **Rational DOORS** にログインし、プロジェクトに対するアクセス権を変更します。
2. データベース・エクスプローラーで、RIF パッケージのエクスポート元のプロジェクトを選択し、「ファイル」>「プロパティ」の順にクリックします。
3. 「RIF 定義」タブをクリックします。
4. RIF パッケージのエクスポート元の RIF 定義を選択し、「ロックのリカバリー」をクリックします。  
「ロックのリカバリー」ウィンドウが表示され、エクスポートしたパッケージが表示されます。
5. リカバリーする RIF パッケージ（複数可）を選択します。  
「すべて選択」または「すべてクリア」を選択することもできます。
6. 「ロックのリカバリー」をクリックします。  
メッセージが表示されます。
7. 「はい」をクリックします。  
ロックがリカバリーされます。
8. 「OK」をクリックします。

# 15

## Rational DOORS データベースの 整合性の管理

この章の内容は、次のセクションに分かれています。

- Rational DOORS データベースについて
- データベース整合性チェッカーの動作
- データベース整合性チェッカーの実行
- ログ・ファイル

### Rational DOORS データベースについて

Rational DOORS は、自身が稼動しているネットワークのベースとなる整合性を利用して、特定のデータベース操作を完了します。通常、Rational DOORS は、Rational DOORS クライアントおよびデータベース・サーバー間のアクセスに対する一時的な中断から復旧できます。ただし、障害発生時点で DOORS が特定の処理を行っていた場合、回復ができずにデータベースの整合性が失われる可能性があります。このような場合は、データベース整合性チェッカーを使用して問題を特定し、修復できます。

Rational DOORS データベースは、プロジェクト、フォルダー、およびモジュールの階層からなります。それらが階層内のどこに存在するかにより、各項目は親項目、子項目、またはその両方になります。たとえば、簡単なデータベースでは、単一のフォルダー（フォルダー B）を含むプロジェクト（プロジェクト A）を作成できます。

- プロジェクト A はフォルダー B の親である
- フォルダー B はプロジェクト A の子である

Rational DOORS データベース内の各項目は、Rational DOORS 内部では、項目およびその親や子（存在する場合）に関する情報を含むファイルとして表現されます。各項目は一意的な参照番号で識別されるため、Rational DOORS のフォルダー名およびモジュール名はデータベース内で一意である必要はありません。例えば、プロジェクト A は 00000001、フォルダー B は 00000002 などの参照番号が割り当てられます。

**注意** この参照番号は、DXL perm により戻される uniqueID です。

各項目には、その項目の親の参照番号のほか、その項目の下に存在するすべての子の参照番号が含まれます。上の例では、00000001（プロジェクト A）にはその子の参照番号 00000002（フォルダー B）が含まれます。また、00000002（フォルダー B）にはその親の参照番号 00000001（フォルダー A）が含まれます。

各親が各子へ参照を保持し、各子に対応する親への参照を保持している限りは、データベースの整合性は失われず、すべてのデータが Rational DOORS データベース・エクスプローラーに正常に表示されます。しかし、コンピューター・システムに障害が発生した場合、処理の途中でデータベースの操作が失敗し、データベースの整合性が失われることがあります。通常、このような問題の影響を受けた項目を削除、または表示しようとする、「項目は予期されたフォルダーに入っていません」で始まるエラー・メッセージが表示されます。

上の例のフォルダー B をフォルダー C に移動すると、ファイルは次のように変更されます。

- フォルダー B への参照が、元の親であるプロジェクト A から削除される  
フォルダー B は、プロジェクト A の子としては参照されなくなる。
- フォルダー B への参照が、その新しい親であるフォルダー C に追加される  
フォルダー C は、その新しい子であるフォルダー B へ参照されるようになる。
- プロジェクト A への参照がフォルダー B から削除され、フォルダー C への参照がフォルダー B に追加される

プロジェクト A は、フォルダー B の親としては参照されなくなる。フォルダー B は、その新しい親であるフォルダー C へ参照されるようになる。

この操作の間にコンピューター・システムで障害が発生すると、変更の一部がファイルに反映されない可能性があります。これにより Rational DOORS データベースの整合性に問題が生じる可能性があります。

このほか、以下の操作を実行している間にデータベース・サーバーとの通信が途絶えると、データベースの不整合を招く原因となります。

- 項目の削除
- プロジェクトからフォルダー、またはフォルダーからプロジェクトへの変換

## データベース整合性チェッカーの動作

データベース整合性チェッカーを実行すると次の内容がチェックされます。

- 親項目から子項目への参照に対応する子から親への参照があること。
- 2つの異なる親項目の子として参照される子項目が存在しないこと。
- データベース内の各項目が、別の項目の子として参照されていること。親から参照されていない項目（およびその下の子）は、Rational DOORS データベース・エクスプローラーに表示されません。このようなデータは「Lost and Found」フォルダーに復旧されます。
- データベース内の各プロジェクトは、プロジェクト・ビュー・リスト内にエントリーを持ちます。プロジェクト・ビュー・リストとは、データベース・エクスプローラーのプロジェクト・ビューを生成するとき、Rational DOORS が使用するリストです。


データベースの整合性検査が完了したら、ウィザードを使用してデータベース内の矛盾を修復し、復旧したデータを移動したり復元したりすることができます。

また、制限付きの不整合チェックを実行して、選択したフォルダーまたはプロジェクトの内容をチェックすることもできます。プロジェクトやフォルダーの不整合チェックでは、他の項目から参照されているデータはチェックできません。チェック可能なデータは次の通りです。

- 存在しないデータ
- 複数の親から参照されている項目
- プロジェクト・リストに含まれていないプロジェクト

## データベース整合性チェッカーの実行

整合性チェッカーを実行するには

1. 管理者ユーザーとして Rational DOORS にログインします。管理者以外の Rational DOORS ユーザーは整合性検査を使用できません。
2. データベース・エクスプローラーで、「データベース」をクリックするか、 またはプロジェクト、またはフォルダーをクリックし、「ファイル」>「整合性の検査」の順にクリックします。

データベース整合性検査ウィザードが表示されます。

**注意** クライアントが接続している Rational DOORS データベース・サーバーのバージョンが 7.0 SP1 以前である場合は、エラー・メッセージが表示され、データベース整合性チェッカーを実行できません。

チェックする項目へのパスが「**フォルダー**」ボックスに表示されます。データベースを選択している場合は、「/」が表示されます。チェックする項目を変更するには、「**参照**」をクリックしてチェックしたいプロジェクトまたはフォルダーを参照します。

デフォルトでは、データベース内で参照されていない項目は「**Lost and Found**」フォルダーに復旧されます。整合性チェッカーにより復旧され、「**Lost and Found**」フォルダーに格納されるまで、これらの項目は Rational DOORS データベース・エクスプローラーに表示されません。「**Lost and Found**」フォルダーが存在しない場合は整合性チェッカーにより作成されます。別のフォルダーにデータを復旧するには、「**参照**」をクリックして復旧に使用するプロジェクトまたはフォルダーを参照します。

整合性検査の結果はログ・ファイルに記録できます。次の情報がファイルに記録されます。

- 項目ごとのチェックの開始時間と終了時間
- 検出された問題の全リスト
- ウィザードにより修正されたデータのログ

ログ・ファイルを作成するには、「**結果をファイルにログ記録**」チェック・ボックスを選択し、ログ・ファイルへのパスおよびログ・ファイル名を入力します（例：c:\integrity check\log.txt）。以降の整合性検査では、新しいログ・ファイルを指定しない限りこのファイルが上書きされます。

整合性チェッカーにより検出されたデータベース整合性の問題を修復したい場合は、「**完了時に修復処置のプロンプトを表示**」チェック・ボックスを選択したままにしておきます。

「**完了時に修復処置のプロンプトを表示**」チェック・ボックスを解除すると「**完了**」ボタンが押せる状態になり、「**次へ**」ボタンが選択できなくなります。「**完了**」ボタンをクリックすると、データベース内で参照されていないデータが「**Lost and Found**」フォルダーに復旧され、ログ・ファイルを作成している場合は整合性チェッカーの結果がログ・ファイルに記録されます。

**注意** プロジェクトまたはフォルダーの内容のみをチェックする場合、整合性チェッカーはどの親からも参照されていない項目をチェックすることができません。このため、「**完了時に修復処置のプロンプトを表示**」チェック・ボックスを解除する場合は「**結果をファイルにログ記録**」チェック・ボックスを選択する必要があります。

### 3. 「次へ」または「完了」をクリックします。

データのチェック時には進行状況表示バーが表示されます。フォルダーまたはプロジェクトをチェックしている場合は進行状況表示バーが1つ表示されます。データベース全体をチェックしている場合は3つの進行状況表示バーが並べて表示されます。

「**完了時に修復処置のプロンプトを表示**」チェック・ボックスの選択を解除していると、整合性検査の完了時に「**データベース検証が完了しました。**」というメッセージが表示されます。

選択を解除していない場合は、データベース整合性検査ウィザードの最初の操作画面が表示されます。「完了」ボタンはウィザードの最後の操作画面に達するまでクリックできません。

親から参照されているのにデータベース内に存在しない項目のリストが、表示されています。

ボタン	実行すること
参照の削除	子項目への参照を親から削除します。この項目はウィザードのリストから削除されます。
フォルダーの作成	親から参照され、親と同じ名前を持ち、一意な参照番号が付与された空のフォルダーを作成します。この項目はウィザードのリストから削除されます。 <b>注意</b> 存在しないプロジェクトを項目が参照している場合は、「フォルダーの作成」ボタンは「プロジェクトの作成」ボタンに変わります。 項目がモジュールの場合は、ボタンは使用できません。
閉じる	データベース整合性検査ウィザードを閉じてモジュールに戻ります。

このリストの項目を変更しない場合は、それらの項目の参照が更新されず、このデータベースにおける以降の整合性検査で項目が表示されます。

フォルダーまたはプロジェクトのみをチェックする場合は Step 5 に進みます。Step 4 で説明されている画面は表示されません。

#### 4. 「次へ」をクリックします。

データベース全体をチェックする場合は、次の図のように、どの親からも参照されていない項目のリストが表示されます。

これらの項目は以前はデータベースに表示されていなかったものであり、項目の参照を更新するまでは Step 2 で指定した「Lost and Found」フォルダーに移動されます。

「項目」列には、参照されていない項目の名前または一意の参照番号が表示されます。「参照場所」の列には、項目が親として参照しているフォルダーまたはプロジェクトの名前が表示されます。

データベース内の各項目は、項目に関する情報、その項目の親と子に関する情報、および一意な参照番号を持ちます。プロジェクトおよびフォルダーに関する情報を持つファイルには、プロジェクト名やフォルダー名は含まれていません。プロジェクト名とフォルダー名は、項目の親およびプロジェクト・ビュー・リストに保存されています。この画面に表示されるフォルダーは、親から参照されていないため、名前や説明を持ちません。この画面に表示されるプロジェクトが名前や説明を持つのは、プロジェクト・ビュー・リストに含まれる場合のみです。整合性チェッカーがその名前と説明を検出できない項目には、接頭語「フォルダー」または「プロジェクト」に一意な参照番号を付加した名前が付けられます（例：フォルダー 00000003）。項目が復元され、データベース整合性検査ウィザードを閉じたら、データベース・エクスプローラーでその項目を探し、名前を変更することができます。

次の表に、修復された項目に対して選択できるオプションを説明します。

ボタン	実行すること
削除	項目を削除します（赤色の D アイコン）。項目が削除されたのちにウィザードで実行できるオプションは「ページ」のみです。



ボタン	実行すること
ページ	項目をデータベースからページします。この項目はウィザードのリストから削除されます。
移動	ミニエクスプローラーを開きます。項目をどのフォルダーまたはプロジェクトに復元するのかを指定し、「OK」をクリックします。選択した項目は新しい場所に移動し、ウィザードのリストから削除されます。
復元	項目を、その項目が参照している親に復元します。親とは、「参照場所」列にパスが表示されているフォルダーまたはプロジェクトです。この項目はウィザードのリストから削除されます。 「参照場所」のパスに「(データが見つかりません)」と表示される場合は、そのプロジェクトまたはフォルダーがデータベース内に存在していません。このような項目は前の画面にリストされます。この場所に復元すると、Step 3 に詳述されているように存在しないフォルダーまたはプロジェクトが作成され、その中に項目が復元されます。
表示	読み取り専用モードでモジュールを開きます。またはプロジェクトやフォルダーをミニエクスプローラーに表示します。 エクスプローラーを使用し、フォルダーやプロジェクトの内容を表示できます。
閉じる	データベース整合性検査ウィザードを閉じてモジュールに戻ります。

復元、移動、削除、またはページのいずれも実行されない項目は、すべて「Lost and Found」フォルダーに保存されます。このデータベースで以降に行われる整合性検査ではこれらの項目が表示されません。

5. 「次へ」をクリックします。

「競合する親参照を持つ項目」画面が表示されます。

親項目から子項目への各参照には、対応する子から親への参照が存在する必要があります。子項目は、異なる2つの親から参照されていたり、本来の親とは異なる項目を親として参照していることがあり、このような場合はデータベースに不整合が生じます。

下部ペインの項目名のいずれかに「(親として参照されています)」と表記される場合、上部ペインの子項目が表記の項目を親として参照していることを意味します。

参照を更新する前に項目の内容を確認したい場合は、その項目を選択して「表示」をクリックします。モジュールが選択されている場合はそのモジュールが読み取り専用モードで開きます。フォルダーまたはプロジェクトが選択されている場合は、それらがミニエクスプローラーに表示されます。エクスプローラーを使用し、フォルダーやプロジェクトの内容を表示できます。

下部ペインで、子の参照先にする親項目を選択し、「選択」をクリックします。参照が更新され、項目がウィザードのリストから削除されます。

このリストの項目を変更しない場合は、それらの項目の参照が更新されず、このデータベースにおける以降の整合性検査で項目が表示されます。

#### 6. 「次へ」をクリックします。

データベース整合性検査ウィザードの最後のステップが表示されます。

プロジェクト・ビュー・リストは、Rational DOORS データベース・エクスプローラーのプロジェクト・ビューを生成する際に Rational DOORS が使用するリストです。プロジェクト・ビュー・リストには、データベース内の各プロジェクトへの参照が含まれています。プロジェクト・ビュー・リスト内で参照されていないプロジェクトは、プロジェクト・ビュー・リストを選択してもデータベース・エクスプローラーに表示されません。

プロジェクト・ビュー・リスト内で参照されていないプロジェクトが検出されると、そのプロジェクトはここに表示されます。次

の表に、リスト中の項目に対して選択できるオプションを説明します。

ボタン	実行すること
表示	プロジェクトの内容を表示します。 ミニエクスプローラーが開き、データベース内の現在の場所にプロジェクトが表示されます。エクスプローラーを使用し、プロジェクトの内容を表示できます。
フォルダーへの変換	プロジェクトをフォルダーに変換します。 プロジェクトへの参照がプロジェクト・ビュー・リストから削除され、項目がウィザードのリストから削除されます。
エントリーの追加	プロジェクト・ビュー・リストにプロジェクトへの参照を追加します。プロジェクト・ビューの選択時にデータベース・エクスプローラーにプロジェクトが表示されるようになります。 プロジェクト名はデータベース内で一意でなければなりません。同じ名前の別のプロジェクトがすでにプロジェクト・リストに含まれている場合はプロジェクト名に番号が付加され、新しいプロジェクト名が付けられた旨のメッセージが表示されます。
閉じる	データベース整合性検査ウィザードを閉じてモジュールに戻ります。

このリストの項目を変更しない場合は、それらの項目の参照が更新されず、このデータベースにおける以降の整合性検査で項目が表示されます。

7. 「完了」をクリックします。

データベース整合性検査ウィザードが閉じます。

## ログ・ファイル

データベース整合性チェッカーを実行する際にログ・ファイルを作成できます。整合性検査の結果はこのファイルに記録されます。

ログ・ファイルは、データベース整合性検査ウィザードを実行する際に指定のディレクトリーに作成されます。ログ・ファイルには3つのセクションがあります。

- 1番目のセクションにはチェックされた全項目のリストが記述されます。

チェック後の各項目は、チェックされた日時とともにリストされます。整合性の問題を持つ項目には\*\*\*のマークが付き、問題の概説が記述されます。

- 2番目のセクションには検出された各問題の概要が記述され、各項目に存在する親参照および子参照の詳細が提供されます。
- 最後のセクションには、データベース整合性検査ウィザードによりデータベースに施された修正の詳細が記述されます。失敗した修復には\*\*\*のマークが付きます。

# 16

## トラブルシューティング

この章では、Rational DOORS のトラブルシューティングについて説明します。

- Solaris 9 で FLEXnet License Manager (lmgrd) を起動できない場合
- 復元したデータ・ディレクトリーがロックされている場合
- 電子メール通知が届かない場合
- Rational DOORS に Word 文書をインポートできない場合

**注意** Rational DOORS の既知の問題についての最新情報とその対策については、web サイトのサポートページ <http://www.ibm.com/software/awdtools/doors/support/doc.html> を参照してください。

### Solaris 9 で FLEXnet License Manager (lmgrd) を起動できない場合

Solaris 9 で FLEXnet License Manager を起動しようとする時、

```
Vendor daemon can't talk to lmgrd (Cannot read data from license server (-16,287:22 "Invalid argument"))
```

とメッセージが表示される場合があります。この場合は、次のコマンドを実行します。

```
ulimit -H -n 1024
```

lmgrd を実行する前に、このコマンドを実行してください。

### 復元したデータ・ディレクトリーがロックされている場合

データ・ディレクトリーのバックアップを Rational DOORS データベース・サーバーの動作中に実行すると、データ・ディレクトリーはサーバー・データのロックが解除されない状態でコピーされます。したがって、このコピーから復元したデータベースにアクセスするには、ロックの解除が必要になります。ロックを解除するには、データ・ディレクトリーから `servdata.dtc` ファイルを削除します。

### 電子メール通知が届かない場合

Rational DOORS が電子メール通知を送信するように設定されているにも関わらず、電子メール通知が届かない場合は、ウイルス対策ソフト

トウェアやファイアウォール・ソフトウェアによって、Rational DOORS 実行可能ファイルの動作がブロックされている可能性があります。Rational DOORS は電子メールの送信に 25 番ポートを使用します。ウィルス対策ソフトウェアやファイアウォール・ソフトウェアを調べ、アクセスがブロックされているようであれば、アクセスを許可するように設定を変更してください。McAfee VirusScan Enterprise v8.0 の場合は、次の手順に従います。

1. 「ウィルス対策コンソール」を開きます。
2. 「アクセス保護」を右クリックをして、「プロパティ」を選択します。
3. 「ポートのブロック」タブで、「大量メール・ワームの送信を禁止」ルールを選択します。
4. 「<編集 ...>」をクリックします。
5. `doors.exe` を「対象外の処理」リストに追加します。

## Rational DOORS に Word 文書をインポートできない場合

ローカル・マシンの管理者権限を持たない標準ユーザーが Microsoft Word から Rational DOORS に文書ファイルのエクスポートを試みると、Rational DOORS と通信できない旨を通知するエラー・メッセージ (**Unable to communicate to Rational DOORS**) が表示されます。

通常、Word 文書を最初に Rational DOORS にエクスポートする際には、**COM** または **DCOM** コンポーネントを含む **Rational DOORS.Application** オブジェクトのエントリーが、レジストリ内に作成されます。最初にエクスポートを試みたユーザーが、ローカル・コンピュータの管理者権限を持たないと、このエントリーが作成されないため、エクスポートが失敗します。

このコンポーネントを正しく登録するには、ローカル・マシンに管理者としてログインして、Word 文書を Rational DOORS にエクスポートしてください。これにより、必要なコンポーネントがレジストリに登録されるため、それ以降は管理者権限を持たないユーザーでも、Word 文書を Rational DOORS にエクスポートできるようになります。

# 17

## サポートへのお問い合わせ

この章では次の内容について説明します。

- IBM Rational Software Support へのお問い合わせ
- 前提条件
- 問題の処理依頼
- その他の情報

### IBM Rational Software Support へのお問い合わせ

セルフ・ヘルプ・リソースで問題を解決できない場合、IBM Rational ソフトウェア・サポートにお問い合わせ頂き、製品の問題解決の支援を依頼してください。

**注意** 従来からの Telelogic のお客様の場合、

<http://support.telelogic.com/toolbar> に移動して、IBM Rational Telelogic ソフトウェア・サポートのブラウザー・ツールバーをダウンロードできます。このツールバーを使用すると、IBM Rational Telelogic 製品オンライン・リソースに簡単に移行できます。また、すべての IBM Rational Telelogic サポート・リソースが、単一の参照サイト <http://www.ibm.com/software/rational/support/telelogic/> で提供されます。

### 前提条件

お客様の問題を IBM Rational ソフトウェア・サポートに処理依頼するには、アクティブなパスポート・アドバンテージ® ソフトウェア保守契約が必要です。パスポート・アドバンテージは、IBM の総合的なソフトウェア・ライセンスおよびソフトウェア保守 (製品アップグレードおよびテクニカル・サポート) 製品です。パスポート・アドバンテージには、<http://www.ibm.com/software/lotus/passportadvantage/howtoenroll.html> からオンラインで登録できます。

- パスポート・アドバンテージの詳細については、[http://www.ibm.com/software/lotus/passportadvantage/brochures\\_faqs\\_quickguides.html](http://www.ibm.com/software/lotus/passportadvantage/brochures_faqs_quickguides.html) でパスポート・アドバンテージの FAQ を参照してください。

- さらに支援が必要な場合は、お客様の IBM 担当員にお問い合わせください。

お客様の問題を (IBM Web サイトから) オンラインで IBM Rational ソフトウェア・サポートに処理依頼するには、さらに以下が必要です。

- IBM Rational ソフトウェア・サポート Web サイトで登録済みユーザーとなること。登録の詳細については、<http://www-01.ibm.com/software/support/> を参照してください。
- サービス要求ツールで、許可された呼び出し元としてリストに記載されていること。

## 問題の処理依頼

お客様の問題を IBM Rational ソフトウェア・サポートに処理依頼するには

1. 問題のビジネス上の影響を判断します。問題を IBM に報告する際に、重大度レベルを指定するよう求められます。したがって、報告する問題のビジネス上の影響を理解し、評価する必要があります。

以下の表を使用して、重大度レベルを決定してください。

重大度	説明
1	この問題には、 <i>致命的な</i> ビジネス上の影響があります。プログラムを使用できないため、運用に致命的な影響が発生します。この状態は、即時の解決策が必要です。
2	この問題には、 <i>重大な</i> ビジネス上の影響があります。プログラムは使用できますが、厳しく制約されます。
3	この問題には、 <i>若干の</i> ビジネス上の影響があります。プログラムは使用できますが、(運用上不可欠ではない) 重要度の低い機能が使用できません。
4	この問題には、 <i>最小限度の</i> ビジネス上の影響があります。運用にほとんど影響が発生しないか、または問題に対して合理的な回避策が実装されています。



2. 問題を説明し、バックグラウンド情報を収集します。IBM に対して問題を説明する際には、できるだけ具体的に説明してください。すべての関連したバックグラウンド情報を提示して、IBM Rational ソフトウェア・サポートのスペシャリストが効率的に問題解決を支援できるようにしてください。時間の節約のために、以下の質問に回答を準備してください。
  - 問題の発生時には、どのソフトウェアのバージョンを実行していましたか。  
正確な製品名とバージョンを判断するために、お客様に該当するオプションを使用してください。
  - IBM Installation Manager を開始し、「ファイル」> 「インストールされたパッケージを表示」とクリックします。パッケージ・グループを展開し、パッケージを選択してパッケージ名とバージョン番号を確認します。
  - お客様の製品を始動し、「ヘルプ」> 「製品情報」の順にクリックして、製品名とバージョン番号を確認します。
  - オペレーティング・システムおよびバージョン番号は何ですか(すべての Service Pack またはパッチを含む)。
  - 問題の症状に関連するログ、トレース、およびメッセージは存在しますか。
  - 問題を再現できますか。その場合、どのような手順で問題を再現できますか。
  - システムに何らかの変更を行いましたか。例えば、ハードウェア、オペレーティング・システム、ネットワークング・ソフトウェア、または他のシステム・コンポーネントに何らかの変更を行いましたか。
  - 現在、問題の回避策を何か実行していますか。その場合、問題を報告する際に、回避策の説明を準備してください。
3. お客様の問題を、IBM Rational ソフトウェア・サポートに処理依頼します。IBM Rational ソフトウェア・サポートへの問題の処理依頼は、以下の方法で行うことができます。
  - **オンライン** :IBM Rational ソフトウェア・サポートの Web サイト (<https://www.ibm.com/software/rational/support/>) に移動し、Rational サポート・タスク・ナビゲーターで、「サービス要求のオープン」をクリックします。電子問題報告ツールを選択して「問題管理レコード (PMR)」を開き、お客様独自の表現で問題を正確に説明してください。

サービス要求のオープンの詳細については、  
<http://www.ibm.com/software/support/help.html> を参照してください。

また、IBM Support Assistant を使用してオンラインでサービス要求を開くこともできます。詳細については、  
<http://www-01.ibm.com/software/support/isa/faq.html> を参照してください。

- **電話** : お客様の国または地域の電話番号については、  
<http://www.ibm.com/planetwide/> の IBM ディレクトリーで世界全体の連絡先を参照し、お客様の国または地域の名前をクリックしてください。
- **お客様の IBM 担当員を通して** : オンラインまたは電話で IBM Rational ソフトウェア・サポートにアクセスできない場合、IBM 担当員にお問い合わせください。必要な場合には、お客様のために、IBM 担当員がサービス要求をオープンすることができます。各国の完全な窓口情報については、  
<http://www.ibm.com/planetwide/> を参照してください。

処理依頼した問題が、ソフトウェアの欠陥または欠落、または文書の不備による場合には、IBM Rational ソフトウェア・サポートは、プログラム診断依頼書 (APAR) を作成します。APAR には、問題を詳細に記載します。可能な場合には、IBM Rational ソフトウェア・サポートは、APAR が解決され、修正が配信されるまで、お客様が実装可能な回避策を提供します。IBM は、解決された APAR を IBM Rational ソフトウェア・サポートの Web サイトに毎日公開しており、同じ問題が発生している他のユーザーが、同じ解決方法を利用できます。

## その他の情報

Rational ソフトウェア製品ニュース、イベント、およびその他の情報については、IBM Rational Software の Web サイト  
<http://www.ibm.com/software/rational/> を参照してください。

© Copyright IBM Corporation 1993, 2010

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒 242-8502

神奈川県大和市下鶴間 1623 番 14 号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

Intellectual Property Dept. for Rational Software  
IBM Corporation  
1 Rogers Street  
Cambridge, Massachusetts 02142  
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

追加の特記事項が、ご使用のソフトウェア・インストール済み環境に含まれている [legal\\_information.html](#) ファイルに記載されています。

## 商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](#) は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、[www.ibm.com/legal/copytrade.html](http://www.ibm.com/legal/copytrade.html) をご覧ください。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

## テキスト・プルーフ・システム著作権

International Proofreader™ English (US and UK) text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ French text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ German text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Afrikaans text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Catalan text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Czech text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Danish text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Dutch text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Finnish text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Greek text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Italian text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Norwegian, text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Portuguese, text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Russian, text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Spanish, text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

International Proofreader™ Swedish, text proofing system © 2003 by Vantage Technology Holdings, Inc. All rights reserved. 内部に組み込まれているアルゴリズムまたはデータベースの複製、分解を禁じます。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

# 索引

## 記号

- .dma 拡張子, 88
- .dpa 拡張子, 88
- .dua 拡張子, 88
- .par 拡張子, 156

## あ

- アーカイブ
  - 概要, 88
  - サーバー・アーカイブの有効化, 88
  - モジュールとプロジェクト, 90
  - ユーザー情報, 97
- アウエイ・データベース, 153
- アクセス権
  - データベース・ルートの変更, 70
  - プロジェクト, 82
- アクセス制御
  - グループ, 45
  - 電子署名, 105
  - ベースライン・セット定義, 119

## い

- インクリメンタル開発, 107
- インテリジェント・トレーサ
  - ビリティー
  - 定義, 108
  - ベースライン・セット, 109
- インポートされたパーティションのリターン, 172

## か

- 概要
  - 日付およびタイムスタンプ, 17

- 拡張子
  - .dma, 88
  - .dpa, 88
  - .dua, 88
  - .par, 156
- カスタム・ユーザー, 8
- 管理者ユーザー, 8

## く

- クライアント接続の制限, 5
- クライアントと電子メール, 68
- グループ
  - アクセス制御, 45
  - 計画, 9
  - 削除, 46
  - 作成, 42
  - 編集, 43
  - 無効化と有効化, 48
  - 命名規則, 9
  - 情報の表示, 42

## け

- 計画
  - グループ, 9
  - データの構成方法, 3

## こ

- コマンド・ライン
  - パスワード・スイッチを使用できます, 28, 64

## さ

- サーバー
  - UNIX 上での起動, 139
  - Windows 上での起動, 137
- サーバー・アーカイブ, 88
- 削除
  - グループ, 46
  - チェンジ・プロポーザル・システム, 134

チェンジ・プロポーザル・  
ユーザー, 133  
プロジェクト, 85  
ベースライン・セット定義, 125  
ユーザー, 39  
作成  
グループ, 42  
チェンジ・プロポーザル・  
システム, 127  
パーティション定義, 156  
プロジェクト, 75  
ベースライン・セット, 120  
ベースライン・セット定義, 116  
ユーザー, 24

## し

辞書, 65  
システム・ユーザー名  
概要, 11  
フローチャート, 13

## せ

セッションのタイムアウト, 63  
設定  
電子署名, 104  
電子メール, 68  
パスワードの制御, 62  
レビュー用モジュール, 128  
Rational Directory Server, 50  
接続の制限, 5

## ち

チェンジ・プロポーザル・システム  
削除, 134  
作成, 127  
チェンジ・プロポーザル・ユーザー  
削除, 133  
追加, 131  
ロールの編集, 132

チェンジ・プロポーザル・システム  
レビューのためにモジュールを  
構成する, 128  
チェンジ・プロポーザル・ユーザー  
表示, 130  
チェンジ・プロポーザル・ユーザー  
の表示, 130

## つ

追加  
インポートされたパーティ  
ションへのデータ, 168  
チェンジ・プロポーザル・  
ユーザー, 131  
追加認証, 58

## て

ディスカッション  
許可と不許可, 72  
ディスクのバックアップ, 87  
データベース整合性チェッカー  
概要, 193  
実行, 193  
ログ・ファイル, 199  
データベース・サーバー  
パスワードを忘れてしまった  
場合, 135  
UNIX 上での起動, 139  
UNIX 上でのパスワードの  
変更, 136  
Windows 上での起動, 137  
Windows 上でのパスワードの  
変更, 136  
データベース・サーバーの起動  
UNIX, 139  
Windows, 137



データベース  
  アウエイ・データベース, 153  
  パーティション, 153  
  復元, 99  
  プロパティを表示, 53  
  変更  
    アクセス権, 70  
    データベース名, 56  
    デフォルトの表示設定, 57  
    ログイン・ポリシー, 57  
  ホーム・データベース, 153  
データベース管理者, 7  
デフォルト表示設定の概要, 20  
電子署名  
  アクセス制御, 105  
  使用, 102  
  設定, 104  
  説明, 101  
  含まれる情報, 102  
  ラベル指定子タイプ, 104  
電子メール, 68

## と

同期  
  インポートされたパーティ  
    ション, 170  
  エクスポートされたパーティ  
    ション, 171  
  概要, 155  
同期ファイル, 155, 156  
閉じる  
  ベースライン・セット, 123  
トラブルシューティング  
  電子メール通知, 201  
  ロックされたデータ・ディレク  
    トリー, 201  
FLEXnet License Manager  
  (Solaris 9), 201  
Word からのインポート, 202

## は

パーティション  
  インポート, 165  
  インポートされたパーティ  
    ションのリターン, 172  
  インポートされたパーティシ  
    ョンへのデータの追加, 168  
  エクスポート, 163  
  再結合, 174  
  同期  
    インポートされたパーティ  
      ション, 170  
    エクスポートされたパーティ  
      ション, 171  
  表示  
    エクスポートされたパーティ  
      ション, 164  
    リカバリー, 176  
パーティション定義  
  概要, 154  
  削除, 162  
  作成, 156  
  どのビューを含めるかの制御,  
    161  
  どの属性を含めるかの制御, 161  
  編集, 160  
パーティションのインポート, 165  
パーティションの再結合, 174  
パーティションのリカバリー, 176  
パーティション・  
  ファイル, 154, 156  
パスワード  
  最小パスワード長, 60  
  最大  
    セッションごとの  
      試行, 15, 60  
    ユーザー名ごとの  
      試行, 16, 61

- セッションのタイムアウト, 63
- 長さの設定, 11
- パスワードを制御する, 62
- ユーザーが使用できるパスワードのタイプを制限, 64
- ユーザーにパスワードを使用させます, 58
- バックアップ, 87
- パーティション
  - 概要, 153
  - 表示
    - インポートされたパーティション, 166
    - インポートされたパーティションの詳細, 166
- パーティション定義
  - 表示, 159

## ひ

- 表示
  - インポートされたパーティション, 166
  - インポートされたパーティションの詳細, 166
  - エクスポートされたパーティション, 164
  - グループの情報, 42
  - チェンジ・プロポーザル・ユーザー, 130
  - データベース・プロパティ, 53
  - ベースライン・セット定義, 119
  - ユーザー情報, 23
- 表示設定
  - 概要, 20
  - 変更, 57
- 標準ユーザー, 7

## ふ

- フォルダー
  - プロジェクトから変換, 80
  - プロジェクトへ変換, 79
- 復元
  - プロジェクト, 94
  - モジュール, 92
  - ユーザー情報, 98
  - Rational DOORS データベース, 99
- プロジェクト
  - アーカイブ, 90
  - 削除, 85
  - 削除の取り消し, 85
  - 作成
    - 空のプロジェクト, 75
    - 追加されたプロジェクト, 76
  - ページ, 85
  - フォルダーから変換, 79
  - フォルダーに変換, 80
  - 復元, 94
  - 編集
    - アクセス権, 82
    - プロパティ, 81
- プロジェクト開始ウィザード, 76
- プロジェクト管理者, 7
- プロジェクトの削除の取り消し, 85
- プロジェクトのページ, 85
- プロジェクトのプロパティ, 81

## へ

- ベースライン
  - 削除の許可, 53
- ベースライン・セット
  - インテリジェント・トレーサビリティ, 109
  - 作成, 120
  - 閉じる, 123

- モジュールのベース
  - ライン化, 121
  - リンク, 109, 113
- ベースライン・セット定義
  - アクセス制御, 119
  - コピー, 118
  - 削除, 125
  - 作成, 116
  - 説明, 115
  - 名称変更, 118
  - 表示, 119
- 変換
  - フォルダーから
    - プロジェクトへ, 79
  - プロジェクトから
    - フォルダーへ, 80
- 変更
  - データベースのログイン・ポリシー, 57
  - データベース名, 56
  - デフォルトの表示設定, 57
  - プロジェクトのアクセス
    - 権限, 82
  - UNIX 上でのデータベース・
    - サーバーのパスワード, 136
  - Windows 上でのデータベース・
    - サーバーのパスワード, 136
- 編集
  - グループ, 43
  - チェンジ・プロポーザル・
    - ユーザー, 132
  - パーティション定義, 160
  - プロジェクトのアクセス
    - 権限, 82
  - ユーザー, 30
  - RDS 使用時のユーザー, 36
- ほ
  - ホーム・データベース, 153

## む

- 無効化
  - グループ, 48
  - ユーザー, 41

## め

- 命名規則
  - グループ, 9
  - ユーザー, 6

## も

- モジュール
  - アーカイブ, 90
  - 復元, 92
  - レビューのために構成する, 128

## ゆ

- 有効化
  - グループ, 48
  - システム・ユーザー名, 59
  - ユーザー, 41
- ユーザー
  - 削除, 39
  - 作成, 24
  - 所属するグループの変更, 35
  - タイプ, 7
  - 編集, 30
  - 無効化と有効化, 41
  - 命名規則, 6
  - ユーザー・ログインの制御, 10
  - ユーザー・ログインの
    - 無効化, 58
  - RDS 使用時の編集, 36
  - ユーザーが使用できるパスワードの
    - タイプを制限, 64
  - ユーザー情報
    - アーカイブ, 97
    - 復元, 98

ユーザーのタイプ  
    カスタム・ユーザー, 8  
    管理者, 8  
    標準ユーザー, 7  
    プロジェクト管理者, 7  
ユーザー・ログインの制御, 10  
ユーザー  
    情報の表示, 23  
ユーザーのタイプ  
    データベース管理者, 7

## リ

リターン・ファイル, 154, 156  
リンクとベースライン・  
    セット, 109, 113

## れ

レガシー・データ, 19

## ろ

ログイン失敗, 14  
ログイン失敗時の対処, 14  
ログイン履歴ファイル, 66  
ログイン・ポリシー, 57  
ロケール  
    概要, 17  
    サポート対象, 18  
    変更, 19  
    ユーザー・オプション, 19

## I

IBM カスタマー・サポート, 203

## O

OLE オブジェクト  
    属性履歴での保存, 53

## R

Rational Directory Server に関して  
    は、RDS を参照

Rational DOORS アーカイブ, 88  
RDS

    グループおよびユーザーの  
        エクスポート, 51  
    コーポレート・モード, 49  
    スタンドアロン・モード, 49  
    設定, 50  
    について, 49  
    ユーザーの編集, 36

RDS へのグループおよびユーザーの  
    エクスポート, 51

## RIF

    データ・ロック, 183  
    ロックのリカバリー, 190  
    RIF の概要, 179

## RIF 定義

    概要, 180  
    削除, 186  
    作成, 182  
    編集, 185

## RIF パッケージ

    インポート, 187  
    エクスポート, 187  
    概要, 180  
    マージ, 189